

平成 24 年度
エコツアーリズム推進アドバイザー派遣事業
事例集

平成 25 年 3 月



平成 24 年度
エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集

<目次>

1. 本事例集について	1
2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について	3
2-1. 目的	3
2-2. 実施方法	3
2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング	6
3. アドバイザー派遣事業 平成 24 年度取組事例	7
3-1. 層雲峡観光協会（北海道上川町）	9
3-2. ふるさと体験学習協会（岩手県久慈市）	13
3-3. 二戸市（岩手県二戸市）	19
3-4. NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク（岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山 周辺地域）	25
3-5. 宮古市（岩手県宮古市）	33
3-6. 社団法人四万温泉協会（群馬県吾妻郡中之条町四万温泉地区）	37
3-7. ジオパーク下仁田協議会（群馬県下仁田町）	43
3-8. 武田の里協議会（茨城県行方市）	47
3-9. NPO 法人フジの森（東京都檜原村）	51
3-10. 小笠原エコツーリズム協議会（東京都小笠原村）	55
3-11. 富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン推進協議会（山梨県富士北麓地域）	63
3-12. 志々島大きな木プロジェクトの会（香川県三豊市）	67
3-13. グラウンドワーク大山蒜山（国立公園大山を中心とした地域）	73
3-14. NPO 法人あとう観光協会（山口県山口市）	85
3-15. 八代よかところ宣伝隊（熊本県八代市）	91
3-16. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県奄美市）	95
3-17. 南大東村（沖縄県島尻郡南大東村）	105
3-18. NPO 法人国頭ツーリズム協会（沖縄県国頭郡国頭村）	113
3-19. NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県八重山郡竹富町）	119

4. アドバイザー派遣報告会	129
4-1. 開催概要.....	131
4-2. 議事概要.....	133
参考 エコツーリズムについて	151
(1) エコツーリズムの基本知識.....	153
(2) エコツーリズムに取り組む地域への支援.....	161
(3) エコツーリズム推進法について.....	162

1. 本事例集について

地域の自然環境や歴史文化を対象として、その魅力を解説し、地域の観光に活かしながら、地域振興につなげていくエコツーリズムの推進に向けた取組が各地域で行われています。

平成 20 年 4 月にエコツーリズム推進法が施行され、環境省では本法に基づくエコツーリズム推進に向けた事業の一環として、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を実施してきました。

本事業は、エコツーリズム取組地域の中で、外部アドバイザーの助言・指導によってより良い取組の方向性を探ろうと希望する地域を対象として、専門知識を有するアドバイザーを派遣し、各々の地域の個別の状況・課題に対して、個別に助言・指導を行うものであり、平成 24 年度は過去最多の計 20 団体への派遣を行いました。

本事例集は、派遣地域とアドバイザーから提出いただいた報告レポートと、報告会の議事録を取りまとめたものです。また、巻末には、新たにエコツーリズムに取り組む地域に参考としていただくためにエコツーリズムと環境省の関連施策の概要を付記しました。

これからエコツーリズムに取り組もうと考えている地域や、取り組み始めて間もない地域、既に取り組む実践しており改善を目指す地域等のみなさまに、取組を進める上での参考資料としてご活用いただければ幸いです。

平成 25 年 3 月
環境省自然環境局総務課
自然ふれあい推進室

2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について

2-1. 目的

エコツーリズム取組地域の中で、外部アドバイザーの助言・指導によってより良い取組の方向性を探ろうと希望する地域を対象として、各々の地域の個別の状況・課題に対して個別に助言・指導を行うことで、エコツーリズムの推進を図ることを目的として、専門知識を有するアドバイザーの派遣を行った。

【過去のアドバイザー派遣団体数】

	17年度	18年度	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度 (本年度)	総計
派遣団体数	5団体	6団体	10団体	10団体	16団体	12団体	20団体	79団体

2-2. 実施方法

地域からの派遣申請を受け、予め就任を依頼してあるアドバイザーの専門性等を勘案して派遣アドバイザーの選定（マッチング）を行った後、アドバイザーが現地に直接訪問して個別の指導・助言を行う形式とした。具体的には、以下のような方法を採用した。

(1) 派遣対象

エコツーリズム推進に取り組む地域のうち、下記のような団体を対象とした。

- ・エコツーリズムや、地域の観光振興を図る目的で組織された協議会
- ・地域の観光協会、観光連盟、商工会議所、市町村の担当課等
- ・広域圏で形成された①、②の団体

なお、個別の団体・企業による職員向けの研修・勉強会を目的とする場合は対象外とした他、申請主体または関係団体として市町村の行政機関が参画していることを必須要件とした。

(2) アドバイザー

申請地域の抱える地域課題の内容や取組の熟度に応じた助言・指導ができるように、予め幅広い分野のアドバイザーの就任を依頼した。

また、環境省が就任を依頼しているアドバイザー以外であっても、申請地域で派遣を希望する有識者を、一定基準下で派遣できることとした。

【平成 24 年度 エコツーリズム推進アドバイザー（25 名）】

所属・所属	氏名（五十音順・敬称略）
北海道大学大学院 農学研究院 准教授	愛甲 哲也
公益財団法人尾瀬保護財団 企画課 主任	安類 智仁
有限会社オズ 代表取締役	江崎 貴久
鹿児島大学 名誉教授	大木 公彦
地域振興コンサルタント	緒川 弘孝
文教大学 国際学部国際観光学科 准教授	海津 ゆりえ
株式会社ジェイティービー 旅行事業本部 観光戦略部長	加藤 誠
公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー	川嶋 直
NPO 法人黒潮実感センター センター長／理事	神田 優
公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長	城戸 基秀
NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長	木村 宏
国際教養大学 国際連携部長／地域環境研究センター長	熊谷 嘉隆
東京情報大学 環境情報学科 教授	ケビン ショート
北海道大学 観光学高等研究センター 教授	敷田 麻実
環境映像ディレクター・プロデューサー	鈴木 順一郎
株式会社ツーリズムワールド 代表取締役	高梨 洋一郎
株式会社南信州観光公社 代表取締役社長	高橋 充
公益財団法人日本交通公社 観光調査部長	寺崎 竜雄
株式会社風の旅行社 代表取締役	原 優二
NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト	阪野 真人
一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー 国際観光推進員	ブラッド トウル
京都嵯峨芸術大学 芸術学部観光デザイン学科 教授	真板 昭夫
株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役	松田 光輝
有限会社屋久島野外活動総合センター 代表取締役	松本 毅
アイ・エス・ケー合同会社 代表	渡邊 法子

(3) 募集・派遣スケジュール

平成 24 年 9 月上旬から 2 週間の応募期間を取って募集を行い（ホームページ、環境省関連団体のメールマガジン他を活用）、9 月下旬に派遣実施地域を確定し、9 月下旬～10 月にかけて地域とアドバイザーとのマッチングを行い、11 月～平成 25 年 3 月にかけてアドバイザーの現地派遣を実施した。

【派遣実施スケジュール】

9 月 5 日～9 月 26 日	派遣地域の募集
9 月下旬～10 月	派遣地域の決定
	派遣地域とアドバイザーのマッチング
11 月～3 月	アドバイザー派遣の実施

(4) 派遣の条件等

派遣にあたっては、事業内で 30 地域・回（※1 回当たり 10 時間稼働を目安）を上限とし、アドバイザーの旅費（※現地までの交通費、現地での宿泊費・前後泊含む）及び謝金を事務局負担とした（※現地での移動費用、施設利用料、入場料、その他アドバイスの実施にあたって現地で発生した費用等は申請地域が負担）。

(5) 審査・選定

上記への公募に対して、下記の審査基準に基づいて書類審査を行い、総合的視野（地域間のバランスや、資源性のバランス、過去のエコツーリズム推進アドバイザー派遣実績、その他環境省関連事業の実績等）も考慮した上で選定を行った。

【審査基準】

- ・ 応募資格を満たしていること。
- ・ エコツーリズムに取り組む目的が明確であること。
- ・ 多様な主体が連携しながらエコツーリズムを持続的に取り組む体制がとれること。
- ・ 地域の現状や課題に対し、アドバイスを希望する内容が明確であること。
- ・ アドバイザーの助言や指導を取組に反映させる仕組みがあること。

2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング

派遣要請があった地域からの要望や地域の実情等を勘案し、アドバイザーの専門分野とのマッチングを行った。結果、派遣地域として 20 地域、アドバイザー 16 名（複数地域に派遣したアドバイザーあり）を決定した。

【派遣地域とアドバイザーのマッチング結果】

都道府県	地域	団体・組織	派遣アドバイザー	派遣日
北海道	上川町	社団法人層雲峡観光協会	松田 光輝氏	12/ 6～7
岩手県	久慈市	久慈市ふるさと体験学習協会	大木 公彦氏	11/21～22
岩手県	二戸市	二戸市	真板 昭夫氏	1/11～12
岩手県	雫石町	NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク	大木 公彦氏	11/24～25
			坂本 英俊氏*	
岩手県	宮古市	宮古市	高橋 充氏	1/29～30
群馬県	中之条町	社団法人四万温泉協会	小山 重幸氏*	12/12～13
群馬県	下仁田町	ジオパーク下仁田協議会	城戸 基秀氏	1/29～30
茨城県	行方市	武田の里協議会	高橋 充氏	11/26～27
東京都	檜原村	NPO 法人フジの森	真板 昭夫氏	2/21～22
東京都	小笠原村	小笠原エコツアーリズム協議会	愛甲 哲也氏	3/ 6～11
山梨県	富士山及び富士北麓地域	富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン推進協議会	松田 光輝氏	1/23～25
香川県	三豊市	志々島大きな木プロジェクト	高梨 洋一郎氏	1/20～21
鳥取県	大山町	グラウンドワーク大山蒜山	木村 宏氏	11/15～16
			川嶋 直氏	1/29～30
山口県	山口市	NPO 法人あとう観光協会	緒川 弘孝氏	11/27～29
熊本県	八代市	八代よかところ宣伝隊	高橋 充氏	1/18～19
鹿児島県	奄美市	奄美群島広域事務組合	海津 ゆりえ氏	3/14～15
沖縄県	南大東村	南大東村	真板 昭夫氏	1/29～30
沖縄県	国頭村	NPO 法人国頭ツアーリズム協会	川嶋 直氏	1/21～23
沖縄県	竹富町	NPO 法人西表島エコツアーリズム協会	江崎 貴久氏	12/ 3～ 6
宮城県	女川町	女川町竹浦ダイビング協議会	新井 章吾氏*	3/16～17

* 環境省が予め就任を依頼したアドバイザー以外で、地域から推薦があった有識者。

* 本事例集では、宮城県女川町の事例は掲載していない。

3. アドバイザー派遣事業 平成 24 年度取組事例

3-1. 層雲峡観光協会（北海道上川町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

エコツーリズムについてはこれまで取り組んで来ていなかった。山岳ガイドのツアーについては、これまでも実施されていたが、大雪山の麓のガイドツアーは昨年までは行っておらず、ガイド付き紅葉谷散策を今年試験的に無料で行うこととなっている。

氷瀑まつり期間中も宿泊者限定でのスノーシュー・ハイキングを開催している。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 24 年 12 月 6 日（木）～平成 24 年 12 月 7 日（金）
場 所	【層雲峡】紅葉谷、大函、流星・銀河の滝、【上川郊外】旭ヶ丘
アドバイザー	株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝 氏
スケジュール・方法	<p>【1日目】 上川町・層雲峡を視察（観光協会、ビジターセンター職員から説明を行う）</p> <p>【2日目】 松田氏よりエコツーリズムの説明と知床地区や他地域の先進地事例を講演いただく</p>



(3) アドバイスの内容

●12月6日（木）12：30～上川町・層雲峡視察

紅葉谷視察 → 大函 → 流星・銀河の滝 → 旭ヶ丘

雪が降り積もる中、また前日の強風で枝等が落ちているコンディションが悪い中、4ヶ所の視察となった。

層雲峡温泉にツアーでお越しになった方が見学する「流星の滝・銀河の滝」と、近年観光客が立ち寄りなくなった「大函」を見学後、冬場の見せ方のアドバイスとして、あえて駐車場の除雪をしないで苦労して見せる。その事により印象深いものとなるのではないかと。また、「大函」についても冬場は石狩川の水量が減るので夏場には見ることができない場所をガイドが付いて案内する。参加したお客はだれでも行ける場所ではないということから Blog、facebook 等にアップする確率が高くなり、層雲峡は魅力ある場所というイメージを広告宣伝する事無く覚えていただけ。今後の観光素材の見せ方（演出）について工夫が重要であるとアドバイスを受けた。旭ヶ丘視察時には女性目線を入れことが重要とアドバイスを受けた。

●12月7日（金）09：30～12：00

上川町・層雲峡地区ではエコツーリズムは行っておらず、初めにエコツーリズムや知床等の先進地の事例の講演をいただく

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムの理解を深める事ができ、研修会参加者の全員が興味を持った。また、上川町層雲峡でもエコツーリズムができる環境であると認識した方も多かった。

●今後の期待される効果

上川町層雲峡にある観光資源を保護しながら有効に利用するためにはエコツーリズムへの取組が必要であると理解した。今後地域全体で真剣に取り組まなければ他の地域に遅れを取るのでは、という危機感を感じた。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

研修会に参加した多くの方が上川町層雲峡でのエコツーリズムができる可能性が高いフィールドであると認識したようだが、松田様のような志の高い事業所がなければ継続はできないとも感じた。

●その他感想

今回の研修参加者は大変参考になる事例が多くあり自社で取り入れたいという意見が多く、松田様とは情報交換や実際に知床でのエコツーリズム体験等、今後も交流を続けていきたい等の意見があった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

(紅葉谷)

散策路入口までは層雲峡温泉から徒歩でも行ける場所であり、マップも作成されていることから気軽に散策できるコースとなっている。

環境は二次林ではあるがたいトドマツ等もあり、北海道らしい森林を満喫することができる。しかし、ロケーション等、一眼で分かる魅力的な資源が無いため観光的な価値は乏しいエリアでもある。

この資源を有効的に活用するためには、ガイドの存在が必要だと考えられる。クマゲラの食痕や多様な林相等、自然解説をする上でのネタはこと欠かないコースではある。

(大函)

整備された展望テラスから迫力ある層雲峡らしい溪谷を望むことができる。壁面は柱状節理で崩れる可能性があるため近づくことができないのが残念であるが、限定的な利用をすることにより安全対策を行うことは不可能ではない。

(流星・銀河の滝)

落差のある滝をすぐ真下から見学することができる層雲峡の代表的な観光地で、来訪者数が多い場所であるが、近年、利用者数が落ち込んでいる。駐車場から歩いてすぐの場所であるため、誰にでも気軽に見学することができる。しかし、滞在時間を有しない場所となっており、簡単に見ることができるのでその分感動が希薄である。

(旭ヶ丘)

十数億円の予算を投じ、オーベルジュと花のガーデンを建設中。天候が良ければ大雪山が望めるロケーションも素晴らしい場所である。近年、北海道では紫竹ガーデン等人気を呼んでいるが、魅力あるガーデンを維持するためには管理コストの捻出が課題である。

●アドバイス（講義等）の概要

今回は、悪天候のため黒岳ロープウェイの見学は取りやめとなった。見学した場所は、車でのアクセスが容易で、かつ車から降りて短時間で見学できる場所ばかりであった。

自然資源を魅力的に活用するためには、ストーリーが大切である。

簡単に短時間で見せるのではなく、そこまでのルートの作り方によっても感動の度合いは大きく変わる。

また、大函のような魅力的な観光資源ではあるが、崩落の危険性があるため近くで不特定多数の利用は難しい場所では限定的な利用を進めるのであれば、迫力ある資源を更に感動的に見せることも可能である。

この講演会では、ヒグマがいるため安全確保を行いながら利用調整地区として利用している知床五湖の事例を中心に行った。利用をコントロールすることにより、資源の魅力を更に高めた事例である。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

宿泊数の落ち込みを解消するために、新たな観光資源の発掘や既存の観光資源の魅力向上を模索し、意欲的に活動している。

宿泊者数を増やすためには、観光客の滞在時間を延ばすことと、宿泊しなければ見ることや体験ができない観光資源を積極的に打ち出す必要がある。例えば、夜や早朝の自然体験は、この地域に宿泊しなければならないので、ぜひ、取り組んで欲しい。

限られた観光資源を有効に活用するためには、自然ガイドの存在は有効であるため、自然ガイドの養成も徐々にであっても確実に行って欲しい。



3-2. ふるさと体験学習協会（岩手県久慈市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

久慈市（ふるさと体験学習協会）は、これまで教育旅行受け入れの体制整備に努め、平成 17 年度から県外の中高校生を中心に受け入れを行ってきた。教育旅行受入時の体験活動としては、久慈市の自然、伝統、文化等を活用した各種体験プログラムで対応しており、そのプログラムはエコツーリズムに通じるものと思われる。

今後は、教育旅行受入体制を活用しながら、エコツーリズムにも取り組みたいと考えている。また、同時にジオツーリズムにも取り組んでいるため、これらを有機的に関連付けさせ、最終的に交流人口の拡大及び地域の活性化につなげたい。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 24 年 11 月 21 日（水）～平成 24 年 11 月 22 日（木）
場 所	久慈市（各種体験フィールド、体験受入施設、宿泊施設）
アドバイザー	鹿児島大学 名誉教授 大木 公彦 氏
参加者	ふるさと体験学習協会職員、久慈市産業振興部交流促進課職員、久慈市産業振興部商工観光課職員、久慈琥珀博物館職員、宿泊施設社員、体験受入先の方々 計 10 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】 沿岸部体験フィールドの視察（トレッキング、サップ船クルーズ、琥珀採掘場）</p> <p>【2 日目】 農山村部体験フィールドの視察（洞窟探検、農業体験、そば打ち体験、木皮工芸等）</p> <p>※現在取り組んでいる教育旅行受入の体験フィールド及び体験受入施設を実際に見ていただき、エコツーリズムの関連性を見出し、具体的にエコツーリズムとしてどのような取組をすべきか助言をいただく。</p>



(3) アドバイスの内容

●エコツーリズムの意識啓発、方法等について

- ・ 地域住民にエコツーリズムの意識を根付かせるためには、まずは市内の生徒に、自分の地域の素晴らしさを理解させること。

●ガイド人材育成について

- ・ 博物館の学芸員や解説員と連携して、勉強会を重ねること。
- ・ 自治体、学校、NPO、企業、商工会議所等の連携も必要であること。

●環境教育について

- ・ 成果をあげている他自治体を参考にし、実際に担当者を招くこと。

●まとめ（交流人口、地域活性化について）

- ・ 市内の子どもたちが自分の地域の素晴らしさを知り、愛するところから出発し、先生や親を取り込むことが過疎化の歯止めにもなる。
- ・ 地域の活性化には若い力が必要であるため、市内の子どもたちに、体験学習を通じて「人は大地に生かされている」ことを知ってもらい、地域に住み、地域の大きな力となってもらう。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 改めて地域の良い点について認識することができた
- ・ 今後の具体的な取組方法を認識することができた
- ・ 誘客にあたっての当地域の PR ポイントが明確となった

●今後の期待される効果

- ・ 当地域のエコツーリズムを活用した取組についての、すすむべき方向が見えてきた。まずは、今回のアドバイス内容を広く関係者で共有することからはじめ、1つ1つの課題について、アドバイスいただいた解決策で乗り越えたいと考えている。
- ・ 今回のアドバイスによって、灯台下暗しで中々気付かなかった点や不要な固定観念があったこと等、自分たちの意識の改革にもつながった。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 体験学習の中に「宮沢賢治」の自然感との接点をアピールする手法。
- ・ 石灰岩、海洋性玄武岩、海洋底堆積物、陸源物質が混ざった付加体堆積物や琥珀を含む恐竜時代の地層が隆起し、風化浸食されることによって粘土鉱物が生成され、多くのミネラルが地下水に溶け込み、植物が根から吸収して素晴らしい久慈市の森や農作物を作り、その森を育むミネラル豊富な土壌（腐葉土）が雨で流され、川から海に流れ込むことで磯焼がなくなり、海藻が豊かな海を育み、多様な海産物を私たちが得ることができること。

●その他感想

- ・ アドバイザーの大木先生には、大変感謝している。我々が目指す「交流人口の拡大」、「地域活性化」を十分ご理解いただき、その上で、全国の事例を交えながら、適切なアドバイスをいただいた。短期間ではあったが、先生とともに地方の抱える悩みや地方の素晴らしさ、可能性について深く共有することができたと感じている。



内間木洞



侍石

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

鹿児島大学 名誉教授 大木 公彦 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

久慈市、ふるさと体験学習協会の「いわて久慈-こころの体験」の取組は、子どもたちが自然豊かな農村、山村、漁村に宿泊し、土地の人々との心のふれあいを通じて、自然と人との共生の素晴らしさを学ぶことにあり、大変魅力あるものになっています。特に、子どもたちが農山漁村に民泊し、地域の住民と交流する取組は素晴らしいと思います。また体験プログラムの種類が豊富で、目的に掲げている「参加する児童生徒等の新たな発見や感動する心、柔らかな感性や社会観を養い、生きる力を育む」ことができる内容だと思います。今後を見据え、ふるさと体験学習協会の組織を強化し、インストラクター等の人員確保と人材育成、新たな資源を活用した体験プログラムの調査と整備、農山漁村の民泊受入先の拡大に努力しているようです。その中で震災発生直後に首都圏の学校のキャンセルが相次いだようで、平成 23 年度の受入人数が大幅に減少したことから、風評被害を払拭し、誘客に努力する必要性を感じているようです。

●アドバイス（講義等）の概要

11 月 21 日、22 日に、沿岸部、農山村部のふるさと体験学習のフィールドを視察し、それぞれのフィールドで意見を述べさせていただきました。視察後、21 日は久慈市役所で打ち合わせ及びアドバイスを、22 日はエコトレッキング宿泊施設の平庭山荘で鹿児島市の取組等についてお話をさせていただきました。

久慈市が行っている素晴らしい体験学習に、更に多くの学校が参加していただくためには、1) ロコミが重要で、そのためには体験学習プログラムの質の高さが求められること、2) それぞれの体験学習プログラムがどのようにつながっているのか、受入側の皆さんがしっかりとその理念を共有すること、3) 大地の成り立ちや自然の摂理を子どもたちに理解させること、等が大切であることを述べさせていただきました。

短期的な取組として、琥珀や恐竜等の化石を産する久慈層群の白亜紀の地層をアピールすることを挙げさせていただきました。久慈層群は西日本に分布する同時代の地層に比べて固結度が低く、子どもでもアイスピックで化石を採集することができます。すでに恐竜の骨盤や歯の化石が見つかったので、子どもたちの大好きな恐竜化石を全面に出して誘致活動をすることも必要だと思います。また、岩手全体をイーハトーブ（ドリームランド）とみなした宮沢賢治は全国に多くのファンがいるので、体験学習の中に宮沢賢治の自然観との接点をアピールし、それぞれのフィールドに関連した宮沢賢治の童話の読み聞かせをすること等も、より多くの学校に参加していただくためには効果的ではないかと提言させていただきました。

長期的な取組として、地元の子ども全員が体験学習に参加できる手立てを考え、自分たちの住む久慈市の自然と人々の暮らしを理解していただくことを挙げさせていただきました。このことによって、子どもたちと先生、親との会話が生まれ、地域全体にエコツーリズム、環境教育に関する意識が高まると考えています。久慈市の素晴らしさを認識することによって、外へ出た子どもたちの一部でも久慈市へ戻り、自ら仕事を作り出し、生活することを考えるようになる可能性が出てくるのではないのでしょうか。鹿児島もそうですが、地方の過疎化が進む昨今、素晴らしい理念で体験学習を進めても、受け入れる側の高齢化によって継続が困難になることが多いと思います。若い人を育て、これからの地域の活性化に寄与していただくために、十年、二十年先を見据えた取組が望まれます。

ガイド人材育成のために、岩手県でエコツーリズムに理解のある講師を招き、講演会や勉強会を定期的に行うことが大切であることを挙げさせていただきました。講演会や勉強会に参加したガイド・インストラクターの皆さんが感動し、周囲の知人を誘うようになれば人材も増え、中味の濃いガイドができるのではないのでしょうか。久慈市では当然行われていることだと思いますが、人の輪を更に広げることによって、久慈市の取組がより深いものになると思います。エコツーリズムに理解のある岩手大学、岩手県立大学の先生を紹介させていただきました。また、

岩手県立博物館には 17 名の学芸員、12 名の解説員がおられます。多くの県立博物館では学芸員資格を持たない小中高の教諭が数年間、博物館に勤務していることを考えれば、岩手県立博物館との連携は重要だと思います。これらの方々以外にも岩手県には素晴らしい教育研究活動を行っている方がおられると思います。予算が厳しいことを承知しておりますが、より良い体験学習にしていくためにも講演会や勉強会を開催し、人の輪を広げることが大事だと思っております。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

久慈市の自然の素晴らしさは勿論ですが、お会いできた皆さんが魅力的な人ばかりでした。昭和 58 年から畜産を通じて首都圏との交流や、昭和 60 年に開村された「バッテリー村」のグリーン・ツーリズムの取組を始められたこととお聴きして、感動致しました。山形村時代の取組を発展させ、これまで積み重ねられて来たふるさと体験学習協会の「いわて久慈-こころの体験」は、今の日本で忘れ去られようとしている、人は大地に生かされているということを多くの子もたちに知っていただくための素晴らしい取組です。私の住む鹿児島もグリーン・ツーリズム、エコツーリズムが芽生え、活動が目に見えるようになりました。久慈市の取組を鹿児島にも伝えたいと思います。久慈市の「いわて久慈-こころの体験」が途絶えることなく発展していくことを祈念しております。

3-3. 二戸市 (岩手県二戸市)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

二戸市は、平成4年から巨木や伝統行事、物産や伝統技術、山や川、住民が価値あるものと認めたものを宝と位置付け、この宝を生かしたまちづくりを市民とともに進めてきた。知名度の高いA級観光資源は有しないが、食文化等地域に根ざした宝による観光の可能性を探るため、昨年10月、全国エコツーリズム大会を開催した。大会中のエコツアーにおいて参加者アンケートを実施したところ、もてなしや食文化等は高い評価を得た一方で、今後課題解決に向けて取り組むべき点として、ガイド人材の育成、ツーリズムの推進組織の設立、ツアー継続催行のための旅行事業者との連携が挙げられた。上記の取組を進めるに際しては、以前真板アドバイザーより提案のあった中核組織の立ち上げ、フェノロジーカレンダーづくり、ヤマブドウ酢の試作について今年度特に進めたいので、アドバイザーの助言を得たく本事業を申請した。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成25年1月11日(金)～平成25年1月12日(土)
場 所	岩手県二戸市内
ア ド バ イ ザ ー	京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏
参 加 者	えのみの会、よりゃんせ金田一、岩誦坊クラブ、浄門の里づくり協議会、九戸城ボランティアガイドの会、天台寺観光ボランティアガイドの会、二戸市観光協会、いわて銀河鉄道株式会社銀河鉄道観光、なにゃーと物産センター、天台の湯、二戸市地域おこし協力隊、二戸市商工観光課、同地域振興課、同浄法寺総合支所、未来政策研究所 計31名
スケジュール・方法	<p>【1日目】「ガイド人材の育成、ガイド制度づくり」及び「エコツアーの商品化と事業化」 二戸市役所(二戸市長とアドバイザー・地域振興に関する意見交換/月1エコツアーの検証を関係者間において実施。課題共有と解決に向けた取組方策を話し合い/市内飲食店において、着地型観光に関する今後の展開について話し合い)</p> <p>【2日目】「地域が協働する推進体制づくり」 カシオペアメッセ・なにゃーと、天台の湯(二戸市の観光戦略について、まずはランドオペレーターを設置し、連絡調整機関として動かしていくこと。観光戦略フェノロジーカレンダーを作成し、地元で行えるプログラムや観光分野以外の情報を把握すること等の助言を受けた/試作したヤマブドウ酢の試飲し、他に依頼したアンケートの集計を踏まえて再試作をすることとした)</p>



(3) アドバイスの内容

●月 1 エコツアーの検証

- ・ 自分たちの宝でもある豊かな自然を、地域の皆さんが誇り、お客様をおもてなしすることで、メッセージは十分伝わる。
- ・ 二戸の皆さんは、地域の宝を誇りに思い、もっともっと地域自慢をした方が良い。遠慮がちなのが美徳なのではない。
- ・ 現在の価格設定は低いのでは？提供する食べ物（昼食やおやつ）等に工夫をして、価格を上げて良い。
- ・ 情報は財産。その情報や体験に価値があり、その体験に見合った適正な価格を提供すると良い。
- ・ ツアー中の事故対策は、受入団体へ丸投げでは、地域の負担になるので×。
- ・ 今後は、健常者目線の「五感を活性化させるツアー」だけではなく、高齢者、身体障害者等、一人一人の体力や状況に合わせたツアー作りが課題。顧客に合わせて、プログラムやガイド技術に工夫する必要がある。

●今後の観光戦略について

- ・ 二戸市では、①宝さがしを行うセクション（地域振興）、②観光協会に代表される戦略展開をするセクションを、これからは合わせていく必要がある。そのために、組織を設立するということがあったが、組織が立ち上がらないのであれば、専門的に行う人がいれば動く可能性がある。その後、ナイズ化したときに委員会という形にすれば良い。
- ・ 各地区における月 1 エコツアーのプログラム開発を行うときに人が出られない時期があったり、可能でないことがあったり等の課題があるが、視覚的に情報を整理することと、議題を明確化するために、従来のフェノロジーカレンダーに観光協会が持つイベント情報や農林課や観光課が持つ情報を加えた新しい観光戦略フェノロジーカレンダーの作成をすることをお勧めする。これにより、視点地域振興の 1 点のみでなく、包括的な視野の確保を可能にし、大きな枠組みの中でツアーを作成することができる。全体を通した表が負担になるようであれば、イベント・食・歴史・地元の生活の 4 テーマから始めてみるのも手である。
- ・ この時、重要になるのがランドオペレーターになる。ランドオペレーターは、それらの情報を把握し、地元との調整を図り、でき上がったプログラムをエージェント（IGR 等）へ提供し集客を行う役目が望まれる。地元の調整とは、プログラム作りの時に、イベントをぶつけた方が良いのか、ぶつけない方が良いのかといったこと等である。
- ・ 心配な点は、自己満足的なプログラム作りに陥りやすいこと。地元がよしとしているプログラムが必ずしも顧客にフィットする形ではない。回避するために、地元の人とツアーをやっている人、顧客のニーズを知っている人の 3 者を含めたマッチング会議（仮）を行い、地域の宝をベースにニーズとひねりを加えて、提供していく必要がある。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 月1エコツアーの実施状況及び課題を関係者で共有することで次の展開に生かそうという機運が高まった
- ・ 今後の展開についてやるべき取組内容の優先順位を明確にすることができた

●今後の期待される効果

- ・ 各地で活動している地域づくり団体が、エコツアーガイドとして旅行者により上質なもてなしをするとともに参加者との交流を図ることで、経済的な効果をもたらし地域が元気なるような仕組みを構築していく。
- ・ 団体相互の情報共有や研鑽を図るとともに、旅行者を継続的に受入できるように市観光協会のランドオペレーター機能の向上を図っていく。
- ・ 造成したツアーを年間通じて催行するためにも、地域との協働によりフェノロジーカレンダー作りをするとともに、盛岡近郊に加えて八戸エリアからも誘客可能な旅行事業者と連携していく。



(5) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 二戸市は「宝探し」による地域づくりの発祥の地である。約 20 年にわたり、地域の宝探しをベースに、エコツーリズムを導入し、地域づくりに取り組んできた。昨年（10 月 21～23 日）、その成果をもとに「全国エコツーリズム大会 in 岩手にのへ ～みちのく原風景に生きる知恵をみる～奥南部の雑穀文化とエコツーリズム」を開催、各地区の団体による市内 5 地区におけるエコツアー及び三陸沿岸被災地の野田村へのツアーと 6 コースのツアーを実施した。各コースとも参加者から高い評価を得るとともに、幾多の改善点の指摘、アドバイスを得た。市内のエコツアー実施地区は、すでに年複数回のツアー開催の実績をもっている。全国エコツーリズム大会の際には、大会のテーマに合わせて、更にプログラムを練り上げた。
- ・ 二戸市では、当初より、全国エコツーリズム大会を観光振興、地域づくりに取り組んでいくためのステップボードと位置付けてきた。では、全国エコツーリズム大会を終えた後、何に、いかに取り組んでいくべきなのか。現在、まず全国エコツーリズム大会の成果と課題の共有し、観光振興戦略づくりに取り組もうとしている。具体的には観光振興推進のためのロードマップの作成を進めようとしている。

●アドバイス（講義等）の概要

（観光振興に取り組むための中核組織の起ち上げ）

- ・ 全国エコツーリズム大会の成功を地域の力として真に獲得していくためには、継続と、それを可能にする仕組みが必要。二戸市の観光振興、地域づくりという目標にたつならば、全市的な観光振興を担う戦略会議とでもいうべき中核組織の早急な起ち上げが必要である。
- ・ この組織は行政及び観光協会、各地区でプログラムを作成・実施している市民グループ等によって構成する。事業にはツアープログラム開発とともに物産開発も含む。

（エコツーリズムを軸とする観光振興のためのロードマップの提案）

- ・ 今回、これについてのアドバイスが求められた。提案したロードマップは 5 年を目途に、3 つの工程（体制・人材、プログラム・物産開発、マネジメント）について、3 つのステップ（基盤づくり、受入体制づくり、ブランド形成）によって目標を達成するというものである。

（ガイド・スキルの向上について）

- ・ 全国エコツーリズム大会における評価結果の一つは、インタープリテーションの方法、工程管理、リスク管理等ガイド・スキルの向上の必要性である。そこで日本エコツーリズム協会のガイド研修講座等、ガイド研修の機会を設けることを提案した。
- ・ またガイドの仲間同士で実際にコースを歩き、各自の情報や意見を交換し、全体としてコースの魅力を引き出し、伝えるインタープリテーションを工夫し合う機会をつくる等、仲間同士の研鑽も大切。

（フェノロジーカレンダーの作成）

- ・ 二戸市の宝の旬、イベントや祭り、各地区のツアー等を、すべて盛り込んだフェノロジーカレンダーを作成する。1 年間を一覧し、エコツアープログラムを開発していくのに有効である。エコツアープログラムを作成する中で、宝の深堀を行い、ストーリー性のあるプログラムの開発を進める。

（雑穀食を食べられる場づくりとその情報）

- ・ 食は二戸市の観光振興において占める比重は大きい。「雑穀文化」を中心にすえているが、どこで雑穀料理

を食べられるのか分からない。店のメニューの一つに加える等でも良いから雑穀料理を食べられる場所をつくる、あるいはその情報を入手可能にすることが必要。

(ヤマブドウ酢の試作について)

- ・ 物産開発として二戸市ではヤマブドウを素材とする新商品の開発が課題となっており、ヤマブドウ酢が候補にあがっていた。全国エコツーリズム大会を二戸市の前年に行った高島市には、伝統的な醸造法によって製造している 400 年の老舗酢醸造会社がある。真板が関わっている高島市商工会女性部ブランド研究会とも協力して試作品を製作、二戸市と高島市双方での販売をめざす。地域間の宝の交流による物産開発のモデルとなるのでは。まずはそのための資金探しの努力をする。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ これまで各地区のエコツアーや体験プログラムの作成、実施は、専ら地域振興課の担当であったが、今回、初めて商工観光課及び観光協会の担当者が合流しての会議が行われた。「業」として、経済効果を求められる段階に達したということである。商工観光課、観光協会も、二戸市の観光振興は、その資源の特性から見てエコツーリズムが核となるとの認識を示され、二戸市の観光振興の方向については、すでに合意がなされている。早々に全市的な中核的な組織を起ち上げ、既存の観光の観念に縛られることなく、宝探し 20 年の成果を存分に活用した観光振興を推進してほしい。「まちづくり推進委員会」というよき手本もある。
- ・ 二戸市は 20 年間にわたり膨大な宝を発掘している。現在使われているのはまだ一部に過ぎない。20 年経ち、宝の資料集や写真データ等の存在を知らない人たちも出てきている。このようなデータベースを各地区のグループも含め全体で共有し、活用してほしい。エコツアーや体験プログラムの資源となる宝が見出し得ると思う。
- ・ またデータによって宝を知るのみでなく、次には現場に出て、地元の人と話をすることで宝をつなぐストーリーもみえてくるはずである。中核組織は行動する組織であってほしい。
- ・ 今後の二戸市の観光振興を担う人材の登場を期待したい。宝を観光資源として見だし、地域の人たちと一緒に磨き、エコツアープログラムに仕立て、プロモーションから販売までもっていくことのできる人。エコツーリズム・プロデューサー、あるいはランドオペレーター、地域コーディネーター等、名称はともかく、地域の宝とツアー客のニーズをつなぐ人材。これが今求められている人材である。先のロードマップに従って進めていく中で、そのような人が登場してくることを期待したい。

3-4. NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク

(岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

東北の名峰「岩手山」は、南部富士と呼ばれる秀麗な火山峰で、山麓の広がる牧場や水田農村地帯から大きく雄大に望むことがきる岩手県のランドマークでもある。また、激しい火山活動を繰り返しながら成長した巨大な成層火山であることから、変化に富んだ火山地形が見られる。更に、岩手山を源とする葛根田川（北上川の支流）の源流域から秋田駒ヶ岳、八幡平にかけての山地には、世界遺産「白神山地のブナ林」にも匹敵する広大な天然林域が広がっている。岩手山は、日本を代表する美しい名峰であり、山岳としての雄大な眺望や大自然とあわせて、その山麓には緑豊かな農村地帯が広がっているにもかかわらず、観光といえば、冬のスキーや登山・ハイキング、山岳ドライブが主流で、観光客の減少傾向が続いている。そのような状況の中、岩手山の南麓地域では、小岩井農場でのバスツアー（小岩井農場物語）をはじめ、農業体験を取り入れた教育旅行等グリーン・ツーリズム、エコツーリズム、ニューツーリズムの動きが見られるようになり、NPO や地域住民、学識経験者が連携して、岩手山の美しい眺望や秋田駒ヶ岳、岩手山、八幡平と連なる火山性山岳とその山麓に広がる農村地帯の生物多様性豊かな自然環境を保全し、活用した環境保全型の観光により地域の活性化を進めたいという活動が始まっている。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 24 年 11 月 24 日（土）～平成 24 年 11 月 25 日（日）
場 所	雫石町及び岩手山周辺地域
ア ド バ イ ザ ー	株式会社マインドシェア 観光地域づくりプロデューサー 坂元 英俊氏 鹿兒島大学 名誉教授 大木 公彦氏
参 加 者	【講演（セミナー）】 しずくいし・いきいき暮らしネットワークの役員、会員等、環岩手山ニューツーリズム研究会の会員（大学教授、NPO 関係者等、全国名峰景観ツーリズムネットワークの役員、会員等、地元の観光協会、地元 NPO、自治体関係者等 計 39 名 【戦略会議】 計 17 名
スケジュール・方法	【1 日目】 大木氏、坂元氏と事前打ち合せ・情報交流 【2 日目】 現地視察（主に岩手山南麓）、地域の状況や取組についての説明、講演、意見交流会、終了後、雫石町内での戦略会議に大木氏、坂元氏が参加 ※なお、25 日の講演に先立ち、坂元氏は 23 日に磐梯山地域で開催されたエコツーリズムのシンポジウムに参加、24 日に裏磐梯でのエコツーリズムの取組について視察を実施。



(3) アドバイスの内容

坂元英俊先生からのアドバイスは、25日の講演や事前打ち合せ、戦略会議を通じて得ることができた。

25日の講演では、ホームページの内容を説明資料として、阿蘇で取り組まれているカルデラツーリズム等が紹介され、阿蘇地域で展開されているグリーン・ツーリズム、エコツーリズム、タウンツーリズムをうまく組み合わせた多種多様なツアープログラムを活かした「阿蘇観光博覧会」を事例に、観光業者でなく地域住民が主体となって観光による地域振興を進めることが、これからの岩手山周辺でエコツーリズムを進めるにあたって求められているという内容であった。

タウンツーリズムについては、寂れた阿蘇の商店街が訪れる観光客のために、通りに木を植えて緑豊かな魅力ある環境（景観等）に変身・再生させた場所（通り）がタウンツーリズムの人気のスポットになっているところを事例として紹介されたが、これについてもホームページでの動画等で情報発信がなされており、地域情報発信の重要性について話を聞くことができた。

大木公彦先生からのアドバイスも、25日の講演や事前打ち合せ、戦略会議を通じて得ることができた。

25日の講演では、火山学者・地質学者らしく、日本列島が世界的に見ても火山が多い国で、太平洋プレートと火山の生成を含め、火山の恵み等について紹介がなされ、東日本大震災等の教訓からの地学の重要性について話が聞けた。

また、桜島の自然等を中心にした鹿児島検定等地域紹介や子どもたちへの郷土紹介、住民全てが地域の案内人になること等、今自分たちが暮らしている大地の成り立ちを知って、そこに暮らす人全員が地域を紹介できるようになることが重要という内容であったが、大木先生は宮沢賢治が好きなので、宮沢賢治に係る話等、岩手山周辺でツーリズムを進めるにあたり、賢治の足跡や地学の話等を取り入れたい内容も多くあった。



坂元先生同行の裏磐梯視察



坂元先生の事例紹介



岩手山麓での活動紹介を聞く坂元先生と大木先生



坂元先生と大木先生を交えての意見交流会

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

九州が観光地づくりや観光振興において、先進地であることを改めて実感することができた。

岩手山周辺でのエコツーリズムをはじめ、観光振興の進め方と比べ、九州での観光振興は、県の予算からみても大きく差があり、九州では観光に対する県民、住民の考え方や観光関係者の覚悟や意気込みも違うと感じた。

同じ日本でも、東北から見れば、九州は遠い南の国、気候風土も人の気質も違い、暖かく雪のあまり降らない九州、人の手が山奥まで入り人工林が多い九州、台風の襲来が多く豪雨災害が多い九州、広大な草原の広がる阿蘇、海（錦江湾）に浮かび活発な火山噴火を続ける桜島等、東北地方とは別の環境の九州で展開されているニューツーリズムの動きは、ダイナミックかつ先進的で、参加者及び関係者にはかなりの刺激になった。

坂元先生の話からは、地域観光は、個々の人や施設が来訪者に観光サービスを提供するだけのスタイルは時代遅れになっていて、地域住民が主体的に活動し、地域をよくしよう、魅力的にしようという活動を通じ、地域全体として観光サービスを展開し、情報発信を行う必要があるという認識を共有することができた。

また、大木先生の話から、これまで、観光と無縁のように思われていた地質学者や火山学者等の学識者が観光振興の担い手になるということを知ることとなった。とりわけ、「地学」は防災的な観点もさることながら、地域を知る上で、また、地域を紹介する上で必要不可欠であり、ジオパークが脚光を浴びている今日、岩手山地域においても重要な視点であることを認識することになった。

そして、岩手山についても、秋田駒ヶ岳や八幡平とともに、火山という観点からその自然の魅力や資源性を再認識することができ、これまでは登山の対象、あるいは、ふるさとの風景をなす大きな山としての認識から、名峰火山「岩手山」について、色々な角度からの紹介や資源活用ができるという期待感を持つことができるようになり、そのためにも、今後、エコツアー等で岩手山やその周辺地域を紹介する場合、より地形学、地質学的な知見や情報の収集が必要と感じさせた。

●今後の期待される効果

坂元先生の講演から、東北地方（特に、東北北部）と九州との観光振興の取組の差についての現実を知ることになり、エコツーリズム等のニューツーリズムについても、これまでのように個々別々に取り組んでいては、ますますその差が広がり、観光客が減るばかりでなく、地域づくりや地域の活性化の面からも遅れ、集客的には魅力に乏しい地域になってしまうという認識を持つようになったことから、阿蘇の取組を参考にいろいろと連携の動きが生まれ、加速していくものと考えられる。

一方、大木先生の講演からは、火山国である日本の自然の特徴や素晴らしさを知ることができた。このことにより、ともすれば、近視眼的になっていた地域の紹介についても、よりグローバルにとらえて、専門家の知見をもって紹介できるようになれば、観光振興や地域振興の観点及び地域資源の保全活用にも資することができると認識できた。

今後、岩手山や秋田駒ヶ岳、八幡平の大自然の環境保全と資源利用について、広域的なツーリズム連携の動きとあわせ、観光についても、地質学者、火山学者、植生や生態系の専門家、景観の専門家等、多様な知識を有する人材が係わる気運が高まり、これまであまり紹介されてこなかった火山としての魅力や資源性について情報発信を行うことができるとともに、資源の保全と活用が進むと期待される。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

阿蘇、桜島という九州を代表する有名スポットとそれら火山をシンボルとする地域で展開される観光振興は、九州という土地柄や観光にかける地域性等正直言って、岩手山地域が参考にするには、差が大き過ぎるかも知れないが、その阿蘇、桜島で学ぶべき大きな点は、坂元氏、大木氏の両リーダーともに、いわゆる観光業者でなく、地域の繁栄や元気づくりに意欲を見せるシンクタンクであり、学識経験者であり、地域の魅力を引き出すことで観光振興につなげていることである。

日本に多く見られる従来型観光地は、個々の施設経営者がそれぞれ思い思いに施設を大きくし、収容能力を高めることで誘客に務め、その結果、地域としては調和のとれていない魅力に乏しい場所になってしまったということであるが、阿蘇地域では、黒川温泉に例をみるように、全国に先駆け、寂れかけた観光地を地域全体としての魅力が高まるよう景観や雰囲気をつし、調和を考えながら、魅力的な観光地に再生させていった事例がある。

とりわけ、寂れた阿蘇の商店街が訪れる観光客のために、通りに木を植えて緑豊かで魅力ある景観・雰囲気に変身・再生させた場所（通り）がタウンツーリズムの人気スポットになったという事例は、鶯宿温泉等岩手山に近い雫石町の温泉地で参考にしたい事例である。

また、桜島周辺（鹿児島錦江湾地域）で取り組まれているジオパークや鹿児島検定の事業は、今まで観光振興を考える上であまり認識されていなかった「大地の成り立ち」という大きなストーリー（物語）を地域住民に理解してもらい、住民全員が来訪者に地域を紹介できるようにするための方法ということを紹介してもらい、今後、全国に誇る名峰火山の岩手山や秋田駒ヶ岳、八幡平を有するこの地域でエコツーリズムを進める上で参考になった。

●その他感想

大木公彦先生は会うまでは、火山学者、地質学者ということで、難しそうな学者（大学研究者）をイメージしていたが、実際に会うとその風貌と人柄にとっても好感を持つことができた。

坂元先生、大木先生には、これを機会に同じく名峰火山をシンボルとする地域として、今後も交流を続け、エコツーリズムを進めるにあたり、ご指導ご助言ご協力をいただきたいと願っている。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

鹿児島大学 名誉教授 大木 公彦 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

岩手山は南部富士と呼ばれる美しい山です。その裾野は広く、活火山のめぐみを受けて酪農や農業が行われています。岩手山では変化に富む火山地形が見られ、広大な自然林が広がっているためにスキー、登山、ハイキング等に多くの人が訪れ、観光地として有名ですが、最近は山並みの道路をドライブすることが主流となり、滞在型の観光客の減少が続いているようです。このような中で、岩手山の南麓では、小岩井農場を核とした岩手県教育旅行、1) ガイド付きツアー「宮沢賢治と小岩井農場物語」、2) 岩手の三大文化巡り、3) 三陸復興支援と小岩井農場の旅～防災教育と環境学習、が行われ、更に農業体験を取り入れたグリーン・ツーリズム、エコツーリズムの活動が始まっているようです。岩手山やそれに連なる山々の麓に広がる農村部の豊かな自然環境を保全し、その自然環境を活かすさまざまな取組が模索され、実行されつつあります。

●アドバイス（講義等）の概要

一般に、エコツーリズムの活動を行う場合、景観や人々の暮らしを中心に、その地域の自然、歴史、文化を紹介することが多いのですが、その地域を含む大地の成り立ちや、大地そのものの恵みを紹介することは少ないような気がします。盛岡市や雫石町で行った会議や講演を通じて、岩手山を中心にエコツーリズムの活動を行う人たちが、まずは岩手山という活火山がどうして盛岡の北東方に存在するのか、その理由を地球規模の視点で捉える必要があることを述べさせていただきました。日本には岩手山のような活火山が110も存在するのは何故か、太平洋プレートやフィリピン海プレートが沈み込む海溝とマグマの発生する場所、マグマが上昇して形作られる火山帯との関係を示しながら説明致しました。更に、火山は災害をもたらすこともあるが、それを上回る恵みを得られることを知っていただきました。火山活動の産物である温泉や鉱物資源、ミネラルの豊富な地下水、その水を吸収して育つ植物や農作物等、私たちの生活に多くの恵みをもたらします。火山の周辺に住む人々の全員が大地の成り立ちを知り、その大地からの恵みをいただいて生活していることを実感することがエコツーリズムの取組にとって大切だと思います。その上で火山と暮らす住民全員が自分の住む地域の素晴らしさを来訪者に伝えることが重要だと思います。世界的に見れば火山の存在する場所は極めて少なく、火山の無い国の人々にとって活火山そのものだけでも魅力的で観光の対象であるはずですが、その活火山の魅力をもっと引き出すためには、活火山と共存する人の暮らしをアピールする必要があります。私たちが大地に活かされていることを、童話を通じて伝えようと試みた人に岩手の生んだ宮沢賢治がいます。宮沢賢治の童話を教材として取り入れている学校は日本中にあります。宮沢賢治がイーハトーブ（ドリームランド）とした岩手の皆さんが、童話の読み聞かせや勉強会等をエコツーリズムのプログラムに積極的に取り入れることによって、多くの方が岩手を訪れ、大地の成り立ち、火山の恵みや人の生き方を学ぶことができる機会を得ることにつながります。

講演では鹿児島大学総合研究博物館が行っている「かごしまフィールドミュージアム」の取組について紹介しました。地域に住む人たちが中心となり、自治体が協力して地域の貴重な文化財や資料を掘り起こし、それぞれの分野に関連する鹿児島大学のフィールドミュージアムアドバイザーの先生がアドバイスを行うプロジェクトです。更に自治体や企業の支援を受けて、それらの貴重な文化財や資料を保存し、教育に活用していただく取組を行っています。特に、博物館へ持ってくることでできない地層や遺跡の現地保存に力を入れ、それらを国県市町村の文化財に指定していただく努力を行っています。岩手山の景観に加え、大地を形作る地形地質、動植物、岩手山の山麓に人が住むことによって生み出された歴史文化遺産の掘り起こし、それらの意味付けを自治体の支援を得ながら、大学や博物館の研究者の協力を得て進めて行くことがエコツーリズムの活動を深めるために必要であると提言させ

ていただきました。岩手大学には博物館があり、岩手県立博物館には17名の学芸員、12名の解説員がおられます。多くの県立博物館では学芸員資格を持たない小中高の教諭が数年間、博物館に勤務していることを考えれば、岩手県立博物館との連携は重要だと思います。

講演の最後に、桜島のジオパークへ向けての取組について述べさせていただきました。住民・自治体・専門家のそれぞれが自分の役割を理解し、連携することが不可欠ですが、あくまでも住民が主役で、自治体と専門家は住民の意識、知識が深まるように支援することが成功への近道だと思います。特に、専門家はアドバイザーに徹し、地域住民自らが育っていくことを補助する仕組みを作ることの重要性を述べさせていただきました。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

岩手県雫石町では小岩井農場を中心に、活火山とそこに住む人たちの生活を理解していただくための取組が行われています。活火山である岩手山とその山麓地域は、環境教育や防災教育につながる素晴らしいエコツーリズムを構築する最適な場所であると思います。それは岩手が生んだ宮沢賢治が愛し、農民と自然との共存を模索した場所であるからです。美しい岩手山と裾野に広がる牧場や農地の景観を多くの日本人に見ていただきたいと思います。そして都会に住む人々が一次産業を営む地方の人々に支えられていることを、エコツーリズムの取組を通じて実感していただきたいと心から願っています。岩手山を愛する雫石町の皆さまの活動がますます発展していくことを祈念致しております。

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

東北の名峰「岩手山」は、南部富士と呼ばれる秀麗な火山峰で、標高 2038 メートルである。古くから山岳信仰の対象であった山で、巖鷲（がんにゅ）山とも呼ばれた。岩手山周辺山麓に広がる牧場や水田、畑地帯からも雄大に望むことができることから、岩手県のランドマークになっている。また、激しい火山活動を繰り返りながら成長した巨大な成層火山であることから、変化に富んだ火山地形が見られる。岩手山を源とする葛根田川（北上川の支流）の源流域から秋田駒ヶ岳、八幡平にかけての山地には、世界遺産「白神山地のブナ林」にも匹敵する広大な天然林域が広がっている。

岩手山は、日本を代表する美しい名峰であり、山岳としての雄大な眺望や大自然とあわせて、その山麓には緑豊かな農村地帯が広がっているが、観光といえば、従来型の冬のスキーや登山・ハイキング、山岳ドライブが主流で、観光客の減少傾向が続いている。

近年、岩手山の南麓地域では、小岩井農場でのバスツアー（小岩井農場物語）をはじめ、農業体験を取り入れた教育旅行等グリーン・ツーリズム、エコツーリズム、ニューツーリズムの動きが見られるようになり、NPO や地域住民、学識経験者が連携して、岩手山の美しい眺望や秋田駒ヶ岳、岩手山、八幡平と連なる火山性山岳とその山麓に広がる農村地帯の生物多様性豊かな自然環境を保全・活用した環境保全型の観光により地域の活性化を進めたいという活動が始まっている。

●アドバイス（講義等）の概要

阿蘇地域（1市6町村）は、10年前（平成14年）に観光客が1800万人も訪れているのに、商店街は寂れ、消えゆく農村集落も出始めていた。また、観光は有名スポットを巡り、温泉に入り、物産館でお土産を購入するといったパターンが主流だった。このままでは、近未来において、阿蘇の魅力や暮らしの継続ができなくなる危機感を抱いていた。

そこで、阿蘇の自然や歴史・文化を案内する自然案内人協会を平成15年に立ち上げ、この年の11月には全国エコツーリズム大会 in 阿蘇を開催し、エコツーリズムに拍車がかかった。また、観光客が訪れていなかった商店街や農村集落は、それぞれの地域の魅力を掘り起こし、その上で商店街は商店の商品を見直し、夏は商店街が日陰になる成木を植え、食べ歩き散策ツアー等の提供を行った。農村集落は案内人を育成し、食や宿泊等、その地域の農家民宿、農家レストラン、農業体験等を活用し、いずれも面的な展開ができるように地域づくりを行ってきた。訪れたお客様が地域に滞在し、地元の人と交流する滞在交流型の旅のスタイルの推進である。

こういった取組を、地元の人たちを主役にした動画サイトでの紹介を交えて説明した。観光から地域を眺めるのではなく、地域づくりを進めながらツーリズムにも取り組み、人が訪れることで地域も再活性化しようという試みである。しかも、農村のグリーン・ツーリズム、商店街や温泉街のタウンツーリズム、自然や歴史・文化を楽しむエコツーリズムを地域で相互に関連づけ、阿蘇カルデラツーリズムとして一体的に取り組んだ。

その結果、阿蘇地域内に32の面的な滞在交流のツーリズム地域ができあがり、その地域をパビリオンに見立て、阿蘇地域全体を博覧会場に設定した阿蘇カルデラツーリズム博覧会（阿蘇ゆるっと博）を開催した。これは、2011年3月12日からスタートした九州新幹線鹿児島ルートと合わせて、2012年3月31日までの1年間にわたり、阿蘇地域の滞在交流型のツーリズムを広報・誘客する取組でもあった。この取組は、イベントではないので、現在も地域づくりとツーリズムは、一般旅行者にも観光商品にも活用され、阿蘇カルデラツーリズムとして続いている。これらの取組から分かるように、観光業者でなく地域住民が主体となって、自慢できる地域、お客様に訪問先として選ばれる地域づくりが観光になるような取組を進めることが、岩手山周辺でのエコツーリズムにつながっていくのではないかと。ツーリズムは、単なる体験プログラムやツアーではなく、地域づくりもともない地域の再活性化もあわせて行うことが大切である。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

岩手山周辺地域は、岩手県立大学のキャンパスや網張ビジターセンター、安比高原自然学校、NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、小岩井農場等、数多くの施設や団体が活動している。こういった施設や団体は、訪問者に対して地域に関する独自の案内や体験プログラムを提供しているが、相互に連携した情報の提供やそれぞれの体験プログラムを組み合わせ、地域に滞在していただく工夫が行われておらず、お互いの施設や団体は、知っているものの、ばらばらに存在している状況である。

従って、岩手県大が学（地域の価値付け）の面でサポートし、安比自然学校は自然の中にある価値を創造した春夏秋冬のエコツアー提供や地域経済の衰退を危惧した取組を進める。しずくいし・いきいき暮らしネットワークは田植え・収穫・畜産・文化・民泊等の体験を教育旅行から、一般の人々の気軽な参加もできるような取組に展開する。小岩井農場は歴史や文化に基づくエコツアーと農場周辺のツアーと組み合わせる。これらの取組と地域の持つ特性や魅力を最大限引き出し、コンセプトを設定して、岩手山周辺地域に滞在しながら、時間・空間を楽しめるような仕組づくりが必要である。

そのためには、今回の岩手山名峰景観ツーリズムのフォーラムをきっかけにして集まれた皆様で、まずは協議会を立ち上げて、地域連携の具体的な取組について話し合う機会を作ることが重要である。また、施設や団体が位置する地域の再活性化についても協議し、滞在交流の場としての地域づくりを同時に行うことも必要である。また、岩木山のエコツーリズムフォーラムに先立ち、磐梯山エコツーリズムシンポジウム参加アドバイスと取組の視察もおこなった。

福島県磐梯山は、東北地方でも有数の名峰火山で、猪苗代湖をはじめ五色沼や桧原湖等の大小 300 もの湖や沼が麓に広がっており、エコツーリズムの先進地域でもある。

特に、①自然景観の多様性の活用、②会津藩等独自の歴史の活用、③自然と人が共生してきた里山の文化の活用等地域に価値をつける取組が進められている。磐梯山ジオパーク協議会や NPO 法人こどもの森ネットワーク、裏磐梯エコツーリズム協会等の話を伺うと、それぞれが独立した取組を行っている。

しかし、磐梯山ジオパーク協議会が設立されたことにより、それぞれの団体の強みを活かし、連携が強まった経緯もあり、今後、岩手山周辺も広域的な連携を進める中で、今回の名峰岩手山エコツーリズムフォーラムを中心となって開催した NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワークが、このフォーラムをきっかけにして、環岩手山周辺地域の広域連携エコツーリズムを推進する素地ができた。また、磐梯山や岩木山、鳥海山等東北における名峰景観ツーリズムとしての視点の共有化も図られた。

3-5. 宮古市（岩手県宮古市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

閉伊川地域の上流から下流までを体験フィールドとした森川海体験交流事業、震災復興事業として外部の専門家等の支援を受けて開催したエコウォーク大会を実施している。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 29 日（火）～平成 25 年 1 月 30 日（水）
場 所	【現地視察】 宮古市区界地区（森の体験活動場所、区界高原ウォーキングセンター付近） 宮古市茂市地区（川の体験活動場所、りば一ぱくにいさと付近） 宮古市赤前地区（海の体験活動場所、堀内漁港付近） 【報告検討会】 宮古市役所分庁舎
アドバイザー	株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏
参加者	【現地視察】 森川海体験交流事業実行委員会事務局、体験実践者 計 3 名 【報告検討会】 森川海体験交流事業実行委員会構成団体、体験実践者等 計 13 名。
スケジュール・方法	【1日目】 実行委員会事務局等（体験実践者）と現地視察 体験型観光とのマッチングのアドバイス、新たな体験メニューの提案等のアドバイス 【2日目】 報告検討会、 森川海体験交流事業の報告反省会 森川海体験交流事業の報告反省会 ワンバス対応に可能な体制づくりの助言、アドバイス 体験受入コーディネートの提案等のアドバイス 体験実践者との地域ネットワークを通じた連携づくり 森川海体験交流事業の新メニューの提案等のアドバイス 将来的には教育旅行に対応できる運営体制づくり 等



(3) アドバイスの内容

●現地視察時

(新たな体験活動の提案について)

- ・ 道の駅やまびこ館を会場に南部木挽き唄大会があるようだが、南部木挽き唄体験をしても良いのではないかと。木挽き唄の歴史を学んだり、実際に唄ってみてもらっても良い。また、閉伊川を利用しやすいように関係者との調整を図ることが重要である。
- ・ 1泊2日を想定した体験スケジュールの移動時間について
→移動時間は大体4時間位は問題ないと思われる。宮古到着が遅くなった場合には、翌日の体験メニューにもよるが事前に参加者が取り組めるものがあれば良い。



●報告検討会

(参加費用とスタッフ体制について)

- ・ 森川海体験交流事業での参加費1,000円は妥当であるが、事業の誘客を図る場合だと安いと思われる。教育旅行につながるのであれば、安全確保は勿論のこと、バス1台で複数箇所をまわる体験を検討しても良い。素材はたくさんあるのでプログラムは作れると思う。約200人が民泊に来るが、複数の体験に分かれて取り組んでいる。今のままの交流事業として続けていくのか、旅行会社等に商品として売り込んでいくのか検討が必要だが、実際活動しながら進めていけば良いと思う。子どもが対象の事業のようだが、企業研修や人材育成向けの商品も視野に入れると良いと思う。

(閉伊川をキーワードとして行ったが、長野県の天竜川ではどのような体験があるのか)

- ・ 川でのラフティング、溪流釣り、稚魚の放流等があり関係機関との調整を行っている。体験実践者との地域間の連携が必要となる。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 体験活動が地域にもたらす効果として、人のつながり、この地域にしかないもの、地域の暮らしに関わっていることが感じられました。

●今後の期待される効果

- ・ 教育旅行に向けたワンバス対応や体験実践者、地域との暮らしに関わる活動を展開していきたいと考えます。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 民泊に関する内容では、地域事情にもよりますが、実際の受入体制やプログラム、料金体系等の紹介があり、参考になりました。

●その他感想

- ・ 官民協働で一緒に取り組むことが重要であることが分かりました。より幅広い協力を得るためには、当該地域の豊かな自然を活かしたエコツーリズムの推進が地域へもたらす効用について、観光事業者、プログラム提供者以外にも情報発信する必要があるため、商品化を目指すことも必要であることが分かりました。



(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

盛岡駅より路線バスで約 50 分のところに位置する区界ウォーキングセンターにて、上記実行委員会事務局の宮古市商業観光課おもてなし観光担当の 2 名と合流して打ち合わせを行った。そこで将来的には教育旅行の受入を目指したいこと、受入窓口体制としては宮古市観光協会が望ましいと考えていることを確認した。「森の体験」として閉伊川の水源トレッキング、兜明神岳登山、落ち葉コースター作りの説明を受けた。次に道の駅やまびこ館で昼食となったが、昼食場所としては 120~150 名程の収容能力が見込まれた。また、木挽き唄や大根の煮しめの全国大会も開催されているとのことだった。その後、リバーパークにいさとに移動し、「川の体験」について、さんりく ESD 閉伊川大学校より体験内容の説明を受けたが、バスの寄り付きや、川の流れ及び遊水場の確保等、川で遊ぶ楽しさも加味した川辺での環境学習を行うための条件的には最高レベルだと感じた。ただ、震災の際にウェットスーツ等の道具や保管場所が流されてしまったとのことで、その辺の対策を講じる必要はある。最後に「海の体験」について海生物レプリカ作り&藻場干潟の会場の視察を行い、加えて浄土ヶ浜のビジターセンターやレストハウス、田老地区の学ぶ防災のフィールドの視察も行った。沿岸部にはやはり震災の爪痕が痛々しく残っており、そうした中でも前を向いて新たな事業にも取り組んで行く姿勢の必要性を感じた。

●アドバイス（講義等）の概要

翌日 10:00 からの意見交換会には各地漁協、森林組合、商工会議所、PTA 連合会、ESD、環境省、宮古市の各関係者 15 名ほどが参加した。森・川・海体験交流事業の実施報告を行ってから、南信州での教育旅行の受入について、利用先、民泊の受入体制等について質問が出た。また、地元の学校関係者から地域を知る機会としても有効との意見や、宮古には豊富な自然があり、その自然を活かせるようなメニュー作りやそれに伴った整備が必要という意見も出た。教育旅行を受け入れるにはまだまだ時間が必要で、地道に経験を重ねることが大事だとの声もあった。自分からは、既に交流事業を手掛けているという事実があり、一步前に進んでいるので、臆せず教育旅行を誘致するための努力をしてもらいたいこと、これから震災を乗り越えて行く経験そのものも財産となり、企業や組織の人材育成研修の場としての企画も可能であり、そうしたことが受け入れられる所がこれから必要とされるのでともに前を向いて頑張ろうとの話をした。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

宮古市の交流事業はまだ始まったばかりであるが、前向きに捉えている方々がおり、そのまま前を向いて進めて行けば、道は開かれるものと思う。具体的には都心から盛岡駅までは 2 時間少々なので、そこから 1 時間前後に位置する区界ウォーキングセンターや道の駅やまびこ館で、水源トレッキング（雨天時：コースター作りと森林の機能を学ぶ講座）や、木挽き唄講座、大根煮しめ料理作り、野菜の植え付けや収穫体験等を選択制で行い、午後 3 時頃に宮古市内に入り、学ぶ防災ガイドを全員で受け宿舎に入る。翌日は閉伊川での川辺の環境学習、川流れ体験&レスキュー講座や、藻場干潟観察、さっぱ船体験等を選択で行い、浄土ヶ浜レストハウスや道の駅での昼食といった流れで 120 名程度なら充分受入が可能かと思われる。まずは宮古市おもてなし観光担当と実行委員会で、誘客パンフレットを作り、首都圏や札幌の旅行会社へアプローチを試みるのが良いのではないだろうか。

3-6. 社団法人四万温泉協会（群馬県吾妻郡中之条町四万温泉地区）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

現在、四万温泉協会では、地域づくり委員会を組織し、地域住民が主体となって四万温泉地区を活性化させる活動を行っており、委員会内で「街」グループと「自然」グループに分かれて活性化のための活動を行っている。「街」グループでは、温泉街の空店舗対策として貸店舗活動や街中のコミュニティーでの歴史・文化・自然の展示等を行っている。「自然」グループでは、四万温泉地区内にポケットパークを整備して、自然を楽しみながら休息できる場づくりや周辺散策路等の整備・維持管理を行っている。

今回のアドバイザーの助言や指導を元に、「こしきの頭開拓ツアー（仮）」の詳細計画を作成し、平成25年7月31日までにツアー（モデルツアーも含む）を実施し、登山道の有効活用を進めたい。

当協会の地域づくり委員会のメンバーが直接アドバイザーから助言・指導を受けることにより、地域住民が作る上質なエコツアーの企画ができ、当地域の観光振興・地域振興に寄与することができる。また、委員会の構成員は主に地域住民によって組織されていることから、エコツーリズムの理念の普及啓発にも寄与できる。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成24年12月12日（水）～13日（木）
場 所	群馬県吾妻郡中之条町四万 水晶山、奥四万湖、温泉街 等
ア ド バ イ ザ ー	株式会社日本旅行 トムソーヤクラブ 小山重幸氏
参 加 者	四万温泉協会、地域づくり委員会、中之条町観光商工課、林野庁吾妻森林管理署、環境省万座自然保護官事務所、中之条観光ガイドボランティアセンター、グリーンディスカバリー
スケジュール・方法	<p>【1日目】 水晶山登山道視察、日向見薬師堂、奥四万湖、甌穴、足湯・飲泉所・公共浴場や温泉街の視察、懇親会</p> <p>【2日目】 国立公園について説明、講義（四万温泉の自然と歴史、文化、温泉を組み合わせたエコツアーとして商品を作る上でのポイントについて）、意見交換会（登山道・遊歩道等の活用方法と今後の展開について）</p>



（中之条町観光協会 HP より）



（中之条町観光協会 HP より）

(3) アドバイスの内容

●現地視察会、懇親会

- ・ 四万温泉協会に集合し、参加者の自己紹介後に、水晶山登山道の入口の看板にて、以前登った時の写真をまじえてのコースの説明。実際に水晶もあるので、「子どもを対象に水晶採掘ツアー」等を考案してみてもとの、アドバイスを受ける。
- ・ 奥四万湖視察では、こしきの湯内にある、奥四万湖周辺の模型を使って、木の根宿、こしきの頭等の位置関係を説明、その後、実際に登山道に入口や湖を周遊視察。
- ・ 花魁屋敷、石楠花（花言葉：荘厳）の滝、摩耶の滝等のネーミングが良いので、名前をうまく使っていきべきである。また、日向見薬師堂、甌穴、足湯・飲泉所・公共浴場や温泉街の視察では、各観光名所を点ではなく、それらに線としての物語、ストーリー性を考案する。日帰りでは回りきれないような魅力あるコースづくりをとのアドバイスを受ける。普段私達は、全然何とも思っていなかった各観光名所を、再認識させてくれた。
- ・ 懇親会では、地域と行政、関係団体との連携がこんなに取れている地域が珍しいとの感想、また、若い人たちが地域を良くしていきたいとの意気込みを感じる、ぜひ、今後も続けていって欲しいとの言葉に、今後もアドバイスをいただきたいとの声が多数あった。

●講義、意見交換会

(国立公園についての説明／黒江氏)

- ・ 国立公園についての説明が自然保護官よりあった。四万温泉は上信越高原国立公園（日本では 2 番目の広さ）内にある。昭和 24 年 9 月に国立公園の指定を受け、現在は、第 2 種特別地域になる。
- ・ 小山氏の講義（四万温泉の自然と歴史、文化、温泉を組み合わせたエコツアーとして商品を作る上でのポイントについて）

(小山氏が手がけているトムソーヤクラブについての話の内容)

- ・ 群馬県南牧村、静岡県土肥温泉等の事例について話を伺った。
- ・ 1 人当たりの国内宿泊旅行回数は 1.56 回／年間、宿泊数は 2.39 泊／年間
- ・ 国内旅行に行こうと思った目的は「自然景観を見る・触れる」が 62%で 1 位。
- ・ 中高年（特に 55～64 才位）の旅行市場も共通指向であるが、適当なツアーがないとの意見が多い。ただ、1 日 4 時間、10 キロメートル程度が抵抗なく受け入れられるツアーコース。
- ・ 自然観賞の旅、癒しの旅、歴史文化遺跡等を訪ね学ぶ旅を求め中、地域の特色、人々とのふれあい、食の楽しみ等の接したいと望んでいる。
- ・ 浜辺や高原等自然に囲まれてのんびり過ごす旅行、エコツアーは、長期旅行の傾向が観察されてきている。
- ・ エコツアーはまだあまり旅行商品化されていないので、メディアへの認知を高めるのと旅行会社の積極的な対応と商品化が望まれる。
- ・ 情報普及にインターネットを活用する。
- ・ 以上の話を拝聴しまして、関係者の多くは、上信越高原国立公園内四万温泉の特色を活用した、例えば長期湯治と自然体験等の商品化が必要であり早急に検討に検討したいとのことである。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 小山氏の講演、意見交換、現地視察での意見聴取等を受け、参加者、関係者、事務局が改めてエコツーリズムの必要性を強く感じた。

●今後の期待される効果

- ・ 四万温泉に今ある観光資源をいかして、関連団体にも協力をしてもらいながら、ツアーを検討していくことにより、相乗効果が期待できる。
- ・ 可能であれば今後3ヵ年地域資源活用推進事業として取り組みたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 小山氏の講演での群馬県南牧村の事例は、同じ県内であるので、参考となったので、今後現地視察調査をしたい。

●その他感想

- ・ 自然豊かな谷間と清流を取り巻く観光資源のアドバイスをいただきまして、早急に組み合わせたエコ商品づくり等を必要と感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社日本旅行／トムソーヤクラブ 小山 重幸 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

～ひとには教えたくない温泉があります～

- ・ 四万温泉は山間を縫って流れる四万川の流れて沿った温泉街である。およそ 40 軒の温泉旅館、50 軒の食事店・商店が南端の「温泉口・おんせんぐち」地区から、北端の「日向見・ひなたみ」地区まで川沿い 6 キロメートルに点在する。
- ・ それぞれの地区は四万川の下流・南側から「温泉口」「山口」「新湯」「ゆずりは」「日向見」の 5 地区。日向見地区から更に上流へたどると奥四万湖に至る。この縦に長いエリアを、お客様に気軽に散策していただく、魅力的な素材を整えていこう、という思いから、四万温泉協会、地域づくり委員会が中心となって以下のような取組を行っている。

(「上州四万温泉郷之絵図」の作成、配布)

- ・ A4 サイズを縦につなぎ四万温泉の全エリアが一目で分かる地図。各旅館や食事店の場所は勿論、散策時の休憩場所となる“園地”、“自然遊歩道”ルート、“公共浴場や足湯”も書き込んである。ちょっと温泉街を歩いてみようかな…という時に助けとなる 1 枚。

(園地、飲泉所、足湯等、まち歩きの拠点となる施設の整備)

- ・ 滞在中のお客様がまち歩きする時の拠点となる施設。「滝見園地」、「木の根宿園地」等、各園地は優れた景観を楽しめる場所に設けられ、あずまややトイレも整備されている。

(自然遊歩道の整備)

- ・ 気軽に楽しめるコースとして「水晶山歩道 (約 4 キロメートル・2 時間)」、「摩耶の滝歩道 (約 2 キロメートル・40 分)」が整えられ、前述の“上州四万温泉郷之絵図”にも略図が明記されている。また、登山・ハイキングコースとして法師温泉までの 12 キロメートルコース、稲包山までの 10 キロメートルコースが整えられている。なお、稲包山コースは分水嶺を越えて新潟県湯沢町へ至る旧道でもあり、ここを再整備して自然景観の魅力と合わせて、旧道沿いの歴史や文化を紹介・PR していこうという計画がある。
- ・ 地域づくり委員会では、自然グループ・街グループに分かれて前述の取組を進めている。案内図の作成や施設の整備といった第一段階を経て、次のステップとしては「まち歩きガイドの育成」、水晶山歩道や稲包山自然歩道等「山歩きガイド」の育成といったソフト面の整備・充実を図ることが、地域のより一層の魅力作りに必要であると思われる。

●アドバイス (講義等) の概要

(1) トムソーヤクラブの取組概要

- ・ 1987 年の設立以来、旅を通じた小中学生の健全育成をテーマに活動してきたトムソーヤクラブの活動概要を紹介。サマーキャンプ、スキー体験旅行、会報誌の発行等

(2) 地域の資源を活かした体験プログラムを実施

- ・ 山梨県北杜市白州町 →名水百選「尾白川」での川遊び、おいしい水、森と里山
- ・ 群馬県甘楽郡南牧村 →標高 1000 メートルの森、アウトドアクッキング、コンニャク
- ・ 沖縄県中頭郡読谷村 →サンゴの海、定置網漁、琉球の生活と文化
- ・ 地域にある資源・素材を活かし、トムソーヤクラブのソフトを加えて参加者に提供。

(3) プログラムの魅力を大きくするトムソーヤクラブリーダー

- ・ 親元を離れ、小学生中学生だけで参加するサマーキャンプやスキー体験には、キャンプのお兄さんお姉さん（トムソーヤクラブリーダー）が同行。リーダーは毎月の研修会や勉強会を通じてスキルアップに努めている。同時に安全管理についても勉強を継続。
- ・ 自然体験プログラム実施の際には、安全面について入念な準備をすることが重要。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 僅か 2 日間の滞在ではあったが、各拠点を直接に見て、体験し、地図や写真で案内していただいた。第一印象は、30代～40代の若い方々が十数名、にぎやかに同行し案内していただき、みんなとても仲良く、元気に地域づくりに取り組んでいるなということ。こんなに皆が熱心に、仲良く地域づくりに取り組んでいるのであれば未来は明るいと感じた。このことは視察時にもお伝えした。
- ・ 地域にエコツーリズムを定着させていくためのステップとして
 - 第一段階：地域の仲間が集い目標を設定し行動計画に沿って各人の役割に取り組む
 - 第二段階：案内図や施設整備や備品類の購入等、おもにハード面の整備を行う
 - 第三段階：ガイドの育成、コーディネーターとしての自らの勉強等、ソフト面の整備を行う
 - 第四段階：地域の魅力や地域の哲学を分かり易い言葉やイメージでお客様にPRする
 - 第五段階：半年に1度または1年に1度、各ステップについて評価と改善を行うこれを継続していくことが重要であると思います。
- ・ 四万温泉では第三段階の取組中と感じました。地域づくり委員会の自然グループ・街グループそれぞれで、ソフト面の充実に向けた取組を進めていただければと希望します。
- ・ 稲包山自然遊歩道については、個人的にもぜひ歩いてみたいと感じています。関連の事例として長野・新潟の県境、斑尾山～天水山に至る関田山脈で取り組む「信越トレイル」を紹介させていただきました。近い将来、稲包山の遊歩道とともに歩ける時を楽しみにしています。

3-7. ジオパーク下仁田協議会（群馬県下仁田町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

当地域は、2010年より自治体としてジオパーク推進に取り組み、地質や歴史・文化をガイドとともにめぐるジオツーリズムを行っており、2011年日本ジオパークネットワークに加盟した。ネットワーク加盟後、知名度が段々と上がってきたことや、地域においても持続可能なツーリズムを続けるために、より一層、地域住民と手を取った活動が必要とされてきた。

当地域では、近年富岡製糸場と絹産業遺産群の構成資産の荒船風穴が世界遺産登録も目指している。世界遺産のガイド養成においても、自然の成り立ちと歴史的背景に大きなつながりがあるため、2012年8月「下仁田ジオ・歴史遺産応援団」を立ち上げ、歴史も自然も語れるガイド養成講座を実施して、より多くの地元の人が来客者をもてなせるような体制づくりを行っている。そこで、今回は先進的な活動を行っている飯能市エコツーリズムの実践内容等を紹介していただき、今後のジオパーク推進に活かしていきたい。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 29 日（火）～平成 25 年 1 月 30 日（水）
場 所	視察：下仁田町自然史館、ジオサイト（クリップ散策コース等）見学 講習：下仁田町文化ホール・下仁田町役場
アドバイザー	公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀 氏
参加者	下仁田ジオ・歴史遺産応援団員（ジオパーク関係職員を含む）、教育委員会ジオパーク推進室、文化財保護係、企画財政課企画調整係、産業振興課観光係 合計 35 名
スケジュール・方法	【1日目】 講義内容打ち合わせ及び自然史館案内とジオサイト案内解説 下仁田町の歴史解説を含む町内歴史遺産の案内、講義（質疑応答）、懇親会（質疑応答を含む） 【2日目】 関係職員を対象とした講義（質疑応答）、下仁田町の食文化説明



(3) アドバイスの内容

●ジオツーリズムとエコツーリズムの共通性とガイドンスの重要性

- ・ エコツアーの仕組・飯能市の取組例とその効果・ジオツーリズムの発展に向けて

●ガイドの役割と伝える技術力（ガイドの重要性）

- ・ ガイドの役割（安全管理・地域のルールの普及・解説）・ガイド方法等。

（視察時/意見交換時のコメント）

- ・ すぐに経済効果を求めるのではなく、地域の魅力再発見であったり地域のまとまりや連携の高まり等が大きな効果である。
- ・ 下仁田町はジオパークだけではなく、歴史的にも街並みにも魅力ある地域であるので、ジオツアーの中に取り込んで幅を広げたらもっと魅力的になる。
- ・ ツアー実施にあってはお客様のニーズに合わせたものだけではなく、飯能型のガイドによる企画、実施されるツアーのような発信型のものも並行実施することが、ジオパークの PR に貢献する。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 町村の成り立ち等も似通った環境の参考事例であり参考となるが多かった。また、ガイドによる企画ツアーで幅も広いことからジオと合わせたツアー企画がいろいろ考えられるきっかけづくりとなった。
- ・ 職員においては課を超えての連携強化の重要性を再認識した。また、町のビジョンや目的意識をはっきりさせることも大事であることを学んだ。

●今後の期待される効果

- ・ これまで、応援団の活動は学習会を行う、受動的なものだったが、参加者の感想等も聞くと、今後応援団員独自のツーリズム等も期待できそうである。その際に地域住民がツアーを実施する際のガイドラインをどれだけしっかりしたものが用意するのかが今後の課題になっていくことが分かった。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 外部への発信や交流人口の増加も大事であるが、住んでいる地域の再認識や誇りの再発見等を通じての地域の活力アップが重要であること。

●その他感想

- ・ 今回、同じような地形・風土を持つ飯能市の実践例を聞いてみて、下仁田での今後の PR 方法、及び役場職員が地域住民とともにを行う活動の方向性が見出せた。今回のアドバイス講習に参加した各々とジオパークと世界遺産の町としてより良い町づくりに取り組んで行きたいと思います。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

下仁田町は、2008年頃から世界ジオパーク登録を目指す取組を始め、2011年には、日本ジオパークに登録されている。一方、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産への登録を目指している。こうした町を挙げての取組において、ガイド組織である「下仁田ジオ・歴史遺産応援団」におけるガイド養成や、地形・地質についての解説版の設置、ガイドマップの作成等、充実した活動を行っている。

●アドバイス（講義等）の概要

アドバイス（講義等）は、「下仁田ジオ・歴史遺産応援団」の皆さんを対象とした講義、町の関係課（文化財保護課、企画財政課、産業振興課）の職員を対象とした講義、下仁田町ジオパーク推進室の職員との打ち合わせの3つの場面で行った。

（「下仁田ジオ・歴史遺産応援団」の皆さんを対象とした講義）

- ・ ジオツーリズムとエコツーリズムは、考え方や対象資源がほとんど同じであり、いずれも、観光振興、資源の保全、地域振興の好循環を目指す取組であること。
- ・ それとともに、ガイダンスとルールが重要であり、ガイドの皆さんが重要な役割を担っていること。
- ・ 埼玉県飯能市を事例とした、地域振興（誇りを持てる地域づくり）を目指すエコツーリズムの説明。
- ・ 下仁田ジオツーリズムの発展に向けて、「地形・地質」を中核としながら、生物、風景、伝統食、伝統文化、歴史等への活動を広げていくことを提案。
- ・ 他に、ガイドの役割や伝える技術について説明。

（下仁田町の関係課の職員を対象とした講義）

- ・ ジオツーリズムとエコツーリズムは、考え方や対象資源がほとんど同じであり、いずれも、観光振興、資源の保全、地域振興の好循環を目指す取組であること。
- ・ エコツーリズムの日本や世界の取組について事例を示して説明。
- ・ 埼玉県飯能市を事例とした、地域振興（誇りを持てる地域づくり）を目指すエコツーリズムと地域への効果の説明。
- ・ 下仁田町でエコツーリズム（ジオツーリズム）を効果的に進めるために、対象とする資源を「地形・地質」を中核としながら、生物や伝統食、伝統文化等に広げること、学習を中心としたものにし、楽しみを加えること、ガイドとして専門的知識を持った方だけでなく、一般の地域住民に無理のない範囲で関わってもらうこと、等を提案。

（下仁田町ジオパーク推進室職員との打ち合わせ）

- ・ 下仁田町には「地形・地質」だけでなく、伝統食（下仁田ネギ、下仁田コンニャク）建築物、街並み、産業遺産、川の自然、鉄道等のさまざまな資産があるので、これらを活かしていけば、魅力的なツアーができる。
- ・ 注文型のジオツアーに加え、幅広い方が興味を持つ食文化や地域の人のふれあい等の楽しみを加えた、企画募集型のエコツアーを行うことで、より多くの方に訪れていただけたと思われる。

- ・ ガイドとして専門的知識を持った方だけでなく、一般の地域住民に無理のない範囲で関わってもらうことが効果的。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

世界ジオパーク認定に向けて実際されている、案内板設置、ガイドマップの作成、お土産づくり、学校等の受入（ジオツアー）等の取組を拝見して、町を挙げて充実した取組が行われていることに感心した。また、「下仁田ジオ・歴史遺産応援団」の皆さんの熱心な姿勢や、和気あいあいとした雰囲気には、これから下仁田のジオツアーの取組が発展していく可能性を感じた。

下仁田町には「地形・地質」という他に類を見ない優れた資源や、世界遺産への指定を目指す絹産業遺産、下仁田ネギや下仁田コンニャクという全国的に知られたブランドがあるが、他にも、山や川等の自然、郷愁を誘う街並み等、多くの優れた資源であると感じた。

現在の取組は、「地形・地質」を中心としたものであり、実際に説明を受けると楽しく、知的好奇心を満足させられるものであるが、一方で、「地形・地質」は専門的、学習的な要素が強く、来訪者や、受け入れる側（活動に参加する地域住民）の広がり制限する要因になるとも考えられた。

今後の発展方法として、「地形・地質」と「世界遺産」を中心としながら、受注型のツアーを中心に行う方法と、対象とする資源を自然や伝統文化、街並み、伝統食等に広げながら地域全体で、企画募集型のツアーによって旅行者を受け入れる方法があると考えられる。この2つの方法は二者択一ではなく、どちらかが優れているというものでもない。2つの方法のバランスは、取組の目標をどこに置くかによって変わってくる。機会があれば、一度、これまでの充実した取組の成果を皆さんで確認するとともに、今後の目標やビジョンを再確認していただくことをご提案したい。

3-8. 武田の里協議会（茨城県行方市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

地域の特性を生かした観光化による行方市、特に周辺の武田地区の活性化を目指すべく、6次産業に力を注いでいる（有）くらぶコアと協同して、今年の7月の設立より活動している。食と農のテーマパーク体験交流館ふきのとうを拠点として、農業体験、交流イベントとくらぶコアの農場で採れた有機野菜や地域の特産物を使った食の提供を組み合わせた企画を具体的に企画していきたいと考えている。また、農業に限らず、地域の特性、祭り等を組み合わせた企画も取り組んでいきたいと考えている。

平成25年度からイベント実施による適正な利益確保という経営的な視点も重要であり、長期活動していくにあたり、イベントの計画的、定期的実施するためにどうしたら良いのか、現状を見ていただき、実行可能なイベントの組立方（考え方）、具体案のアドバイス等をいただきたい。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成24年11月26日（月）～平成24年11月27日（火）
場 所	食と農のテーマパークふきのとう、農業生産法人（有）くらぶコア、行方フットパス 武田の里コース、行方観光物産館、水の科学館、霞ヶ浦（帆引き船）
ア ド バ イ ザ ー	株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏
参 加 者	武田の里協議会、（有）くらぶコア、行方市農林水産課6次産業推進室 合計11名
スケジュール・方法	【1日目】 活動概要説明～くらぶコア～フットパスコース～行方観光物産館、水の科学館～霞ヶ浦 【2日目】 ふきのとうにてアドバイザーと協議



(3) アドバイスの内容

●視察、打ち合わせ

- ・ 教育旅行をテーマに学生を受け入れている。農家の民宿もしている。
- ・ 地域の奥さんの話や精進料理等が好まれたりもする。
- ・ 営業の際に行政の方と一緒にだと社会的信用がもたれる。
- ・ 旅行会社の営業担当にプレゼンする必要がある。
- ・ 会社向けに研修で社内コミュニケーションをとるようなものを企画してはどうか？
- ・ 自分達と他との差別化のテーマになりそうなことを掘り起こす。
- ・ 安売りはよくない。付加価値を付けて提案していく。

●関係者協議

- ・ 半日のプログラムを幾つも用意する。そうすることで相手の希望に合わせ、組み合わせで半日コース、1日コース、1泊2日コース等対応できるようになる。
- ・ 寺や神社の存在価値、地形を説明するのは大事。
- ・ 暮らしの原点、不便さも体験してもらおう。ここはできる。
- ・ 地元のおじいさん、おばあさんが説明した方が絵になる。
- ・ ニート対策等社会問題と絡めても面白い企画できそう。
- ・ ネームバリューがある有名なところは行き飽きている。
- ・ お茶出しだけでも地元の人に参加してもらおう。
- ・ 冬場の企画はどこも弱い。
- ・ 観光物産館、水の科学館、霞ヶ浦（帆引き船）は地元民はあまり良いと思っていない傾向にあるが、自信を持って良い。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 現在実施されている成功企画について話を聞くことができ、改めてここにしかできない題材が幾つもあることを再認識できて、これらをうまく企画化できれば成功するのではという自信、確信が付いた。霞ヶ浦も大事な題材であるということに気付いた。

●今後の期待される効果

- ・ 農業体験や、フットパス、音楽コンサート、地域のサークル発表会と地域で採れた農産物を素材とした食の提供を組み合わせた企画を立案し、展開していく。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 自分達のみで何とかしようと思わず、地域の方たちにインストラクター、案内人になってもらったり、行政とうまく連携して地域をうまく取り込みながら作り上げることが成功の要素の大きな1つであること。

●その他感想

- ・ ここでは当たり前のことでも、都会の人にとってはそうでないことが結構あったりして、そういうことが企画のヒントになるんだなあと感じた。
- ・ 私どもがやろうとしていることを、地域の人たちにいかにして理解してもらって協力していただけるかが重要であり、それが使命であると思った。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

武田の里協議会の中心となっている「農業生産法人（有）くらぶコア」については、オーガニック（有機農法）の生産量・出荷額についてはパルシステム（生協団体）との取引を中心として全国一の水準であるが、6次産業にも力を入れており、行方市がフットパスによるまちづくりを推進するにあたって、武田の里コースの整備も先駆的に3年かけて行ってきたとのことである。また、パルシステムとの共催で2年に1度の謝恩企画として、採算度外視で200名規模での大収穫祭の催しを行っている。同社では従業員を地域外の若者を中心に35名を雇用しており、6次産業事業部に5名、循環作物研究所に2名を配置する等広い視野に立った経営展開に取り組んでいることが覗えた。また、農場、堆肥センター、シフォンケーキ工房、武田の里フットパスコースの案内及び、観光物産館、帆引き船、パラセーリング、霞ヶ浦ふれあいランドの現地確認を行ったが、素材的には充分誘客可能なものと感じた。

●アドバイス（講義等）の概要

行方市の6次産業推進室の方を交えてのミーティングでは、茨城空港を含めてインフラについてはかなり整備が進んでおり、地域全体として観光誘客に向けて同協議会が先頭に立って進めて行く時期であり、他地域での事例も参考にしながら独自性を持って臨むことで意見が一致した。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

交流事業で大切なのは、実際に現場対応をされる方とそれを陰で支える組織や人であるが、武田の里協議会については、くらぶコアが牽引役となり、行方市と共同で広報・営業活動を行うことから踏み出せば、6次産業についてどこまでの次元を求めるかも含めて、進むべき道筋が見えてくることであろう。両者とも現場担当者は意欲的なので十分に期待できる。また、首都圏から2~3時間という立地条件は勿論のこと、オーガニック野菜の生産出荷が日本一ということは、企画商品としての付加価値を高めることができる。

教育旅行については、1泊2日の行程で考えると霞ヶ浦での環境学習プログラム、アウトドアスポーツプログラム（パラセーリング）、帆引き船（現状は小船に乗って湖に浮かんでいる帆引き船を見に行くということであるが、できれば実際に乗船できると良い）を活用したプログラムのセットで1日、くらぶコアでの農業体験やシフォンケーキ作り体験及び武田の里フットパスコースの活用でもう1日といった感じで4クラス160名程度の受入ができるようにすれば、首都圏の教育旅行団体は十分に誘客が可能であろう（宿泊はクラス分宿でも構わない）。また、パルシステムに対して実施している収穫祭企画を「日本一のオーガニック農場のオーナーのお話、有機野菜収穫体験、健康大麦シフォンケーキ付きの農場ランチ」のセット企画として作り込み、1人¥3,500~4,500位の価格設定で、首都圏の旅行会社やバス会社への1日滞在企画として提案をすればおもしろいのではないかと。また、フットパスコースも、現地で日本最初のフットパス全国大会が開催された際、初めて会う人々が1時間半歩き終わる頃には会話が弾むようになったというエピソードに代表されるフットパスウォーキングの魅力を生かすために、スタッフが道案内人（話し相手）として5~6人に1名ついて初対面の方々同士の潤滑油となり（マップでの自由散策は避ける）、地元の方々に協力をお願いして給茶所を設ける等して1人¥1,500程度（20名以上催行）で設定すれば、ウォーキングツアー企画としても十分に通用する。これまで旅行先としてあまり認知されてなかったことは、逆に新しい行き先として脚光を浴びる可能性があるため、まずは幾つかの企画を作って旅行市場へ打って出ることが先決であろう。また、当地への視察の希望もあるようだが、上田市の信州せいしゅん村の観郷ウォークも実際に体験すると参考になるのではないだろうか。

3-9. NPO 法人フジの森（東京都檜原村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

東京都西多摩郡檜原村は東京都の西南端に位置し、村の面積の 80%が秩父多摩甲斐国立公園に指定されている。村の観光の中心には日本の滝百選に選ばれた「払沢の滝」があり、年間約 6 万人の観光客が訪れる。この滝の入口に当法人が管理運営する地産地消の店「四季の里」がある。また、近くに今年度より当法人が指定管理者として 35 ヘクタールの森を「ふるさとの森」として再生し、管理運営することとなった。

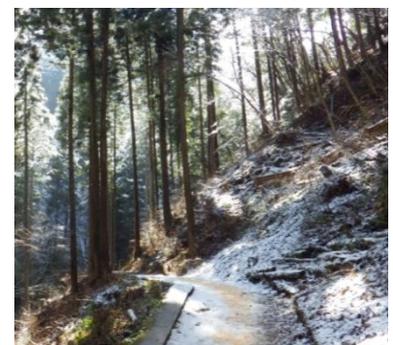
この地区は近年住宅等の建設により若い世帯が増えてきており、30 代前後の若手で組織する「払沢の滝冬まつり実行委員会」、「払沢の滝とゆかいな仲間たち」、就労を考えている「NPO 法人つむぎ」や地域の特産物による食事を考えている「四季の里スタッフ」、また、東京都レンジャーと OB の日本山岳ガイドや若手林業会社があり、森の恵みを生かした事業化が望まれている。

そこで、地域の資源を活用する仕組を考え、試行的に実施するエコツアーの取組について、アドバイザーの助言・指導を反映させることを計画した。当地域は今 30 代前後の若い世代が活発に活動し始めていおり、村内の方々の中には、檜原村が外から見て魅力的であるという事に気付いていない人や、自信が持てない人が多い。

そうした人たちとともに檜原村の魅力を探し伝えていくことや、子どもを持つ世代にエコツーリズムの考え方や仕組が浸透することは重要と考えている。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 2 月 21 日（木）～平成 25 年 2 月 22 日（金）
場 所	東京都西多摩郡檜原村本宿地域 払沢の滝、ふるさとの森周辺
ア ド バ イ ザ ー	京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏
参 加 者	檜原村産業環境課産業観光係、檜原村村議会議員、東京都レンジャー、檜原豆腐ちとせ屋、檜原紅茶、元環境省、NPO 法人フジの森 計 14 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】 払沢の滝周辺の問題点を視察、ふるさとの森の活用方法を視察 本宿地区の四季の里を会場に講演会</p> <p>【2 日目】 払沢の滝観光客の動向を視察、エコツアーの可能性を検証</p>



(3) アドバイスの内容

●弘沢の滝周辺の問題点を視察

- ・ 弘沢の滝は日本滝 100 選に選ばれた東京で唯一の滝である。滝を見に来ている観光客は年間 65000 人いるが、観光地の賑わいや楽しさに欠ける。どのようにすれば魅力がでるのかアドバイスいただきたいと考えた。

(アドバイザーのコメント)

- ・ ガイドを付けると滝に行くまでの自然や植物の案内や歴史等もできる
- ・ 東京都とは思えない滝の大きさ、自然の多さは観光資源として魅力である
- ・ 道が広くないため、大人数の場合は工夫が必要である
- ・ 行きかう人と交わす「こんにちは」という挨拶も楽しみである
- ・ 柵等が無い箇所があり、危険な場所は整備すべきだ
- ・ 錆びた水道管等が見え、景観がよくない
- ・ 滝について、もっと詳しい解説板等があっても良い
- ・ 滝へ行く途中にある「森のささやき」の話好きの店主も観光客にとって魅力

●ふるさとの森の活用方法を視察

- ・ ふるさとの森は当法人が管理する 35 ヘクタールの広葉樹林の森で、バスの停留所から歩いて 5 分で森の入口につくことができる。しかし、34 年間放置されて荒廃しており、森づくり体験を組み込んだエコツアーが可能かどうかをアドバイスいただきたいと考えた。



(アドバイザーのコメント)

- ・ アクセスの良さは魅力である
- ・ 敷地内の山頂からは、檜原村でもあまりない三頭山と大嶽山が同時に見える
- ・ 人工林のスギ・ヒノキと照葉樹林、落葉広葉樹林を体験できる植生の豊かさがある
- ・ イノシシのヌタ場やテンやリスの糞等があり、野生動物も多く生息している
- ・ ガイドを付けた方が楽しめる。気軽に誰でもが行ける場所にはない工夫があっても良い。
- ・ 未整備の森で急斜面が多いので安全面に問題。安全柵や補助ロープがあった方が良い場所がある。
- ・ 山頂まで行く 1 日コースの場合、トイレが無い
- ・ 落葉広葉樹林のため冬は葉が落ちて景観が良いが、夏は何も見えないので適度の伐採が必要である。

●四季の里を会場とした講演会

- ・ 視察を踏まえて、「弘沢の滝とふるさとの森周辺はエコツアーになりえるか」というテーマで、地域を巻き込んだ形でエコツアーを実現するための勉強会を行った。
- ・ まず、エコツーリズムとは何か、宝とは何か、宝探しの方法等について学び、更に各地の事例を紹介しながら、地域ごとのカラー（個性）を活かした展開の有る事を知ることができた。
- ・ 参加者からは、宝を見つけてからの磨きの方法、宝の組み合わせ方、宝の魅力を伝えるガイドの育成等について、質問があり、アドバイザーの助言に、更に質問が続く等、熱のこもった応答がなされた。
- ・ 旅行業を持っていない場合との質問に、日本エコツーリズム協会が 2 種を取り、旅行業もあるので、ツアーを組めるようになった、との回答があった。
- ・ 旅行業界では、エコツアーと呼ばず、着地型観光と言い換えるとのことを知ることができた。また他県の事

例では、まず県内の客を引き付け、それから県外客を呼ぶように近くところの客が来るように、東京都内向けのデスティネーションキャンペーンを展開して着地型観光を売り出した方が良いとの助言をいただいた。

● 弘沢の滝観光客の動向を視察

(アドバイザーのコメント)

- ・ 東京近郊からの来訪者が多い
- ・ 年齢層は若いカップルも多いので若者誘導の動きがあっても良い
- ・ 滝までの道のりは険しくないためか、高齢者も訪れやすい
- ・ 小さな子にも危険が無いので、利用する年齢層は幅広い

● 意見交換～エコツアーの可能性を検証

- ・ 檜原の観光地弘沢の滝周辺と 35 ヘクタールのふるさとの森のエコツアーの可能性とフェノロジーカレンダー、マップのアドバイスを希望し、真板氏と当法人スタッフで意見交換を行った。
- ・ 講演会の参加者を中心に宝探しの実現を目指し、その際の指導・助言を真板氏にお願いしたいと伝えた。

(4) アドバイザー派遣の効果

● 参加者や関係者に与えた効果

- ・ 地域の資源を活用する仕組である、宝探しについて関心が高まった。後日、参加者からアドバイザーに対して、宝探しをどのように始めたら良いか、と問い合わせがあった。
- ・ エコツアーの取組、プログラムの組み方、ガイドの養成、予算の組み方、利益の配分等、実現に向けて積極的な質問があり、アドバイザーから事例に基づく助言をいただいた。
- ・ 参加者の発言の中に村にも隠れた小さな魅力がいっぱいあるとの意見が出る等、改めて村の魅力を伝えることの意義を感じたようだ。
- ・ エコツーリズムで村の良さを売り出す方法を考える契機となる講演だった。

● 今後の期待される効果

- ・ 若い方達を中心に村の隠れた魅力を見出す宝探しを実施。
- ・ 宝探しの成果を活かすフェノロジーカレンダーや宝を紹介するマップの作成等
- ・ 地元の豆腐や茶葉を使った紅茶について、新しいストーリーを作り、土産物となる商品の開発
- ・ ふるさとの森の整備と安全なハイキングコースの展開
- ・ 弘沢の滝及びふるさとの森を取り込んだエコツアーのモニターツアーの開催

(5) アドバイザー派遣を実施して (地域からの声)

● 参考となった事項

- ・ 参加者が、各地の事例を知り、檜原村でもまだできることがあると気が付いたのは、大変に良かった。
- ・ 宝探しをして、地元の人が組んだツアープログラムに連れて行くというエコツアーは大変新鮮で、若い方がこれからの地域の活性化の方向を見出したと思われる。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

檜原村フジの森は今から 25 年前に富士フィルムグリーンファンドのモデル地域として資金の提供を受けて宿泊体験施設「フジの森」を建設し、地元の青年会であった冬来塾が中心となって、都市に住む人々に森の中での自然活動や森づくり体験プログラムを景供する所からスタートしている。後に、今から数年前に周辺の森林 2 ヘクタールを村に買い取ってもらって、NPO 法人「フジの森」として第 2 期のスタートを開始。宿泊施設としての「フジの森」の活用、更に指定管理施設として「教育の森」研修施設を連携活用し、さまざまな体験プログラムを年に 90 回以上実施している。また「四季の里」レストランを地域のお母さん達の参加を促しながら運営し、観光客に郷土食を提供したり、更には木を用いたログハウスや檜原紅茶等のさまざまな物産開発を行って村の活性化に係っている。更に昨年からは自然ふれあい体験地域づくりとして、放置されていた森を整備活用した「ふるさとの森」作りを進めている。

檜原夫人を巻き込んだ食と地域の若者による体験と研修、そして森作りをコーディネートして、一体化させた村おこしに係る「エコツーリズムプログラム」の策定を開始し、実施に向けた体制づくりの準備を始めている。

●アドバイス（講義等）の概要

（ツアープログラム開発とともに物産開発のあり方）

全国エコツーリズム大会の成功を地域の力として真に獲得していくためには、継続と、それを可能にする仕組みが必要である。檜原の地域づくりという目標にたち、ツアープログラム開発とともに物産開発のあり方について講義した。また地域資源をどのように紹介する事が地域の魅力を観光客に伝える事になるのかについてアドバイスを行った。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・檜原村は、その資源の特性から見てエコツーリズムが核となる、むしろここ数十年の活動内容から見て、既に一部実施されているとさえ思われた。今後は早々に全村的な中核的な組織を起ち上げ、エコツーリズムを推進して行ってほしい。
- ・今後は、更なる推進のためにも、エコツアー・プログラムに仕立て、プロモーションから販売までもっていくことのできるエコツーリズム・プロデューサー、あるいはランドオペレーター、地域コーディネーター等、名称はともかく、地域の宝とツアー客のニーズをつなぐ人材育成が急務であると思われた。

3-10. 小笠原エコツーリズム協議会（東京都小笠原村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

平成 23 年 6 月に世界自然遺産の登録を受けた小笠原諸島では、行政による各種法令・制度の他ホエールウォッチングルールを代表とする各種自主ルールが世界遺産候補地になる前から機能してきており、「自然環境を保全しながら観光利用し、地域の振興を図る」エコツーリズムを先駆けて実践してきた。小笠原村では平成 5 年の総合計画から村づくりの視点に「自然との共生」を掲げ、エコツーリズムを基軸とした観光振興を図ってきたところである。

また、小笠原のエコツーリズムのさらなる推進のため「小笠原陸域ガイド制度」の運用を平成 23 年度から始めた。これは「陸域ガイド講習の受講」「保険制度への加入」「各種ルールの遵守同意」「救命救急技術の習得」等、所定の基準を満たす者を「小笠原陸域ガイド」として審査し、登録する制度で、小笠原の自然や文化を保全して持続的な利用を図り、利用者や地域社会に信頼されるガイドとして、ガイドの社会的な地位を確立することを目的としている。登録ガイドは、世界遺産の中心的価値が陸域にあることから、遺産価値を利用しながら維持していくための牽引役としてこれからも活躍が期待されている。

更に、今後の小笠原におけるエコツーリズムのあるべき姿や取組を整理するため、エコツーリズム推進法に基づいた『エコツーリズム全体構想』の策定に取り組んでいるところである。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 3 月 6 日（水）～平成 25 年 3 月 11 日（月）
場 所	【事前レクチャー】母島：母島支所大広間 父島：小笠原村役場会議室 【現地指導】母島：南崎遊歩道 父島：つつじ山南麓線
アドバイザー	北海道大学大学院農学部研究院准教授 愛甲 哲也氏
参加者	母島 2 日目 10 人 父島 3 日目 14 人、4 日目 13 人
スケジュール・方法	1 日目 現地指導箇所の事前下見（母島南崎遊歩道） 2 日目 現地指導（母島南島遊歩道）、現地指導箇所の事前下見（父島躑躅山南麓線） 3 日目 事前レクチャー（父島）、現地指導（父島躑躅山南麓線） 4 日目 現地指導（父島躑躅山南麓線）



母島事前レクチャー



作業中

(3) アドバイスの内容

●事前レクチャー（歩道の管理等についての考え方）

(1) 管理者はさまざまであると思われるので、情報共有をしっかりと行うこと。

(2) 歩道の荒廃した要因（人為的あるは自然的）を把握すること。

(3) 上記(2)を把握した上で、対策を検討すること。

- ・ 人為的：人により荒廃したのであれば、人がそうしなくても良いような手助け、あるいは行動を変えるきっかけを組み入れる。
- ・ 自然的：周囲の環境次第では、ルートを変える検討も必要となってくる。

(4) 利用者の現状把握をし、環境・施設・管理のバランスを考え、安全面に配慮した整備とすること。ただし、その場所の利用者が求めているものと、管理者とのズレによる、過剰整備とならないよう注意が必要である。

①他地域の事例紹介

- ・ 礼文島：場所により所有者や管理者が複雑にからみあっている所、考え方を共有して、施設管理や利用者指導へ生かしていこうとしている。
- ・ ニュージーランド：歩道のランクを定め、利用者の責任によりルートを選ぶスタイルとしている。
- ・ 南アルプス：むちゃをする利用者が多いので、利用者への啓発を推進する。

②大雪山における登山道の整備方針（近自然工法）の事例紹介

- ・ 自然の仕組、メカニズムに応じて、必要な箇所に必要最小限の手を入れることとし、自然に同化する素材を極力自然に用いる登山道を目指す。
- ・ 植生の保全・復元と流水のコントロールを考慮した修復とする。
- ・ ルートを明確にし、安全かつ植生等の保全に配慮し、抜本的な保全修復、小規模な保全修復・補修等適切な対応を図る。

③近自然工法の管理システムと施工事例の説明・紹介

- ・ 登山道の浸食を止め、食物連鎖の底辺が住める環境を整える工法
 - 登山道は川であり、施工物の構造は自然界から学び、必要以上に施工しない。また、施工後は必ず現場の観察を続け、必要に応じて修復することが何より大切である。
- ・ 近自然工法を施工するにあたって必要とされるもの
 - 自然を観察し、描写できる感性と施工のための体力がまず重要で、次に知識・技術となる。

●現地指導（事前レクチャーの実践） 小笠原の歩道で可能な近自然工法の施工方法

(1) 母島南崎遊歩道

整備されている石階段の段差が高く、また下の土が削れていることを受け、年配の方でも歩きやすく、かつ降雨時の流水を考慮して、海岸より石を運び込み、周辺の伐採木とを組み合わせた段差処理及び導流工の施工を行った。



作業前



作業後（上：段差処理、下：導流工）



作業前



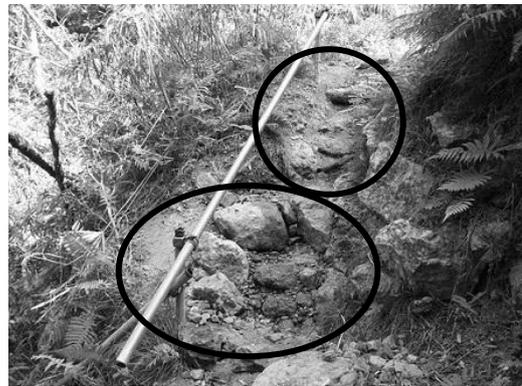
作業後（段差処理）

(2) 父島つつじ山南麓線

元々の地形が崩れ、段差があるため、手摺りを設置し利用をしているが、年配者の利用も多いことから、周辺の石や砂利を活用した段差処理を施工した。



作業前



作業後

降雨時の水道により浸食が生じ、段差ができた箇所に、導流工を兼ねた段差処理を施工した。



作業前



作業後



作業中

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 中高年層の利用者が増えたことで、これまで以上に歩道やルート of 安全面の配慮が必要となっていたが、利用者が不便を覚えても補修に至れないことが多く、また、自然界の構造から学んだ施工物ではなかったり、過剰整備であったりと、環境になじんだ補修方法ではないことも多かった。
- ・ 今回、歩道等の管理に関する考え方と近自然工法の施工の指導により、通常の巡回時にもモニタリングする視点や、補修をする方法を学べ、参加者や関係者が今後の管理のあり方を考え直す機会となった。

●今後の期待される効果

- ・ エコツアーリズム協議会にて施工に必要な用具を購入したことで、今後は、参加者や関係者（歩道管理者等）により、大きな浸食に至る前に近自然工法を活用した施工を、日々の巡回の中で補修を重ねることができるようになった。
- ・ それぞれの歩道の管理主体や巡視にあたるメンバーの連携を更に図り、より安全に、かつ自然環境を保全しながら歩道等の利用を続けられるよう取り組んでいきたい。

(5) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

北海道大学大学院 農学研究院 准教授 愛甲 哲也 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

小笠原は、他地域に比べても先進的にエコツーリズムの推進が行われてきた地域である。今回の派遣の対象である陸域の歩道については、国立公園内の歩道については東京都の設置と管理が行われており、観光施設として小笠原村が設置した歩道、更に森林生態系保護地域の設定の際に林野庁が設定した指定ルートが存在している。世界自然遺産への登録後、来島者も増加しており、今後の各歩道の管理方針や、荒廃した区間の補修が課題となっている。

●アドバイス（講義等）の概要

父島と母島の両方において、小笠原村役場、環境省、林野庁、東京都、小笠原エコツーリズム推進協議会関係者に加え、林野庁グリーンサポートスタッフ、環境省アクティブレンジャー、東京都レンジャーを対象に講習を行った。

大雪山国立公園において作成された「登山道協働型作業教本」を題材に、登山道補修のプロセス、荒廃箇所タイプとそのモニタリング手法、管理水準の策定プロセス、Recreational Opportunity Spectrum (ROS) の概念について説明を行った。登山道の補修は、荒廃箇所の抽出、原因の把握、対策の検討、修復の実施とその検証というサイクルで順応的に行われる必要がある。大雪山では、全国的に登山道の整備が過剰だと批判された反省に基づき、現場の環境や景観にみあった整備の方針を示したものである。基本となっている考え方は、北米のレクリエーション地の管理に用いられる ROS であり、環境・施設・管理が、自然環境の特性や利用者と関係者の望むその場所の姿に見合っているように空間を区分するものである。

登山道が過剰整備といわれるもう 1 つの原因は、人工的な素材や工法を用いることにもよる。利尻山で、登山者と地域関係者を対象に、モニター写真を使用して事前に整備の方向性を調査した事例を説明し、近自然工法が注目を集めてきた背景を紹介した。

国内でも同様の考え方にもとづき、歩道を区分して、難易度の周知により事故防止につなげようとする取組がみられるようになってきた。先進的な取組をしているのはニュージーランドであり、歩道と利用者を分類しそれに対応した歩道整備、リスクマネジメント、利用者啓発を一体的に行っている。

更に、このような管理水準を定めることで、異なる関係者間で管理の方向性を共有できるようになること、一般の利用者には所有や管理の違いはほとんど意識されておらず、小笠原として一元的な管理方針を持つことの重要性を強調した。礼文島では、環境省、林野庁、北海道、礼文町及び地元 NPO 等が参画して、生物多様性地域戦略の中で、歩道の管理体制の検討を進めている。礼文島でも、区間によって所有や管理が複雑にからみあっているが、考え方を共有して、今後の施設整備や利用者の指導へ生かしていこうとしていることを紹介した。

なお、今回の派遣には、小笠原エコツーリズム推進協議会の協力により、大雪山等で近自然工法による登山道整備に取り組んでいる（合）北海道山岳整備も同行した。室内での講義の前には、荒廃が問題視されている箇所の確認をし、講義のあとに現場で近自然工法による登山道補修の実習を行った。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

世界自然遺産への登録後に観光客が増加し、今後、陸域の歩道にも利用圧が増すことも考えられる。軽度な荒廃がみられはじめた箇所や、常にぬかるみになりやすい場所、利用者に危険が及びそうな場所を、事前に確認し、定期的に簡易なモニタリングを行っておく必要がある。

歩道の整備にあたっては、世界自然遺産への期待と、固有種も多い自然資源が豊かであるということから、利用

者は過度な人工的な整備は望まないと予想される。そのため、今回の実習でも行ったような、現場周辺の材料や、必要最小限の持ち込んだ資材を使用する近自然工法による整備が適している。

モニタリングと整備の実施にあたっては、日常的に巡視等を行っているグリーンサポートスタッフ、都レンジャー、アクティブレンジャーに加え、陸域のガイドの連携が必要である。モニタリングの方法、データの共有方法、簡易な歩道の補修技術等を、関係者で連携して習得することが望ましい。特に、危険箇所や荒廃が懸念される場所については、関係者間で情報を共有し、定期的にその扱いについて意見交換を行っておくと良いだろう。

来訪者は、指定ルート、公園施設の歩道、村の管理する歩道等の区別はせず、小笠原の歩道は一体的にとらえられる。来訪者は、自身の望む体験が、その空間で満たされるかであり、その不一致が過剰整備への批判や、リスク認識の違いを生み出す。管理の異なる区間を、連続して利用する行程もある。さまざまな関係機関が複合的に関与し、担当職員の異動もある状況では、一貫した整備方針がなければ、歩道の整備は場当たりのようになってしまいかねない。自然環境の条件や利用の形態にそった歩道の管理・整備方針が、小笠原においても検討されることを期待する。

3-11. 富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン推進協議会

(山梨県富士北麓地域)

(1) アドバイザー派遣申請の背景

当協議会は、富士山及び青木ヶ原樹海周辺地域における質の高いエコツーリズムの推進を目的として活動しており、近年、富士山及び富士北麓地域（特に自然公園法特別保護地区）においては、利用者の増加に伴う自然環境の破壊や、マナーの悪化等が問題となっている。

富士山の世界文化遺産登録を推進している状況の中で、将来に渡ってこの地域の自然環境を保護していくため、自然公園の適正利用のために制定したルールや、関係団体との連携について検討している。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 23 日（水）～平成 25 年 1 月 25 日（金）
場 所	現地視察場所：富士風穴周辺 講演会場：山梨県立富士ビジターセンター
アドバイザー	株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝氏
参加者	環境省、山梨県観光部観光資源課、 富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン推進協議会
スケジュール・方法	<ul style="list-style-type: none"> ●現地視察（青木ヶ原樹海富士風穴周辺地域他） ・現地において課題となっている箇所の視察、説明 ●富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン協議会 ・知床におけるエコツーリズムの現状について（講演） ・講師を交えての意見交換会（参加者全員）



(3) アドバイスの内容

- ・ 歩行者の管理方法
 - 人間に頼っているのが現状。実際にパトロールしているのは、環境省アクティブレンジャー、林野庁森林パトロールが1日4名、民間ガイドで対応している。
- ・ ガイドの認定方法
 - 現在試行錯誤をしているところ。ヒグマに関する安全管理をできるかがポイント。新規参入者も受け入れながら、ガイドの質も維持する仕組みづくりを模索している。
- ・ 団体の合意形成に関して、あり方検討委員会と利用適正協議会の関係
 - あり方検討委員会は環境省主導で発足。適正協議会については、民間側から利用調整地区にするか、エコツーリズム推進法にするかの適用をした場合の影響について提案し、行政機関間（環境省、道、町）で調整を行った。
- ・ 「みんながテーブルに着かざるを得ない状況」をどう作ったか
 - 環境省が主導。専門家を入れて地域を守って行くためにはどうしたら良いか、理詰めで議論を進め納得してもらった。事務手続きは、環境省が外部委託。
- ・ 高架木道における入場者の管理方法
 - 入口に管理小屋を建ててスタッフが常駐。レクチャーを行ってから出発。スタッフの人件費は利用料でまかなっている。現在は知床財団が運営（競争入札で落札）。基本的には、利用者負担で行いたい。行政の負担は限界がある。
- ・ 利用者の人数コントロール方法
 - 10分おきに50名ずつしか入れない、1日最大2000人程度。自ずと人数は決まってくる。いままで1日の上限を超えたことはない。駐車場のキャパシティで充分コントロールできていたが、ルールづくりをした。渋滞対策のため、環境省で駐車場を拡大予定。
- ・ 行政機関の参画促進の方法
 - 世界遺産登録の効果が大きい。世界遺産の効果は、地域を変えていく枠組みができることが最も大きい。富士山地域も期待できるのではないかと。富士山地域は世界遺産効果は実質ないと思う。一時的にはあるが。世界遺産登録によって、さまざまな人の意識が変わったり、枠組みが変わっていく、できていくことが最も大切なことではないか。
- ・ 富士山はさまざまな体制が乱立しているが、統一した体制づくりという意味で知床の例は参考になる。
 - 文化遺産であるので、環境省は中々動きにくいのでは。富士山では県の役割が大きくなると思う。
- ・ 外国人観光客への対応についてガイドの質を高める取組。
 - 知床では、まだ十分な対応がされていない。社会通念上、地元ガイドを付けないとおかしい位の雰囲気づくりが必要かと思う。



(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 行政機関、民間団体の調整方法等について、知床の具体的な例示をしながら講演をしていただき大変参考になった。当協議会では初めての外部講師による講演だったため、各メンバーとも新鮮な意識で聴講ができた。
- ・ 当地域のさまざまな課題についても、具体的に行動をしていかなければ何も現状は変わらないという共通認識を持てたと感じた。



●今後の期待される効果

- ・ 富士北麓地域のエコツアーについては、統一した受付窓口がなく、来訪者がエコツアーの観光メニューや、その費用等の情報に接する機会が少ない現状である。今回の知床の例を参考にしながら、このような状況を改善し、利用者にエコツアー・メニューが提供され、安心して質の高いサービスを受けることができるような仕組づくりを検討していきたい。
- ・ また、そのような組織づくりを行い、各エコツアー団体の事業の振興を図るとともに、富士北麓地域の自然環境の保護につなげていきたい。
- ・ 世界遺産登録は新たな仕組づくりを行う、絶好の機会であるので、関係団体と協力しながら、来年度以降積極的に検討、推進を行いたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 地域の組織づくりについて、行政、民間の両面からの意見をいただいた。各種調査等のデータに基づいた議論の構築や、民間団体と各行政機関の連携強化の必要性等大変参考になる内容であった。
- ・ また、ハード面の整備等については、知床の高架木道の設置の例等を通して、当地域の富士風穴周辺整備への応用も可能ではないかと感じた。歩道や駐車場の整備等についても可能性を探っていきたい。

●その他感想

- ・ 限られた時間の中では中々難しいかも知れないが、知床においてエコツアー団体が同じテーブルに着かざるを得ない状況を作り出した話等は、具体的な取組内容等について、もう一步踏み込んだ部分まで伺えた。また今回のアドバイス内容等を当地域にどのように当てはめていくのか等、そこまで議論を進めたかった。次回以降の協議会へ議論を継続していくことが重要だと思う。
- ・ また、講師と協議会参加者との懇親会的なものを企画し、より忌憚のない意見交換ができる場を設ければ良かったと感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

(富士風穴周辺)

- ・ 平坦な地形のため子どもからお年寄りまで、気軽に奥深い森を体感することができるコースである。
- ・ 問題となっている道外れ、苔の生息等については把握することができなかったが、平坦な地形のため簡単に道から外れやすく植生への影響が起きやすい環境であることは推測できた。
- ・ その他、ここを散策するための問題点は、駐車スペースが限られている（正規には駐車場がない）ことである。離れた場所に駐車場は存在するが、道路幅が狭く車の往来が多い車道を歩かなければならない。安全上好ましくない状況である。

●アドバイス（講義等）の概要

- ・ 富士山青木ヶ原樹海等エコツアーガイドライン協議会の会議に出席し、ここでお話しをさせていただいた。
 - ・ 利用人数の問題や苔をはじめ植生保護等が課題になっていたため、利用調整地区となっている知床五湖の事例を紹介した。
 - ・ 目指す目標は
 - 資源価値の向上のための利用方法
 - 資源価値を損なわないためのルール作り
 - 一般利用者やガイドへのルールの周知（自然ガイドは登録制にする等してルールの周知を図る）
 - 安全にかつ適正に利用するための施設整備（駐車場や富士風穴折口の整備）
 - モニタリング体制
 - 利害関係者が集まって協議をする仕組みづくり
- 等について知床での事例をもとに話をした。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 山梨県の職員の方がエコツアーガイドライン協議会を設置し、積極的にルール作り等を検討している。地元自治体も積極的に関わるべきであり、主体となるのが望ましいと思う。
- ・ ルール作りやルールの周知には時間もかかるので、焦らないで地道に着実に行って欲しいと思う。
- ・ ガイドが積極的に植生保護やモニタリングに関わる仕組みも必要なので、ガイドの登録制等も検討すべきと考えた。

3-12. 志々島大きな木プロジェクトの会（香川県三豊市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

志々島には最盛期には約 1000 人が住んでいたが、現在 20 人強にまで急速に減少し、半数は 80 歳以上の高齢者である。60 歳未満は二人しかいない典型的な限界集落である。しかし、志々島には両墓制の風習や島の規模にしては広大な漁業権を持つにいたった歴史等固有の文化・歴史がある。自然に目を向けると、推定樹齢 1200 年のクスノキの巨木（香川県指定天然記念物）があり、島外からも見学に来る人がいるほどであるが、これまで地元の人が組織的に案内をする体制もノウハウも無かった。

このような中でも、志々島を支援する島外のボランティア団体や個人が複数あり、集落内に志々島を紹介する写真の掲示、大楠までの案内板整備、大楠の草刈り等を手弁当で担ってきていた。近年は NPO 法人瀬戸内オリーブ基金が大楠の状態調査、島内の学習施設の整備、植樹等の支援をはじめ、これを機に地元「志々島大きな木プロジェクトの会」が発足している。「志々島大きな木プロジェクトの会」はここ 3 年間活発に活動しており、その活動はマスコミ等でも頻繁に取り上げられている。また最近行政からの支援も受けられるようになってきた。

このように人口は極端に少ないものの、決して孤立無援ではなく、自分たちで何とかしようという意識も高い状態にある。このような中、集落を維持するためにエコツーリズムの考え方使えないだろうかという機運が高まってきた。また、ヤギやミツバチの飼育等新しく産業を作り出すための試行も始まり、明るい兆しが見えてきている。資源・人材、ともに潜在能力は非常に高く、有効な指導があれば三豊市におけるエコツーリズムのモデルとさえなれるのではないかと期待がある。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 20 日（日）～1 月 21 日（月）
場 所	香川県三豊市志々島（会場：老人憩いの家／エクスカーション：志々島全域）
ア ド バ イ ザ ー	株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎 氏
参 加 者	大きな木プロジェクトの会 5 名、志々島出身者 2 名、ボランティアグループ 4 名、計 11 名
スケジュール・方法	※助言いただくにあたり、これまでの活動内容について事前説明を行った。 【1 日目】 島内エクスカーション 【2 日目】 講義、質疑、志々島の宝（資源）探し、事例紹介、



(3) アドバイスの内容

●島内エクスカージョン

島内を紹介しながら、先生が魅力と思える点や他の地域との相違点を指摘していただいた。特に、大楠のすばらしさは他の地域に負けない特筆すべきものがあるということだった。大楠を紹介するときには、写真では限界があつて無理ではないか。絵の方が紹介しやすいのではないか、またイベントとして絵画の会が有効ではないかとの指摘がこれまでにない視点からの指摘で大変役立った。

※出席者:志々島住民5人、島外近隣に住む志々島出身者2人、ボランティア4人の計11人が参加した。志々島住民5人は島内で活動に従事できるほぼ全員である。



●講義:「エコツーリズムの考え方・活かし方」

エコツーリズムの基本的な説明や各地の事例紹介から始まり、最終的に島の自然を守りながら、島の賑わいを取り戻すにはどうしたら良いかという目的の設定と合意形成まで、座学として実施した。講義は配布資料とパワーポイントを使って行われ、随時質疑を受けて補足説明をした。

●ワークショップ

島の資源を洗い出す方法として、宝探しシートとフェノロジーカレンダーの作成方法について説明があり、この内、宝探しシートを参加者全員で作成してみた。各自作成した内容を紹介しあい共有を図った。

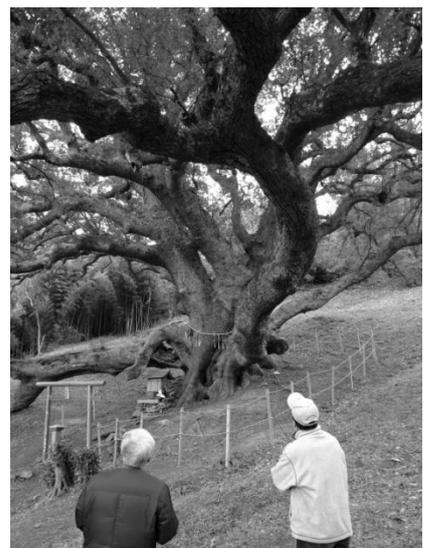
(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムに関する講義・ワークショップ、ともに参加者のほとんどは初めての経験であり、講義では他の地域の事例紹介もあり、大変な刺激を受けた。直島の美術館よりも志々島の方が魅力があり可能性が高いとの談話もいただき意気が高まっている。

●今後の期待される効果

今年度中に、宝探しの内容を元にした島内案内パンフレットを制作する。2013年度には、備讃瀬戸地域で、第2回瀬戸内国際芸術祭が開催され、志々島は会場ではないものの、外部から人の流入が予想される。ゾーニングやキャリング・キャパシティの設定等で、島の生活を守りつつ、持続可能な方法でうまく外部の人との接点を持ち、志々島の発展につなげていきたい。



(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

宝探しの作業を通じて、いかに多くの資源が志々島にあったのか具体的に把握できたこと。ゾーニング、キャリング・キャパシティの考え方を知ることができたこと。これまでエコツーリズムには取り組んでいなかったので、すべてのことが役立った。

●その他感想

講習を受けたくても、島外に出ることがとても難しい状況にある。講師の方に離島まで足を運んでいただけたことは、大変に効果があった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ツーリズムワールド 代表取締役 高梨 洋一郎 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

巨樹・大楠の保存対策の一環として、島内一部住民と外部支援組織であるオリーブ基金によるエコツーリズムの活用に関する研究がスタートした段階で、「志々島におけるエコツーリズム」構想そのものを作成する準備期といえる。中核となっているUターン・シニア組数名の意識は高く、これに外部支援組織が呼応、定期的な会合を開くことにより、課題の抽出とその具体的な対策の実行をはじめている。

●アドバイス（講義等）の概要

（講義「エコツーリズムの考え方・活かし方」）

関係者の認識を共有するための講演形式による「エコツーリズムの基本と取組方」についてのプレゼンテーション。人口僅か 22 名、そのうち過半数が中期高齢者以上という限界集落状況にある志々島の再生・活性化を図るためには、自然・文化環境を保全しながら小規模観光を目指すエコツーリズム型観光が適合している旨の講演を他の事例を含めて 2 時間半にわたり提案した。

（志々島の自然・文化の宝探しワークショップ）

志々島の宝は、環境省の「巨樹・巨木データベース」全国第 29 位の「大楠」だが、その他の自然・文化資源については未発掘・未整理の状態にある。このため参加者全員によるワークショップ形式で「島の宝探し」を行い、資源の洗い出しを行った。今後「志々島大きな木プロジェクトの会」が中心となって、これらの資源を更に補足・整理し、フェノロジーカレンダー（季節暦）や資源マップに落とし込み、現状の資源概要を完成させる。

（志々島エコツーリズムの立ち上げるために必要な今後の取組に関する討論会）

志々島居住者、志々島出身島外在住者、外部ファン組織「志々島友の会」、オリーブ基金からなる参加者全員によるフリー・ディスカッション方式で、「志々島エコツーリズム」を立ち上げるための諸課題と解決の方向について話し合い、進め方に関する合意形成を行った。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

（豊かな自然・文化資源に恵まれながらも過疎化の進展で回復不可能な限界集落一步手前）

瀬戸内海随一の漁獲量を誇り島の頂上まで生花栽培で埋め尽くされていた志々島は文字通りの「黄金の島」であったが、瀬戸内架橋の大規模開発等による生態系破壊による漁業の衰退と産業のグローバリゼーションによる住民の離島により、かつて 1000 名を超えていた人口は僅か 20 数名までに激減、過疎というより島民だけでは再生が不可能な限界集落状態となっている。空家はそのまま放置され、崩壊寸前の民家も多く散見される。

しかし、圧倒的な存在感を持つ「大楠」は単体だけでも十分な資源価値を持つが、一時頂上まで花で埋め尽くされた豊かな土壌と多様な植生、ムール貝に代表される海の生物群等、陸海とも自然資源は全島にわたり今なお豊かである。加えて「両墓制」に代表される独特の風習や生活文化、更には映画「男はつらいよ」や「蒸気機関車」のロケ地として選ばれた瀬戸内海の内原風景が残る佇まい等、一口に言って「絵になる」島である。

（生活・環境保全型の小規模観光による地域再生へ）

瀬戸内海の一部の島で見られるような大型観光開発についての島民意識は総じて否定的であり、島の自然・文化環境を護りながら着実に持続可能な観光を興し、それによって島の活性化につなげたいという基本的な認識を共有、その中核となるUターン・シニアが「志々島大きな木プロジェクトの会」を立ち上げ、基礎的な研究活動に取り組み始めている。過疎の進行により島民自らの再生活動が可能なぎりぎりの段階にあると考えられるだけに、Uターン・シニア有志の登場は、志々島再生にとっていわば首の皮一枚が繋がったラッキーなできごとだった。

（中核となる組織づくりと今後の進め方について）

人口が20数名と極端に少なく、かつ中核となる島民数名以外はほとんど高齢者であることをからまず本格的な推進組織を立ち上げるためには、Uターン予備軍への働きかけや島外在住島民、更には「大楠」ファンを中心とする外部支援者や協賛企業、更には地元行政機関等への呼びかけを行い、島民プラス一定規模の協力者・実働部隊をつくりあげる必要がある。「志々島の楠を守る会」や「志々島の自然と文化を守る会」等の趣旨で多くのステークホルダーに参加してもらい、まずは「志々島エコツーリズム推進準備委員会」のような組織を立ち上げ、「志々島エコツーリズムの目指すもの」を明確にしたうえで、ロードマップや全体構想を含む基本方針の作成を進める。

電気水道をはじめとするインフラが整い最寄りの港から定期船や水上タクシーで20分の距離という恵まれた環境にあるとはいえ、宿泊施設はもとより食事処も皆無という状態では観光客を呼び込むことができても島の経済への貢献度はほとんどない。ガイドング事業だけでは活動そのものを支えることはできない。まずは行政をはじめとするステークホルダーを巻き込んだ全体構想づくりに向かっての取組が不可欠である。志々島が瀬戸内海におけるエコの島づくりのモデルになることを期待したい。

3-13. グラウンドワーク大山蒜山（国立公園大山を中心とした地域）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

大山を中心とした鳥取県西部地域とその隣接地域では、数年前より豊かな自然環境を活かしたエコツーリズム事業を推進しているが、未だ魅力的なエコツアー企画や商品が完成しておらず、事業が経営軌道に乗っていない状況である。

大山は、国立公園に指定される等優れた自然と景観が自慢の名峰で、その山麓や周辺域には、大山集落や皆生温泉の宿泊基地があるが、大山集落はスキー人気の低迷、皆生温泉は団体旅行を対象とした施設の大型化による弊害によって、苦しい経営に陥っているところも多く、その現状を打開する手段としてエコツーリズムやスポーツ観光、健康ツーリズムに望みをつないでいる。

その一方、大山の南側から中国山地にかけて広がる農山村地域では、過疎高齢化が進み、残された自然や歴史遺産、生活文化を資源に、交流人口の増加を目指して、日野郡いきいきツーリズムネットワーク等を組織し、農村体験型観光を進めようと努力している。

このような背景から、大山を含む鳥取県西部では2013年秋にエコツーリズム国際大会の開催が決まっており、エコツーリズム事業に係わる人材の育成とともに、魅力的なエコツアーの商品企画の開発を進めている。

ここ大山地域では、主峰大山をはじめ、烏ヶ山、蒜山三座等の山々の眺望・景観、火山地形、ブナ林・ミズナラ林、湿原・草原、里山雑木林等の植生、オオサンショウウオ等の天然記念物、自然生態系、牧場や山里等の里山・農村景観、大山寺・大神山神社、大山道、宿坊等自然文化遺産、神話・伝説等大自然を背景とした物語が存在しており、これらを資源としたエコツアー企画や自然学校（自然体験型環境教育）事業を進めている。

そのような活動の中で着目したのが、名峰としての大山の自然や景観の魅力であり、昨年度は、大山と同じく美しい巨大火山峰を地域のシンボルやランドマーク、ふるさとの山（富士）として有する名峰地域で景観保全やエコツーリズム、自然学校事業に取り組む組織・団体を大山地域に招いて、「名峰景観ツーリズム・シンポジウム大山」を開催し、活動連携を進めるとともに、名峰地域から本格的にエコツーリズム事業や教育旅行事業に取り組んでいる NPO 法人浅間山麓国際自然学校の橋詰元良理事長、NPO 法人富士山エコネットの三木廣理事長を講師（エコツーリズム推進アドバイザー）にエコツーリズムセミナーを開催し、ロンクトレイル事業やエコツアー型教育旅行事業に取り組むようになっている。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 24 年 11 月 16 日 (金) ～17 日 (土) 平成 25 年 1 月 29 日 (火) ～30 日 (水)
場 所	第 1 回 11 月 16 日 (金) ～17 日 (土) 鳥取県大山町、岡山県真庭市 第 2 回 1 月 29 日 (火) ～30 日 (水) 鳥取県米子市、岡山県真庭市
ア ド バ イ ザ ー	信越トレイルクラブ 事務局長 木村 宏氏 公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー 川嶋 直氏
参 加 者	第 1 回 11 月 16 日 (金) 鳥取県大山町セミナー参加者 実行委員会関係者 (グラウンドワーク大山蒜山、大山観光局、奥大山古道保存協議会、大山中海 観光推進機構等)、自然保護団体 (大山日野川自然の会、晴れの国野生生物研究会等)、エコツー リズム推進団体 (大山自然歴史館、蒜山ガイドクラブ等)、エコツアー実施団体関係者 (大山ツ アーデスク、真庭遺産研究会、蒜山ツアーデスク等)、地元観光機関関係者、自治体 (大山町、 江府町等) 担当者、大学教授 (鳥取大学) 及び、ロングトレイル事業に興味のある一般人 計 50 名弱 11 月 17 日 (土) 大山周辺及び岡山県真庭市 第 2 回 1 月 29 日 (火) 岡山県真庭市セミナー 参加者 17 名 米子市皆生温泉情報交流会 参加者 10 名 1 月 30 日 (水) セミナー (鳥取県米子市) 参加者 実行委員会関係者 (グラウンドワーク大山蒜山、大山観光局、大山中海観光推進機構、大山日野 川自然の会、晴れの国野生生物研究会等)、環境教育・自然体験型教育旅行の推進団体 (サント リーホールディングス、養生の里、森の国、大山青年の家、米子水鳥公園、三瓶自然館、津黒い きものふれあいの里)、エコツーリズム推進団体 (蒜山ガイドクラブ等)、エコツアー実施団体関 係者 (大山ツアーデスク、真庭遺産研究会、蒜山ツアーデスク等)、地元観光機関関係者、自治 体 (真庭市、米子市、大山町等) 担当者、学生 (鳥取大学等)、大学教授 (鳥取大学) 及び、ロ ングトレイル事業に興味のある一般人 計 50 名弱
スケジュール・方法	(第 1 回) <1 日目> アドバイザー: 木村 宏氏 尾高→横原→博労座→枳水等を視察 ロングトレイル・フォーラム大山に講師出演「信越トレイルについて」、情報交換会 <2 日目> 大山寺他、大山地域を視察 (大山寺→枳水→鍵掛峠→御机→下蚊屋→笠良原→鏡ヶ成→刈刈→ 蒜山)、蒜山地域を視察 (三木ヶ原→蒜山高原線→百合原→塩釜交差点→茅部野→郷原→鳩ヶ原 →朝鍋) (第 2 回) <1 日目> アドバイザー: 川嶋 直氏 自然体験型教育旅行勉強会まにわに講師出演 (キープ協会の事業やインストラクション事例等の 紹介) <2 日目> 大山中国山地自然体験型教育旅行フォーラムに講師出演 (キープ協会の事業やインストラクショ ン事例等の紹介)

(3) アドバイスの内容

●木村 宏氏からのアドバイス内容／平成 24 年 11 月 16 日（金）～17 日（土）

- ・ 木村氏には、11 月 16 日（金）に大山スキーセンターで開催した「大山ロングトレイル・フォーラム」での基調講演を依頼する形で、ロングトレイル事業推進に向けての助言・指導を受けることができた。
- ・ 会場となる大山スキーセンターは、大山の中腹、標高 900 メートルあたり大山中の原スキー場の中に建てられた施設で、大山の北壁を間近に仰ぎ、日本海をパノラマ的に見下ろす絶好のロケーションにある。
- ・ フォーラム当日（講演日）は、青空に新雪の大山が山麓から山頂までくっきりと鮮明に見える最高の風景日和であり、講演に先立って、米子空港から会場まで木村氏と移動する途中、少し寄り道をして大山のビューポイントを案内することができ、その移動中も大山地域の環境やロングトレイルとしての大山道（古道）の復元活用について紹介することができた。
- ・ 木村氏の講演は、写真たっぷりのパワーポイント映像を活用して行われ、飯山市と信越トレイル（里山を巡る全長 80 キロメートルのロングトレイル）の概要、関田山脈の成立ちや環境、参考事例としてのアパラチアン・トレイルの紹介、信越トレイルクラブの紹介、トレイル整備の状況、整備にあたっての考え方、メンテナンス体制、信越トレイル・ガイドライン、信越トレイルトレッキングルール、マスコミ・旅行代理店への説明会、二次交通システム構築に向けた検討会議、地区ごとに行った住民に説明会、宿泊施設との連携体制の構築、自然環境教育の場としての利用、交通事業者に向けた講習会の開催、消防署と連携した救助体制の確立ガイド講習、ガイド・レンジャー登録に向けた説明会、テントサイトが平成 12 年 6 月にオープンしたこと、コースの紹介（斑尾高原エリア、涌井～桂池エリア、桂池～牧峠エリア、牧峠以北）等について丁寧な説明や紹介がなされた。
- ・ 木村氏の講演の後、ロングトレイルとして復元活用を進めて大山道（古道）について、蒜山高原を通るコース、奥大山古道、尾高道、坊領道、横手道、川床道等の各ルートごとに、それぞれの区間で復元作業や活用に取り組む団体の関係者からの説明報告があり、木村氏もそれぞれを説明報告の内容をよく聞いており、その後の質疑応答の中で今後のロングトレイル活用等について助言指導がなされた。
- ・ アドバイスの内容は、大山道（古道）の資源性の評価に加えて、その中心にある大山寺集落のロングトレイル事業における位置付けであった。木村氏の助言は、「大山を一周するコースを進めるよりも、その中心にある大山寺地区（大山寺とその周辺に広がる山岳宗教で栄えた聖域的な空間）に向かうそれぞれの大山道（古道）コースの個性や特徴を活かし、大山に向かい歩いて、大山寺（地区）に集まるロングトレイル事業を考える方を優先すべき」という内容に受け取ることができた。
- ・ 翌日の 11 月 17 日は、奥大山古道、尾高道、坊領道、横手道の大山道（古道）4 ルートを歩いて大山寺に集まるトレッキングイベントを計画しており（川床道はこの時期積雪があり除外）、木村氏も視察参加する予定だったが、当日は雪や雨のふる荒天になったため、風雨中で坊領道ルートのみを実施することになり、木村氏も参加を断念した。
- ・ 代わりに木村氏は奥大山地区や蒜山地域（高原）を視察することになり、雨天で視界が十分ではなかったが、高原農村の牧歌的な風景が広がる蒜山高原の景観の資源性は木村氏も評価し、農道等を利用したトレッキングエリアとしての魅力と利用可能性について助言を受けることができた。
- ・ 更に、蒜山高原から米子空港に送る車中では、飯山市の鍋倉高原にあって木村氏から自ら経営する「なべくら高原・森の家」の活動や事業についても紹介を受けることができた。

●川嶋直氏からのアドバイス内容／平成 25 年 1 月 29 日（火）～30 日（水）

- ・ 川嶋直氏には、1 月 29 日（火）の「自然体験型教育旅行勉強会まにわ」、1 月 30 日（水）の「大山・中国山地自然体験型教育旅行フォーラム」に講師出演をいただき、キープ協会等での川嶋氏の活動事例をもとに、大山地域、蒜山（真庭）地域において教育旅行事業や自然学校、エコツアー等を行うにあたり、必要となるガイド・インストラクター等の人材育成の仕組みや求められる参加者対応（ガイド・インストラクション）等についての助言・指導を受けた。
- ・ 1 月 29 日（火）の「自然体験型教育旅行勉強会まにわ」は、川嶋氏の講演と意見交換を中心とした勉強会で、川嶋氏の講演に先だって、真庭地域で取り組んでいる教育旅行について、津黒いきものふれあいの里館長の紹介等があり、自由な雰囲気での勉強会となった。川嶋氏の講演は、ホワイトボードを利用し、身振り手振り等表現力豊かなパフォーマンスで進められ、常にお笑いを交え聴衆を話題に引きこんでいた。
- ・ 講演の内容は、山梨県清里にあるキープ協会で行われている自然学校についての紹介や、事業の成り立ちから周辺環境、活動の理念等を詳しく説明し、キープ協会の教育旅行（環境教育）事業をはじめ、参加者とのコミュニケーションのはかり方やガイド・インストラクションの事例等、川嶋氏の失敗談も交えて紹介を受けた。
- ・ 1 月 30 日（水）の「大山・中国山地自然体験型教育旅行フォーラム」は午前中に、サントリー森と水の学校やそのインストラクターをしている鳥取大学森友サークルの活動紹介、このフォーラムの主催団体の一つであるグラウンドワーク大山蒜山の活動紹介と大山地域での環境教育事業の状況報告、岡山県真庭市の津黒いきものふれあいの里や鳥取県米子市の米子水鳥公園の環境保全や環境学習の紹介が行われ、午後的大山・中国山地における教育旅行の取組紹介として、島根県大田市の三瓶自然館、鳥取県倉吉市の NPO 法人養生の郷の取組が紹介された後、大山の森の国や大山青年の家の取組が紹介される前に、川嶋直氏の講演が約 1 時間 10 分ほどプロジェクターを使って行われた。
- ・ フォーラムの参加者は、大山周辺で環境教育や自然体験活動している団体個人、行政関係者等教育旅行に関心の高い個人・団体関係者が集まった。
- ・ 30 日も、29 日と同じく川嶋氏特有の人を引きつける名口調で、山梨県清里にあるキープ協会で行われている自然学校について紹介。成り立ちから周辺環境、活動の理念等を詳しく説明し、キープ協会の教育旅行（環境教育）事業は、ほぼ農場を中心とする協会の敷地内で行われ、首都圏及び近郊の大都市圏の親子連れ等をターゲットにしている等、その取組やプロジェクトの立て方等について紹介や説明を受けた。特にキープ協会で行われている自然体験型環境教育プログラムの具体的な事例紹介では、導入・展開（本体）・まとめというプログラムの流れが分かり、実際に活動をしている方には取組のヒントになるものであった。
- ・ その後、エコツアー（教育旅行）を企画するうえでのポイントを、構造面と人材の面、そして具体的に長野県の八ヶ岳で行われている婚活プログラムを参考に助言を受けた。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

(木村宏氏からの助言を受けて)

- ・ 大山地域では、NPO 法人浅間山麓国際自然学校が進める浅間山一周ロングトレイル事業に習い、グラウンドワーク大山蒜山が中心となって大山一周をするロングトレイルを進めているが、明確な事業ビジョンを持つまでに至っていなかった。また、ロングトレイル事業についてもしっかりとした連携体制が整っている訳ではないが、木村氏から飯山市で進める信越トレイルの事業やその取組について学び、助言を受けたことで、参加者や関係者は、ロングトレイル事業のイメージをそれぞれの立場で持つことができるようになった。
- ・ 講演で紹介された「信越トレイル利用状況年間が約3万人で、全線開通から4年が経過し信越トレイルの知名度が向上し、またテントサイトがオープンしたこともあり、利用者が年々増えている」ことや、「2004年5月～2008年9月で自然環境調査参加者が約700名」は、ロングトレイル事業に取り組むものとしては、大きな発奮材料であり、希望に変わりうるプレッシャーでもある。
- ・ とりわけ、マスコミ・旅行代理店への説明会、二次交通システム構築に向けた検討会議、地区ごとに行った住民説明会、宿泊施設との連携体制の構築、自然環境教育の場としての利用、交通事業者に向けた講習会の開催、消防署と連携した救助体制の確立等、信越トレイルがこれまでに取組んだ活動について、木村氏から説明を受けるにあたり、今後、大山蒜山エリアでロングトレイル事業を進める上で課題となる内容もみえてきたことから、これまで、大山道の復元活動とわせて、漠然と進めていたロングトレイルやトレッキング事業について、フォーラム参加者全員が情報を共有することで、参加者それぞれが具体的な事業イメージを持つことができたと考えている。
- ・ あわせて、木村氏の助言や信越トレイルとの環境条件を比較する中、ロングトレイル事業を進めるにあたり大山道(古道)の資源性や魅力を再認識することができた。

(川嶋直からの助言を受けて)

- ・ 川嶋直氏の講演から参加者が強く受けた印象は、その人を引きつける話術の素晴らしさとあわせて、エコツアーや教育旅行等において、参加者から求められるガイド・インストラクター像である。
- ・ これまでキープ協会の関係者やキープ協会でテクニックを学んだものからキープ協会が進めている環境教育事業について話を聞く機会は、少ないながら大山地域においてもあったが、何となく分かりにくく、グラウンドワーク大山蒜山の役員を含め「キープ協会は敷居が高い」という印象を持つものもいたが、川嶋氏の講演や人柄からその印象は一変したと思っている。
- ・ その極めつけが、川嶋氏自身のパートウォッチングでのガイド失敗談？やアナトール・フランスの言葉「たくさんを教えることで、あなたの虚栄心を満足させるのはやめなさい。火花を散らしさえすればそれで良いのです。良い枝があれば、火は自然に燃え上がるのですから・・・たくさん教えて満足するのは、教える側だけ」である。
- ・ 参加者にとっては、環境教育や教育旅行の分野で有名なキープ協会の事業や取組について知ることは勿論、この分野において功績のある川嶋氏のような個性的・魅力的な人物の話を直に聞くことができ、大山蒜山地域において自然体験型教育旅行やエコツアーを進めるにあたり、目標とする事業イメージや事業に係わる理想的な人物像をそれぞれの立場で明確にすることができたと考えている。

●今後の期待される効果

(木村 宏氏からの助言を受けて)

- ・ 「大山を一周するコースを進めるよりも、その中心にある大山寺地区（大山寺とその周辺に広がる山岳宗教で栄えた聖域的な空間）に向かうそれぞれの大山道(古道)コースの個性や特徴を活かし、大山に向かい歩いて、大山寺(地区)に集まるロングトレイル事業を考える方を優先すべき」は、木村氏の助言として受け止めている。
- ・ この木村氏からの助言と信越トレイルの取組を参考に、大山蒜山地域で大山道(古道)を活かしたロングトレイル事業を展開していく方向であることから、信越トレイルに習い、大山道について、蒜山高原を通るコース、奥大山古道、尾高道、坊領道、横手道、川床道等の各ルートでの古道の復元活用や景観保全の活動を加速させることで、埋もれつつあった歴史の掘り起し、歴史的資源の復元や次世代への歴史の継承が期待される。あわせて、古道の復元やトレイル整備によって、林床への日照が拡大し、トレイル沿いの植物個体数が増加、健全で生物多様性に富んだ森林環境の再生活動への発展することを期待している。
- ・ また、大山道(古道)の復元活用をロングトレイル事業とわせて進めることで、他の地域にない大山地域オリジナルな事業展開も可能となり、マスコミ・旅行代理店への説明会、二次交通システム構築に向けた検討会議、地区ごとに行った住民説明会、宿泊施設との連携体制の構築、自然環境教育の場としての利用、交通事業者に向けた講習会の開催、消防署と連携した救助体制の確立等の地道な活動を着実にすすめることで、エコツーリズムが普及すると考えている。

(川嶋 直氏からの助言を受けて)

- ・ 今回の勉強会やフォーラムに参加した人たちは、大山蒜山地域において、環境教育や教育旅行、エコツーリズムに取り組む組織・団体の代表者や関係者であり、川嶋氏の講演を受けて、「キープ協会」という豊富な実績や人材を有して教育旅行に取り組む自然学校系機関・団体の事業内容を知ることができ、この分野において遅れをとっている大山蒜山地域において自然体験型教育旅行やエコツーリズムを進めるあたり必要とされる人材育成やプログラムづくりを進めるためには、それぞれの団体が個別に対応するのではなく、連携して取り組むことの必要性・重要性を認識することができたことから、大山蒜山地域を含む中国山地において、自然体験型教育旅行やエコツーリズム事業を推進する広域ネットワークを形成する気運が高まったと考えている。山としての魅力や資源性について情報発信を行うことができるとともに、資源の保全と活用が進むと期待される。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

(木村 宏氏からの助言を受けて)

- ・ 木村氏から紹介説明を受けた信越トレイルでのロングトレイル事業の取組については、これまで手探りで大山道の復元活用やロングトレイル事業を進めている大山地域にとっては、全ての内容が参考になる。
- ・ とりわけ、信越トレイルの理念（環境の保全を最重点とする。ハイカーの安全の確保に努める。伐採は極力避け、工作物も極力設置しない（道標や案内板は除く）。ボランティアの力で整備を実施する。は、大山蒜山地域でも重要と考えていたが、移動中に木村氏から事例をもって聞かされた公共事業におけるロングトレイル整備にあたっての問題点は、説得力のある話であり、大山蒜山地域でロングトレイル事業を進めるにあたり、絶対的に取り入れるべき理念と考えている。
- ・ また、信越トレイル・ガイドラインに示された内容（生物多様性の保全を基本とします。自然・文化を学び、

伝えていきます。人と人との自然を通して地域の活性化に貢献します。) 及び、信越トレイルトレッキングルールに示された内容(トレイル内を歩きます。動植物を大切にします。ゴミはすべて持ち帰ります。トイレは施設を利用します。表示された決まりを守ります。他人に配慮します。事前に情報を収集し計画を立てます。)は、あたり前のようなことであるが、これをガイドライン、ルールとして明確にし、関係者及び利用者にも情報の共有をはかっていることは重要なことで、木村氏の講演を受けて、大山蒜山地域でロングトレイル事業、エコツーリズム事業や景観保全を進めるにあたってはカントリーコードとも呼ばれている地域自主ルールづくりから取り組むことにした。

(川嶋 直からの助言を受けて)

- ・ 川嶋氏の講演の中にエコツアーの作り方があり、「どのような人材を育てるのか?」ということで、①脚本が書ける人(旅の「場所」「時間」「体験プログラム」を組み立てる人)、②役者(お客様の前に立つガイド・インタープリター)、③プロデューサー(旅の「人」「予算」「組織」を組み立てる人)等の人材が必要とされることについて共通認識を持つことができた。大山蒜山地域においても自然体験型教育旅行やエコツーリズム事業を推進するガイド・インストラクター及びマネージャー(あるいはプロデューサー)等の人材を育成することは大きな課題である。
- ・ 歴史があり実績豊富なキープ協会と、大山蒜山地域で活動する団体とでは、比較するまでもなく大きな差があるが、幸いなことに、大山蒜山地域を中心とする中国山地には、エコツーリズムや自然体験型教育旅行を進めるにあたり、資源となる自然や文化遺産、自然と共生する人の暮らしも残り、中国地方の最高峰である大山は、古来より信仰の山であり、ブナやカエデの巨木が育つ中腹の天然林の中には、大山寺や大神山神社等数多くの歴史文化遺産が集中している。信仰によって聖域として守られた大山には西日本最大級のブナの天然林が広がり、広く国立公園に指定され、大山の山麓には昔ながらの人の暮らしや生物多様性豊かな山村の風景が広がっている。
- ・ そして、大山から岡山県北部にかけての中国山地では、特別天然記念物オオサンショウウオをはじめ、春の女神・ギフチョウ、イヌワシ、クマタカ、ヤマネ、アカショウビン、ヒメボタル等の野生生物が多く生息し、地元住民が主体的に野生生物の保護活動を行っている。加えて、この地域は、大山信仰の古道やタタラ製鉄の遺構が多く見られる他、出雲神話の舞台でもあり、他の農村地域ではみられない特有の自然や歴史文化が残る地域であり、そこに暮らす人々の手による地道な自然保護(再生)活動や歴史文化遺産保存活動が人知れず続けられている。
- ・ これら地域資源やそれを保護保全する活用とあわせて、今回の勉強会やフォーラムに参加した環境教育や教育旅行、エコツーリズムに取り組む組織・団体の代表者や関係者が連携し、サントリー森と水の学校等大山蒜山域で取組まれている環境教育事業等を活用して、人材の発掘、育成、呼び寄せも可能と考えており、キープ協会での環境教育事業に係わる人材育成の仕組みを習い、単独ではなく地域連携・広域連携による人づくりの体制づくりを進めていきたいと考えている。

●その他感想

- ・ 我々名峰景観ツーリズム・シンポジウム実行委員会は、一昨年の秋に開催した「名峰景観ツーリズム・シンポジウム大山」の開催を契機に発足させたネットワーク組織で、グラウンドワーク大山蒜山を中心に、NPO 法人富士山エコネットやNPO 法人浅間山麓国際自然学校、全国の名峰地域で活動する団体・組織と連携し、景観保全やエコツーリズムを推進していこうとする団体である。
- ・ 木村氏、川嶋氏ともに、長野県、山梨県という名峰に景観に恵まれた地域に暮らしており、木村氏には北信五岳、川嶋氏は八ヶ岳が近くにあるということで、名峰関係での連携をお願いしようと期待していたが、今回はそのあたりの話に踏み込むことができなかった。そこは残念であった。
- ・ とりわけ、八ヶ岳は山麓地域が開発や宅地化、圃場整備（農地の区画整理）等で、昔懐かしい農村風景が失われつつあるという印象をもっており、八ヶ岳山麓の農村域をフィールドとした環境学習イベント等についても時間があれば、話を聞いてみたかった。
- ・ 木村先生、川嶋先生には、これを機会に同じく名峰火山をシンボルとする地域として、今後も交流を続け、エコツーリズムを進めるにあたり、ロングトレイルや教育旅行を活用した山麓域での景観や生物多様性の保全についても、ご指導ご助言ご協力をいただきたいと願っている。



(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長 木村 宏 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ すでに大山蒜山地域で取組が始まっているエコツーリズム推進事業のうち、山岳景観や周辺の自然景観を楽しみながら歩く道の整備を計画し、エコツーリズムを核としたツアー企画や商品開発に取り組む地域において、名峰大山をぐるりと回るルートを探し、富士山や浅間山の周遊トレイルの勉強会を2月に実施、これに引き続き「信越トレイル」をケーススタディーにした既存の古道を利用したトレッキングルート整備とツアー企画構築についての勉強会が、初雪に覆われ、ゲレンデの準備真っ最中の大山中ノ原スキーセンターにて開催された。

●アドバイス（講義等）の概要

- ・ 講義は、日本ロングトレイル協議会の活動内容や現在の日本国内各地におけるロングトレイルの現状、信越トレイル設立の経緯、アパラチアン・トレイルへの視察、整備マニュアル・ガイドラインの作成、ボランティア組織の運営、維持管理の仕組、地域との連携、情報発信等についてお話した。
- ・ 特に信仰の山へ詣でるための「大山古道」を使いエコツーリズムの柱としていく構想を伺い、信越トレイルに存在する長野・新潟県境の峠道が地域をつなぐ交流の道であり、戦国時代の戦道だったこと、南の起点でもある斑尾山がまさに修験の山であったことから、信越トレイルにまつわる歴史的背景をお話させていただき、その情報を提供するガイドの勉強会等の話もさせていただいた。また、でき上がったトレイルの維持管理について、アメリカのアパラチアン・トレイルを視察し、そのシステムやマニュアルを大いに参考とし、次の世代に残していく仕組を作った事例を紹介もした。
- ・ 現在信越トレイルは10の市町村境に接し、150もの集落を貫く峰の道で、周辺関係者の理解なくして存在しない。また何より地域住民の理解を第一に完成までの8年間、多くのボランティアがルートづくりに参加し、その後の維持管理もボランティアや地域の関係者が行っている。今後の世代へこの資産を継承していくための、子どもたちの学びの場としての活用も実施、地域の学校等との連携も大切にしている、という話をさせていただいた。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 古道復活は、単なる観光目的での整備ではなく、古くから信仰の対象であった大山をたどる道として、地域住民や歴史の研究者等の協力を得て、何故古道復活か、再利用の目的や住民との関わりを明確にし、住民理解と協力のもと実施する必要がある。点在する集落の想い、歴史観、古道を巡った人々の想いはそれぞれ貴重な財産であり、その道を歩くということはさまざまな想いを巡る旅でもあるはずで、更にこの想いを新たに歩く人に伝えることが古道復活のポイントではないでしょうか。
- ・ この勉強会の2日目に予定されていた、古道を歩くツアーが荒天のため中止になったこともあり、現場を歩くことができず、車で山麓をご案内頂くにとどまりました。すでに古道を利用したツアーも実施されているようですが、環大山すべての古道の利用のガイドラインやルール、整備方法や、PR等、トータルコーディネート組織が明確になっているのか、ツアーガイドまたはその組織の成熟度はどうか、地元の理解はどうか、等、さらなるエコツアー推進のための確認が必要ではないでしょうか。古道を巡るための情報があまりありませんでした。大山周辺にすでに運行されている「大山ループバス」との関わりや、各施設、宿や旅行代理店との関係もしっかり構築する必要もあるのではないのでしょうか。

- ・ エコツーリズムを推進する体制づくりは、オール大山の体制づくり、理念の共有が最重要課題ではないでしょうか。勉強会の参加者の多くは、大山の歴史や文化、自然環境にとっても熱く語られる方が多くいらっしゃいました。これらの想いを一つにする、そして形にするコーディネート役（人であり施設）の必要性を感じました。
- ・ 勉強会でもお話ししましたが、現存する大山詣での古道を、あえて「ロングトレイル」と呼ぶ必要はないように感じました。ロングトレイル整備というよりも、古道としての意識の共有、歴史の継承、インタープリテーションや、維持管理の仕組づくりが優先課題で、大山詣での道は地域の宝、「古道」としておく。更に環大山を結ぶ（大山に縦ラインで向かった古道を大山の裾野で横ラインにつなぐ）道の整備こそ、ロングトレイルと呼ぶに相応しいのではないのでしょうか。この「道」の整備によって、大山・蒜山エリアの歴史の足跡を巡る大山古道巡りとそれをぐると結ぶ「環大山蒜山ロングトレイル」ができれば、2本の柱でエコツーリズムを売り出すことができるのではないのでしょうか。
- ・ 蒜山高原周辺もご案内いただきましたが、大山地域とは違う風景が広がり、農村風景あり、田園地域、高原エリアと実にバリエーションにとんだ風景が広がり、またどの角度から見ても大山の勇姿がそびえ、その表情や形が全く違う。大変魅力的な風景が周辺には広がっています。
- ・ 富士山の周辺を巡る道の整備も始まったようです。名峰景観ツーリズムに相応しい環大山蒜山ロングトレイルと、古道大山道がともに刺激し合い、相乗効果を得、良い品質で提供されることを夢見て大山をあとにしました。

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 今回エコツーリズム推進アドバイザー派遣を依頼された「グランドワーク大山蒜山」は鳥取県（大山）から岡山県（蒜山）に渡る地域を中心に自然保護・景観保全の活動を進めている団体です。グランドワーク大山蒜山は、この地域での風景保全や生物多様性の保全と合わせて、大山蒜山自然学校の運営、大山古道の復元活動、名峰地域の風景風土を楽しむ田舎暮らしツーリズム、ギフトウオウやオオサイショウウオの生息環境保全等の事業を、地域住民、行政、企業を協力しながら展開しています。奥大山では、サントリー水育「森と水の学校」にインストラクターとして環境学習プログラムづくりに関わっています。

●アドバイス（講義等）の概要

（「自然体験型教育旅行勉強会まにわ」での講演と意見交換）

- ・ 参加人数が10数名だったので、パワーポイントでのプレゼンテーションはせずに、ホワイトボードにA4コピー用紙にキーワードを書いた紙を次々貼ってゆく「紙芝居プレゼンテーション法（KP法）」で講義を実施しました。
- ・ 最初にキープ協会での取組の紹介をし、キープ協会の環境教育事業の基本は、一方的に情報を伝える手法は取らず、参加者（学習者）中心で「参加型・体験型」を大事にしていることをお伝えしました。
- ・ 聴衆の中に、実際にガイドをされている方が多かったこともあって、「伝え方」について少し丁寧にお話しました。つまり、伝える側の「伝えたい思い」だけで伝えても必ずしも伝わってはいないこと。受け取る側の「受け取りたい思い」を作り出すこと、そしてそれに答えることが大事という意味のお話をしました。
- ・ 川嶋氏自身の30年前のバードウォッチングの失敗談等も織り交ぜながら、伝える側からだけの論理で教育プログラムを組み立てることへの警鐘をお話しました。
- ・ 講義が終わった後には、数人で小さなグループを作っていただき、講義で聞いた内容についての感想を言い合ったりしました。その結果浮かび上がってきた質問をしていただき、それに答えてゆきました。

（「大山・中国山地自然体験型教育旅行フォーラム」での講演と質疑応答）

- ・ 前日と違って大きな会場で50数人の参加者であったため、パワーポイントによるプレゼンテーションの方法を取りました。
- ・ 冒頭で、公益財団法人キープ協会の概要を紹介、次にキープ協会で実施している「自然体験プログラム」の紹介をスライドを使って行いました。体験プログラムはどれもちょっと視点を変えるだけで「すぐに真似できる」ものばかり、本当は実体験をしていただきたかったのですが、ここではスライドでの疑似体験をしていただきました。皆さん楽しそうに聞いていただきました。
- ・ その後「教育とは、伝えることとは」「環境教育とは」「エコツアーに必要な人材」「その人材の育成手法」「（環境教育プログラムの）企画の作り方」等を紹介した後、ここ数年私達が活動をしている、山梨県・長野県にまたがる八ヶ岳地域全体で非常に高い人気を維持しているイベントを紹介しました。それは「婚活 de 八ヶ岳」というイベントです。年間40回近く開催され（ほぼ週に1回）、毎回20数名の定員をほぼ一杯にしているイベントです。主催者は地域のそれぞれの宿泊施設・団体等、行政が主催の場合もあります。統一されているのは、「婚活 de 八ヶ岳」というネーミング、当日の進行役（ファシリテーター）の存在、そして広報の一本化です。「婚活」という社会的ニーズと、地域の小さな、でも個性的なさまざまなグループがいるというポテンシャルとがうまく合致した好例として紹介しました。（実は、このイベントのファシリテーターは、元キープ協会環境教育事業部の職員なのです）

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ グランドワーク大山蒜山は岡山鳥取両県にまたがる非常に広い地域の地域づくりに関わる団体です。関係する県が2県、市町村は更に多い数となります。このことから分かるように、この働きは行政主導型ではなく、民間のネットワークで広域の地域づくりを試行している面白い団体であると思いました。
- ・ 1月29日の「自然体験型教育旅行勉強会まにわ」の集まりでは、具体的な取組として真庭町の津黒いきものふれあいの里館長から、真庭町の教育旅行の取組のお話を伺いました。真庭市は「バイオスタウン真庭」としてツアーの試みもされていることとお聞きしました。「バイオマス発電」や「木質ペレット」、他にも「自然エネルギー」のさまざまな試みは、教育旅行（エコツアー）実施に向けて、非常に高い地域のポテンシャルをお持ちだと感じました。
- ・ また29日の集まりには、関西地域等から真庭の自然が好きで移住された方々も数名参加されていて、その方々を中心に真庭の魅力を伝える「ガイド」事業も実施されていることも伺いました。具体的なガイドの中味（何を、誰に、どうやって伝えているのか？）については詳しくお伺いすることができませんでしたが、こうした人材は今後の真庭の教育旅行推進のために非常に重要な人材であると思いました。
- ・ 蒜山・大山両地域とも、私がお伺いすることがきっかけで、地域の自然・歴史・文化資源をエコツーリズムに活かしてゆく方向性を持つ方たちが集まり、情報を共有することができたことは大きな意味があったのではないかと思います。これを機会に更に地域の強いネットワークが形成され、同時に（一緒に仕事をする）「ワーキングネット」になることを期待しています。
- ・ 特に大山地域では2013年秋にはエコツーリズム国際大会が計画されているというお話も今回お伺いしました。今回のような小さな「つながりづくり」の試みをベースにして、秋の地域外からの強い刺激をバネに、一層のエコツーリズム事業の推進を期待する所です。
- ・ また、大山地域ではサントリー森と水の学校の事業も数年にわたり行われています。こうした企業とのコラボレーション事業が良い先例となって、関西・中国地域の企業と力を合わせて、さまざまな社会的課題解決に向けた働きを進めて行かれることも期待されます。コラボレーションにより良い事業が行われることは、企業にとって高い社会的評価を機会になると同時に、地域の小さな団体にとっても安定的な事業を行う良い機会となることでしょう。

3-14. NPO 法人あとう観光協会（山口県山口市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

阿東地区は、あとうスロー・ツーリズム推進協議会を立ち上げ農業体験、農家民泊をスタートさせている。エコツーリズムについては、その言葉を知る住民も少ないような状況である。

蔵目喜の桜郷銅山・静御前墓所のボランティアによるガイド、高岳の登山道整備等、エコツーリズムに結びつく活動は行っている。高齢化が進みボランティアガイドの後継者づくりが必要である。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 24 年 11 月 27 (火) ～平成 24 年 11 月 29 日 (木)
場 所	山口県山口市阿東（篠生地区、蔵目喜地区、徳佐地区、地福地区、嘉年地区）
アドバイザー	地域振興コンサルタント 緒川 弘孝氏
参加者	阿東地域づくり協議会、あとうスロー・ツーリズム推進協議会、あとう観光協会 阿東特産品振興連絡協議会、あとう観光協会会員、常德寺整備委員会
スケジュール・方法	【1 日目】 篠生地区視察、エコツーリズムについての講演会&意見交換会 【2 日目】 蔵目喜地区視察、徳佐地区視察、地福地区視察 【3 日目】 嘉年地区視察、徳佐地区視察、 資源活用進行中の活動と今後の展開についてのアドバイス



(3) アドバイスの内容

●1日目

- ・ 篠生地区視察では、スロー・ツーリズム事業の農家民泊受入先を訪問し話を伺う。初めての経験ではあったが、民泊された方と打ち解けてスムーズに進行ができた。今後機会があれば受入をしたいとの事である。晩御飯で食べたお米が美味しくて 5 キログラム入りを買われたそうである。うまくお金が落ちる仕組みづくりが必要とのアドバイスを受ける。家庭料理大集合では、52品の料理が提供され、見て、食べて、語ることができた。多様な家庭料理の楽しみ方や農家の知恵についてアドバイスを受ける。
- ・ (エコツーリズムについての講演会&意見交換会)
「課題の打開策について」阿東を未来へ伝える、エコツーリズムの可能性について、新しい観光による地域振興の姿エコツーリズムとは何か？阿東でエコツーリズムをやるには、阿東の観光の状況、地域で宝探しをやるには？ということをテーマに講演いただいた。

●2日目

- ・ 蔵目喜地区視察では、世話人より、桜郷銅山の歴史、国指定を受けた常德寺について話を伺い、現地の視察を行う。桜郷銅山は 1200 年の歴史を持ち奈良の大仏に使用されたとの言い伝えがある。銅についても何に使われているのかの説明が必要とのアドバイスを受ける。常德寺は雪舟が係ったとされている絵や国より研究者が調査に来山。
- ・ 12月にあとう観光協会が主催で上記 2箇所をめぐる「史跡めぐり」を開催するに当たり、日程として、まず歴史等の説明から始めた方が期待感も上がりスムーズに進行できるとのアドバイスを受ける。
- ・ 徳佐地区視察では、友清りんご園で話を伺う。創始者の友清氏が昭和 21 年当時の山口県内の気象データを集め、研究し、りんごの栽培を始めた。安心・安全の追求で、100 トン以上の製造・施肥をしている。1日 1個のりんごは医者要らずと言われる程健康作用がある。創園当時に植え付けたりんごの樹が今も 1000 個以上の実をつけている。こうしたことに付加価値を付けてエコにつながる方向を目指すようアドバイスを受ける。
- ・ 地福地区視察では、しもせりんご村で話を伺う。りんご狩りの他、ドッグランコースやペットと一緒に泊まれる民宿がある。クジャク、七面鳥等の鳥も飼育（防虫・除草効果）している。ピザハウス、バーベキューハウスも併設。特産品の開発にも力をいれているが、しもせりんご村ならではのオリジナル商品作りをした方が良いとのアドバイスを受ける。

●3日目

- ・ 嘉年地区視察では、世話人に話を伺う。水出の泉、厄神舞、土居神楽、しりふり茶等伝統があり文化、行事をうまくつなげ、地域の宝探し等、点から線につなげるようアドバイスを受ける。
- ・ 徳佐地区視察では、船平山に関して世話人に話を伺う。スキー場でもあるこの地を手入れしてゆうすげの群生地となった。7月にはゆうすげ祭りを開催。ターゲットゴルフも行っている。冬季には、雪祭りを開催し手作りスキー（たーたー）を製作し滑る。もっと PR して船平山地域が盛り上がり、地産地消につながるアドバイスを受ける。
- ・ 静御前墓所、徳佐八幡宮、願成就温泉、高岳について世話人に話を伺う。静御前墓所、徳佐八幡宮は歴史的にみても非常に価値がある。静御前の掛け軸があるが保存状態が良くないので補修し、来春完成する阿東交流センターに常設した方が良いとのアドバイスを受ける。願成就温泉について静御前銅像等の PR の強化、高岳についても登山道整備をしながらの PR について発信していくようアドバイスを受ける。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 緒川氏の講演、意見交換、現地視察での意見聴取等を受け、参加者、関係者、事務局を含め改めてエコツーリズムの必要性を感じた。

●今後の期待される効果

- ・ 阿東地域には、まだまだ良いところがたくさんある。一つの基準ではなくオンリーワンを。阿東の強みとして外から帰った人が携わっている。お客様目線の客商売が身についている。あとう観光協会が指令塔になり、交通整理をして適材適所にあてはめていくことにより、相乗効果が期待できる。



(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 緒川氏の講演内、マオリツアー、ワイポウムの森を巡るナイトツアー、カイコウラの「旅人の木」で旅行者に木を植えてもらう活動、キルギスタン・コチスル市、御蔵島・イルカウォッチング船では、人口 300 人に対し年間 1 万人が訪れる。観光局の手づくりマップ等。

●その他感想

- ・ エコツーリズムは、「地域の人々の暮らしを守る」「自然を守る」「自然を楽しむ」この 3 要素が大事であり、阿東地域においても自然と文化を守り、伝える人を育てることが必要である。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

地域振興コンサルタント 緒川 弘孝 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 山口市阿東地域は、昨年度、「あとうスロー・ツーリズム推進協議会」を設立し、農業体験や民泊等のグリーン・ツーリズムを試験的に始めたところであり、エコツーリズムについては、まだその言葉を知る住民の方も少ない状況である。ただし、桜郷銅山周辺や静御前の墓等のボランティアによるガイドツアーや高岳山の登山道整備等、エコツーリズムに結びつく取組は始まっている。
- ・ 後述するようにエコツーリズムの素材はたくさんあるが、ガイドやインストラクターの担い手不足が大きな課題である。人口そのものが大きく減少していく中で、現在、ガイドをされている方は高齢者が中心であり、地域の歴史や文化に詳しい後継者が見当たらないと口にされていた。

●アドバイス（講義等）の概要

（講演・意見交換会内容）

- ・ 初日の講演・意見交換会では、日本や世界のエコツアーの事例を紹介しつつ、エコツーリズムとは何かを解説するとともに、まずエコツーリズムを自分で体験しないことには、お客様に提供する側になることはできないと強調し、阿東の周辺でのエコツアーを自ら体験することを提案した。
- ・ エコツーリズムの三要素（観光、環境保全、地域振興）が、いずれも欠くことができないことを強調するとともに、エコツーリズムのノウハウから入るのではなく、エコツーリズムの目的と目標をしっかりと地域自らが設定して共有し、地域の限られた力を共通の方向に向かってまとめるべきだという、エコツーリズムの地域づくり初動にあたっての最重要ポイントを強調した。
- ・ 更に、地域が売りたいものではなく、エコツーリズムの三要素それぞれのお客様は誰かを考え、それぞれのお客様のニーズを考える“お客様目線”への発想の転換が必要であるとし、その考え方を示すとともに、具体的に阿東地域の地理的条件や観光データを分析して例示した。
- ・ エコツーリズムの地域づくりで最初に手がける具体的取組として、お宝マップとフェノロジーカレンダー（季節暦）の例も示し、地域の宝探しの方法の概要も説明した。
- ・ 講演の間、適宜、参加者の質問や意見をうかがうとともに、アンケートも実施して、更に意見を集めているため、今後、地域でのエコツーリズム推進の方向性を考える上で、活用してもらいたい。

（視察・ヒアリングを踏まえたアドバイス）

○民泊での“意外な宝”探し

- ・ 既に昨年から試行を始めたスロー・ツーリズム推進事業では、篠生地区で地域の家庭料理を持ち寄ったところ 52 品も集まり、大きな地域の魅力となりうる。料理のネーミングを工夫したり、民泊した家庭によって異なる多様な家庭料理が楽しめること等を、発信する際に活用できる。渋柿を干して作るだけでなくラップに包んで冷凍して作る等さまざまな農家の知恵や、近所の人と大人数で一つの大きなテーブルでワイワイと食事すること等も、マンション暮らしの都市住民では得がたい経験として民泊体験者に好評だったこともあり、こうした“意外な成功例”を探すことも重要なポイントである。

○農業とエコツーリズムの連携・相乗効果

- ・ 民泊体験者が食べた地元産の米が美味しかったので、買って帰ったようである。この阿東米は、魚沼産を凌ぐとさえ言われる品質であり、遠方から買いに来る客もいるほどだが、阿東米だけでなく、阿東りんご、阿東和牛、長門峡なし等、多くの優れた全国区になり得る農産品があるにも関わらず、ブランド化が追いついていない。エコツーリズムで形成された地域のイメージが、そうした農産物のイメージを高め、良質な農産物を知る消費者が地域を訪れてエコツーリズムを体験する…、そうした相乗効果も大いに期待されるだけに、観光関係者と農業関係者が、エコツーリズムの意義と効果を認識・共有することも重要である。

○銅山のガイドツアーの面白化

- ・ 既にガイドツアーが実施されている蔵目喜地区の桜郷銅山は、産出した銅が奈良の大仏に使われたと伝わる等 1200 年の歴史を持つ。山間にひっそりと佇む集落の狭い場所に 5,000 人もの鉱夫が住まい、遊郭もあるほど賑わった場所として隔世の感がある様子や、採石場で地層が露出し、粘板岩と石灰岩の間に銅鉱石を含むマグマが流入した様子が、まるで断面図を見るかのように見学できる箇所があったり、精錬で溶かした岩が捨てられた場所では鍋の形の岩が転がったりしている。この地区では、「銅」「赤釜」「町」「蔵目喜」等、銅山や銅で栄えた当時の様子に因んだ地名が多い点も面白い。更に、この地区には雪舟が作庭に関わったと伝わる庭園跡もあり、雪舟の絵との類似点も見られる。
- ・ このように蔵目喜地区では、産業史等の歴史、地質、風景、芸術等さまざまな分野で興味深い素材が多いが、鉱山や地質に関しては、素人には分かり難い専門用語があったり、説明が難しいものもあるため、興味が一般の方の目線で、どのように分かりやすく、面白く提供できるかが課題である。例えば、銅そのものについても、一般に目に触れる機会が減っているため、現在は十円玉や電線の中に使われ、コンピュータやインターネットをはじめ電気を使う現代文明に欠かせないものであることや、東大寺の大仏から銅銭、鉄砲玉等にも使われ、中国との密貿易にも利用された歴史等、身近に感じる説明や、面白い裏話等も加えると良い。

○観光農園のエコツアー化

- ・ 長門峡と並ぶ阿東の観光資源である多くのりんご園は、その全国に誇れるリンゴの高い品質もあって、現在も人気を保っているが、阿東でのリンゴ生産の創業者の友清氏が、気温、霜、台風等の気象条件を主に考慮しながらリンゴの適地を探し、阿東の地を選んだストーリーや、コーヒー豆やオレンジジュースの搾りかすやもみ殻等を再利用した循環型農業への取組等は、自然を学び環境に配慮するエコツーリズムと親和性があるため、バックヤードの見学も含めたエコツアーの素材にもなり得る。

○祭りに関する宝探し

- ・ 嘉年地区の須賀社の祭りで舞われる「厄神舞」は、舞人が神懸りになる珍しい祭りとして知る人ぞ知る存在である。神事の際に飲む「しりふり茶」という特別なお茶も伝わる。また、嘉年地区には「土居神楽舞」という神楽も伝わっている。こうした祭りにまつわる行事や料理や習慣等で、魅力ある資源がまだまだ存在するかもしれない、お宝マップやフェノロジーカレンダー等を通じた地域の宝探しを行うことが望まれる。

○文化の保全と再興

- ・ 阿東には静御前の墓があり、江戸時代の有名画家・真龍によるとされる静御前の姿絵の掛軸が伝わっているため、適切な場所に展示して活用することが望ましい。ただし、その保全状態が良くないため、最適な保全方法を調査する必要がある。
- ・ 阿東に伝わる静御前の伝説の根拠となっているのは、阿東の徳佐八幡宮で全国でも最も早く雅楽の演奏が始

まったとされることによるが、その雅楽を演奏できる担い手が、現在は途絶えており、また雅楽の楽器等も伝わっていない。こうした伝説に関連する文化や行事・習慣等を、更に掘り起こして活用できるものがないか、宝探しを行うことがまず求められる。

○自然資源のエコツアー活用

- ・ 阿東で最大の観光地・長門峡は、年間 40 万人の観光客が訪れるにも関わらず、地域にお金が落ちる仕組みや、阿東の他の観光地・観光施設への客の流れが弱いことが課題である。スキー場がある十種ヶ峰や船平山では、夏季、登山マラソンやゆうすげ祭りが実施されているが、それ以外の時期の活用が課題となっている。
- ・ 現在、ボランティアによるガイドツアーやイベント等が実施されているが、自然観察やナイトツアー等も加えて強化するとともに、民泊も組み合わせる等地域のグリーン・ツーリズムと連携して、地域全体での滞在型につなげていくことが望ましい。
- ・ 高岳山では、ボランティアによる登山道整備が行われているが、地域を挙げて協力・参画できるよう、信越トレイル等も参考に気運の醸成がまず求められる。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 阿東地域は、阿東りんご、長門峡なし、阿東米、阿東和牛等、全国的なブランドとなり得る特産品が多く、一定のファンを持ちながらも、それらが地域振興に十分に活かされてないというのが、最も強い印象である。それらは、“山口の北海道”と呼ばれる阿東地域の厳しくも豊かな自然に育まれていることから、それらの質の高い特産品の愛好者は、阿東の自然に関心を持つ可能性が高いし、りんご園等では堆肥づくり等で環境に配慮した農業に取り組み、エコツーリズムとの親和性は高い。全国的に農業や観光農園が低迷する傾向にある中、阿東地域でもその波を被りつつあるならば、地域ブランドの強化や農家の副収入の確保に、エコツーリズムが果たす役割は小さくないと言えるし、エコツーリズムが、訪れた人々に阿東の農産物の質の高さを知るきっかけにもなることは、口コミやネットで発信された個人的な情報が商品選択で重要視される時代にあっては、無視できないものとなるだろう。そのような観光と農業の相乗効果を演出するエコツーリズムの意義を、観光関係者と農業関係者がともに認識・共有し、地域全体でエコツーリズム推進の気運を形成することが、最初にして最大の重要なポイントであると感じた。
- ・ 現在、阿東地域では、さまざまなガイドツアーが試行されているが、ガイドの方々が高齢者が占める割合が非常に多く、後継者づくりが課題として挙げられている。そうした人材探しも、まずは地域全体でエコツーリズムの意義を認識・共有した上での気運醸成が前提となるであろう。
- ・ 阿東地域でも、人口減少・高齢化が深刻になりつつあるが、外からの移住者やUターン者が多いことは、非常に明るい材料である。あとう観光協会の理事長も若き移住者であり、地域づくりに意欲的な方々が多い。また観光農園が多い地域であるため、外のお客様の目線で考えられる方々も多く、地域側の目線だけの独善に陥る心配も少ない。そのような点から、私としては、エコツーリズム推進に必要な人材確保に関しては楽観視している。
- ・ ただし、上記のような豊かな特産品や意欲的な人材の多さが、逆に地域としてのまとまりのなさにつながる可能性があり、エコツーリズムを始めた当初は盛り上がりつつも、その後、空中分解することは懸念される。また、一方で人材や予算は限られているため、バラバラの方向性で進めば、限られた力が更に分散してしまう。まずは、講演で述べたように、阿東でエコツーリズムを推進する目的と目標を明確に設定し、地域全体で認識・共有する機会をつくることを、エコツーリズム推進の第一歩として行ってもらいたい。それによって阿東は、全国のエコツーリズムの先進地となり得る力を秘めている。

3-15. 八代よかところ宣伝隊（熊本県八代市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

五家荘の山は2011年11月に日本山岳遺産として九州で初めて認定され、これからガイド、インストラクターの需要が高くなることが見込まれる。

認定以前にも多くの登山客が訪れ、ツアーが催行されたが、登山のルール作成、インストラクターの育成が間に合わず、植物に関しては、多くの盗掘にあう被害が起きている。また、猪やシカの被害も甚大で早急に保護等の対策が望まれる。

ガイド・インストラクターの育成も進んではきたがプログラム構成としては体験が主であり、日本山岳遺産に認定されたことでエコガイド、インストラクターの育成が急務である。

また、過疎化する地域内で近隣市町村との連携も必要不可欠であり、隣村である五木村観光協会との連携についても模索中である。



(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 18 日（金）～平成 25 年 1 月 19 日（土）
場 所	八代市泉町、球磨郡五木村
ア ド バ イ ザ ー	株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏
参 加 者	五家荘地域振興会会員、五家荘地域振興会事務局、五木村観光協会、五木村役場ふるさと振興課、八代よかところ宣伝隊 計 13 名
スケジュール・方法	五木村 川辺川ダム視察、村内視察（椎原→樺木）、講演会、意見交換会



(3) アドバイスの内容

●農家民泊について

- ・ エコツアーのプログラムとして開拓中である田舎ふれあい宿泊体験（農家民泊）では、旅行エージェントへの販売につながっていないのが現状であるが、五木村と連携し受入宿泊所数の拡大、魅力の増加につなげていくことが必要かと思われる
- ・ 泉町・五木村での田舎ふれあい宿泊体験（農家民泊）の場合、新幹線駅から移動時間 2 時間という立地条件から、誘致が難しいのではないかとの意見に対し、2 時間かけても行きたいと思わせるようなプログラム作りをすることで、リピーターにつなげていく。
- ・ 1 泊は平地での田舎ふれあい宿泊体験、1 泊は泉町、五木村での田舎ふれあい宿泊体験と全く違う地域、環境での宿泊体験を通して学ぶことも貴重な体験である。

●体験プログラムについて

- ・ 体験プログラム数は多く開発するが、リピーターがつくプログラムは一部である。しかし体験プログラムを多く持つことで地域の魅力発信になる。
- ・ 体験プログラムは地元の職人、女性をインストラクターとして起用することで、体験プログラムの価値を上げることができる。
- ・ 地域で当たり前にあるものが、地域外から来られた方には宝（観光資源）となることがある。体験プログラムを作る際に地域外と比較することで観光資源が見えてくる。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ エコツーリズムへの取組は地域住民の結束力を高め、また市町村の垣根を越えて活動できるものだと確信できた。「過疎化」「少子化」「高齢化」の進む山間地で住民が中心となり主体性をもってエコツーリズムに取り組むことで住民が地域を愛し、地域の宝を磨き、地域の魅力を発信、地域の案内へとつなげていく道筋がみえた。



●今後の期待される効果

- ・ 今回のアドバイザー派遣を通じて隣村の役場職員、観光協会、地元住民との意見交換ができたので、これらの意見を参考にエコツーリズムの推進普及に取り組んでいきたい。これまでプログラムになかったエコツーリズムの体験も次年度のパンフレットに掲載できる。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 過疎化、高齢化が進む地域でなにか住民がいきいきと取り組む事業ができないだろうかという思いで実施した。
- ・ 先進地での受入体制、活動内容、経済効果等を知ることができたことで私たちの地域が進む方向性、向かう先を示していただいた。
- ・ 昔は紅葉を見る物見遊山的な観光に特化した地域であった。しかし住民が減り、高齢化する中で、住民の関わり、地域の見せ方、説明方法等を学ぶことで、他地域との差別化を行うエコツーリズム推進で地域がもっと輝くものになることが見えたように感じる。これを機に、地域住民が活動しやすいように事務局も、行政もともに協働できる活動の場としてエコツーリズム推進を行っていきたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 先ず新八代駅より車で約 1 時間のところに位置する五木村の道の駅「子守唄の里五木」にて川辺川ダム建設への合意形成から建設中止までのことについて、五木村役場の方から説明を受けた。反対から賛成へと向かう流れや、移転完了後に建設中止となった状況等は、環境学習プログラムとして作り込むことや地域施策の在り方の研究テーマ等として、高校の修学旅行、大学の現地研修といった形で有効と思われた。その後、更に一時間程かけて五家庄地区へ向かい、地域全体の様子を掴んだが、大型バスは全く入れないので、民泊を軸としたツーリズムを追求することが最も効果的に感じられた。
- ・ 宿泊先の山女魚荘では、山女魚主体の料理が周りの自然、イメージ全てにマッチしており、山あいの民宿独特の家族的な雰囲気と相まって良い味を出していた。

●アドバイス（講義等）の概要

- ・ 意見交換会には行政や民泊受入先の方等 15 名程の人々が参加した。先ず 1 時間半程当方の取組について、民泊やエコツアーを中心に話した。
- ・ 参加した方々からは広域でのコーディネートの方法、地域のまとめ方等について熱心に質問や意見交換を求められた。
- ・ 特に新八代駅から 2 時間の移動があることの処し方に時間が割かれたが、それについては考え方の問題で、長い時間をかけて訪れ、そして別れることによる郷愁感がメリットになる場合もあり、売り方、打ち合せ次第でもあることを話した。基本的には参加した人々はツーリズムに対して前向きに捉えていたので、今後の努力を期待する。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 交流事業で大切なのは、実際に現場対応をされる方とそれを陰で支える組織や人であるが、この地域においては、八代よかとこ宣伝隊が、八代市のみならず、近接の五木村とも連携して事にあたれるよううまく立ち回ることが不可欠である。
- ・ 当該団体や地域住民が意欲的である他にも、九州新幹線が有効活用できること、水俣市の環境学習と合わせたコース設定が可能であること等旅行会社担当者に働きかけるための利点があるので、今後のセールス展開に期待したい。

3-16. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県奄美市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

平成 25 年度中の国立公園指定を見据え、平成 25 年 1 月の政府による「奄美・琉球」の世界自然遺産暫定リスト掲載を登録に向け力強く推進するために、近い将来奄美群島の観光のキラー・コンテンツとなる自然環境の保全と活用を両立させるためにエコツアーガイドの登録・認定制度に取り組んでおり、各アクティビティでの活躍が見られている。

また、エコツーリズムにおいては多種多様な組織連携の中で地域住民との関わり合いが非常に重要であると考えられ、地域住民が地域の資源（宝）の価値を見いだすことにあることから集落散策を中心としたエコツーリズム推進への取組が見られ始めている。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 3 月 14 日（木）～ 平成 25 年 3 月 15 日（金）
場 所	奄美大島：住用町 見里集落、ナイトツアー（三太郎峠） 徳之島：伊仙町 アマミノクロウサギ観察小屋（天城町）、阿権集落（伊仙町）、メランジ堆積岩（伊仙町）
アドバイザー	文教大学 国際学部 准教授 海津ゆりえ 氏
参加者	【奄美大島】 ヤムラランド、奄美市住用総合支所、奄美市企画調整課、奄美市袖観光課、奄美大島エコツアーガイド連絡協議会会長、環境省、奄美群島広域事務組合 【徳之島】 徳之島エコツーリズム推進協議会、徳之島エコツアーガイド連絡協議会、NPO 法人虹の会、徳之島町地域営業課、天城町企画課、伊仙町企画課、奄美大島エコツアーガイド連絡協議会会長、環境省、奄美群島広域事務組合
スケジュール・方法	主に集落案内を中心とした現地踏査 【1日目】 奄美大島：住用町見里集落散策～ヤムラランドと座談会～ナイトツアー 【2日目】 徳之島：アマミノクロウサギ観察小屋～阿権集落散策～座談会～メランジ堆積岩見学



(3) アドバイスの内容

●1日目：奄美大島

- ・ 奄美市住用町においては地域住民の自然保護に関する意識醸成を目的として、自然環境保全への啓発活動（先進地講師派遣、地域美化活動）を行い、地域住民に対し世界自然遺産登録への関心を促す取組がある。
- ・ また、その活動を通し客観的に地元を見直す事による、地元住民しか知り得ない自然環境（宝）を観光メニュー化させる事を目的に地域ネットワーク体制構築を足がかりに、次年度には自主運営ができる体制（NPO法人化）を整えることを目標にしており、地域が受入主体となる観光への初めての挑戦に対してのアドバイスをいただきたいと考えた。

（アドバイザーのコメント）

- ・ ビジネスとしての観光を立ち上げることが目標ではあるが、ベースは地域の宝さがしがなければならない
- ・ オール地域・ワン奄美が重要
- ・ 地元ガイドに熱意があってガイドランスに表れていて観光客に伝える上で重要であるが、地名や地形図・写真等を示しながら案内することも必要
- ・ 地域の言葉（方言）を使つての案内も地域でしかできないものではないか
- ・ 奄美は海のイメージであるが、山と海が一体となったコースの造成が必要
- ・ 今回のコースにおいては、歴史・文化に重点を置いていたが、鳥の鳴き声や植物等も豊富なので分野毎のガイドも必要
- ・ ゴミ（漂流物）清掃が必要
- ・ 「聖なる地」が存在するため、マナーやルールを徹底すること（手を合わせる等）
- ・ 奄美においては豊かな自然地域と里山地域とが混在している地域である為、自然ガイドと里山ガイドとの線引きは必要である。しかしながら、里山地域についてはシマ特有のおもてなしの心からボランティア感覚で案内を行っているが、持続可能にするためにも料金を取るのは妥当である。

●2日目：徳之島

- ・ エコツーリズム推進協議会が設立されており、エコツーリズム始動期にある。
- ・ 本集落には「むらづくり委員会」があり、多種多様な団体で構成され、集落行事等への提言を行っている。また、地元NPO法人においては環境関係の活動を行っており、観光客への印象形成をする観点からエコツアーの造成の検討をしているが、エコツーリズムをどのように捉え、どのような仕組みをつくれば良いか、どうすればエコツアーを地域から生み出せるか試行錯誤している。

（アドバイザーのコメント）

- ・ 素材が豊富でガイドの熱意が伝わり楽しめるコース設定
- ・ 鳥の鳴き声や季節毎の作物等生活に関する情報の掘り起こしも必要
- ・ 集落全体が博物館になっており、さまざまな要素が詰まっている。「エコミュージアム」になり得る
- ・ 観光パンフレットについても点でしかないのでは線につながるような見せ方が必要
- ・ 文化財の場所を地図に落とし込む
- ・ 季節毎に何を見せるのかを考えプログラム化（フェノロジーカレンダー）の作成

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 地元ガイドに対してアドバイザーの評価が非常に高かったことで、自信につながった。
- ・ 地域の資源を発見し活用する仕組みである、宝探しについて関心が高まった。
- ・ 自然プロガイドと集落歩きガイドを差別化することで、役割分担が明確になった。
- ・ 地域自身が地域を主体的にマネジメントすることへの気づき



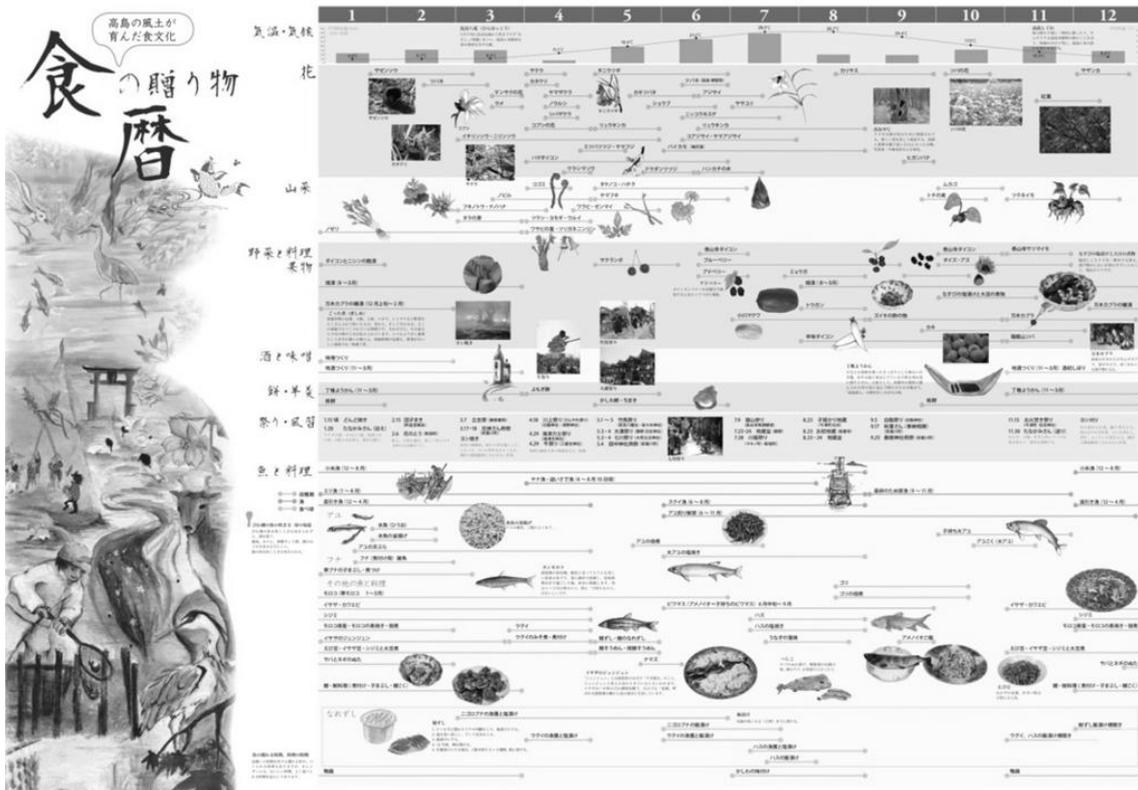
●今後の期待される効果

- ・ 地域が受入主体となる観光の確立（NPO 法人化）や、プロのガイドがつくる商品だけではなく、地域主体による「手づくりのコース」の確立 ⇒ 持続可能な観光へ
- ・ フェノロジーカレンダーを作成することによる地域資源の発掘及び価値の認識

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 「宝さがし」をもとに作成する「フェノロジーカレンダー」
- ・ 自然界の変化のみではなく、宝の 5 分野「自然」「生活の知恵」「歴史」「産業」「人」を対象に、地域における自然と人間との関わりを季節の移り変わりの中に表現するもの
⇒観光関係者だけでなく、環境教育の場での活用にも期待できる



(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学 国際学部 准教授 海津ゆりえ 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

1. 奄美群島全域におけるエコツーリズム推進の現状

今回のアドバイス対象地域である奄美群島は、今年1月、世界自然遺産登録暫定リストに記載された。今後、国立公園化（平成25年度中予定）を経て3年後を登録目標年度と見据えており、これに備えた観光受入やエコツーリズムの体制確立を目指している。

この流れに先立ち、平成15年9月に策定された「奄美群島自然共生プラン」で環境保全型自然体験活動（エコツーリズム）の推進がうたわれており、これが群島でのエコツーリズム推進の上位計画となっている。他島に先駆けてエコツアーガイド事業者が多く活動していた奄美大島で平成20年10月に「奄美大島エコツアーガイド連絡協議会」が設立され、自主ルールの策定等に取り組んできた他、平成21年度から24年度にかけて、奄美振興開発事業を活用した国土交通省事業「エコツーリズム推進人材育成事業」が進められ、各有人島で公開講座や勉強会が開催されてきた。

これらを踏まえ、平成25年度中には「奄美群島エコツーリズム推進協議会」が設置される予定であり、それに向けて各島での枠組みづくりが進められている。各島での取組は、現状での熟度や人的体制によって対応状況が異なっており、全有人8島のうち奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島でエコツーリズム推進協議会とガイド連絡協議会が設立ないしは準備中である。これらにより、平成25年度以降は群島レベルの推進協議会と各島レベルの推進協議会の二階構造となる予定である。

体制づくりの実施機関は、今回のアドバイザー派遣事業の申請者である奄美広域事務組合である。同組合は奄美群島全域に関わる事業を執行する組織であり、群島各島々の役場職員の出向者により構成されている。奄美群島広域事務組合資料によると、各島における推進体制づくりの進捗状況は以下の通りである。

表 奄美群島におけるエコツーリズム推進体制

島名	エコツーリズム推進協議会		エコツアーガイド連絡協議会		
	設立	年度	設立	年度	人数
奄美群島	予定	平成25年度	—	—	—
奄美大島	済	平成24年度	済	平成20年度	60名
喜界島	済	平成24年度	予定	平成25年度	—
徳之島	済	平成24年度	予定	平成25年度	—
沖永良部島	済	平成24年度	済	平成24年度	16名
与論島	済	平成24年度	予定	平成25年度	—
計	—	—	—	—	76名

今年度のアドバイザー事業で訪れたのは、このうち奄美大島（奄美市住用村）及び徳之島（伊仙町）であった。以下に2地区に関する推進状況について述べる。

2. 奄美大島（住用地区）

奄美大島は平成 20 年度にエコツアーガイド連絡協議会を設立する等、奄美群島で最もエコツーリズムへの取組が進んでいる。特に、自然を対象とするエコツアーガイドには実績ある事業者が多いが、今回のアドバイス対象地域である住用地区見里集落は、地域主導によるエコツーリズム推進に取り組んでおり、今後各地区に対するモデル的な役割を担うことが期待されている。

見里集落は 35 代に遡る系図を有する古い集落で、奄美創造の神が宿る神山（湯湾岳）から集落へと神が下り海へと至る「神道」が今に残る稀有な村である。集落の辻や角、屋敷の裏道等にそれらの神道や神の居る場所が点在し、集落の人々の信仰心によって美しく保たれてきた。正月に餅を飾るブーブルノキと呼ぶリュウキュウエノキや製糖工場跡、お宮や相撲道場、ジュゴンがすんだ内湾、平家の落人が鍛冶屋を営んだ場所、塩田跡等先祖が遺してくれた生活文化遺産がそこここにある、言い伝えがある場所は聖地として大切に伝えられている。

住用村では「すみようヤムラランド」を結成し、「離島の活量再生支援事業」等を活用してこの遺産を語り継ぎ、世界自然遺産登録後に備えるため、①住民による観光受入体制づくり、②保護意識の醸成、③観光メニューの開発、④ICT の活用等の目標を掲げて地区と行政一体となった取組を行ってきた。平成 22 年度、23 年度には「奄美しま博覧会」に観光プログラムを出展する等実績を積んできた。生業としてのガイドを育てるというより、集落での受入体制づくりを志向している。その背景には人口減少という直面する課題と、他の世界自然遺産指定他地域における指定後の観光入込動向によって生じる生活文化への負荷を回避したいという意向がある。後者に対する懸念が強く、集落が観光客受入に対してイニシアチブを取ることを目指している。



リュウキュウエノキ

3. 徳之島（天城町・伊仙町・徳之島町）

平成 24 年度にガイド連絡協議会が設立された。同連絡協議会の主力メンバーは今回のアドバイザー事業でガイドツアーを体験することとなった「NPO 法人虹の会」である。同 NPO は役場職員や I ターン者、U ターン者等で構成され、各地区住民と連携しながら徳之島全域ガイドを実施している。

参加した伊仙町阿権集落におけるガイドツアーでは、伊仙町観光協会との連携により阿権集落の有力者の屋敷を中心とする集落内散策を体験したが、各家との協力関係が構築されており、同 NPO によるツアーの際には集落内清掃やお茶のサービス等があった。ただし同 NPO では料金設定をしていないとのことから、現状のままでは一方的な協力やサービスの提供となる可能性があり、受入にあたってのシステム化が望まれる。



内海にて昔の海のような音を聞く。

ガイドは区長の川畑氏

●アドバイス（講義等）の概要

1. 奄美大島

奄美大島では住用地区公民館にて「すみようヤムラランド」に対するアドバイスを行った。内容としては、ヤムラランドによる集落散策ツアーに対するアドバイスと住用地区に対するアドバイスの2種類である。

(1) ヤムラランドによる集落散策ツアーについて

集落の生活と精神世界、自然、景観、土地にまつわるエピソードが深く結びついており、まさに一つの宇宙である。エコミュージアム、まるごと博物館等と呼んでも良いし、集落景観は「文化的景観」として見つめることができるであろう。住民の思いがこめられたツアーであり、小さな道一つにも意味があることが伝わってきた。魅力を知って訪れる観光者に対して感動を与える地域であることは間違いないが、案内には心ある知り合いを案内するレベルから不定期に訪れる観光案内レベルまでである。今後に向けて次のことを奨める。

①地図作りを通じた集落内での地域検証

地域資源の継承と磨き上げを進めるためにも集落の地図づくりと検証作業を行ってほしい。その上で案内する場所、聖地として控える場所等を地域内で検討すると良い。

②語り部の養成

現在は区長さんを始め集落の方々の知識によって案内されているが、今後のためには語り部の養成が必要となる。世代を継ぐ語り部を養成することにより、宝を守り伝える運動につなげてほしい。

③自然等多様な視点からみたガイドメニューづくり

歩いている間に、野鳥の声が聞こえ、魚が跳ねるのを見た。生活文化以外の専門性を持つ語り部も養成し、同一コースでも多様な角度から楽しめるメニューづくりを進めると良い。

(2) 住用地区に対するアドバイス（集落主体型エコツアーの体制づくり）

事前に作成したパワーポイントを用いて、他地域事例を多用しながら「地域で進めるエコツーリズム」に必要な事項についてアドバイスをした。柱としたのは、①宝探しの推進、②連携体制づくり、の2点であった。

特に、前者について強調した。世界自然遺産への登録は必ずしも地域の「宝」すべてを認定する制度ではなく、対象資源となるものはクライテリアに照らして決められるものであることから、地域は世界遺産となることを誇りとしつつも、地域の宝の価値を認識する枠組みと運動が必須であることを伝えた。その手法として、岩手県二戸市で行政主導で進めている宝探しや、滋賀県高島市で進めているフェノロジーづくり、福島県裏磐梯で進めているエコツーリズムカレッジ等の手法を紹介した。

後者は西表島、裏磐梯、小笠原等の事例を参考に、行政と住民だけでなく、望ましい観光者を地域につないでくれる事業者や研究者との連携が必須であることを伝えた。

2. 徳之島

徳之島では伊仙町観光協会やNPO法人虹の会等、伊仙町で活躍するガイドの方々と住民に対するアドバイスをを行った。内容としては体験した阿権集落内ツアーへの感想と、質疑応答の形でのアドバイスを行った。

(1) 阿権集落散策ツアーについて

農村風景の中に100年以上前から建つ名家の佇まいや、さりげないおもてなしが魅力的なツアーであった。集落の屋敷林やガジュマルの巨木とその言い伝え等は他地域にはない独特の景観である。薩摩文化と琉球文化がミック

スされた奄美独特の文化の形成という説明も興味深いものであった。歴史遺産と生活文化が伊仙町のひろびろとした景観の中で融合し、文化体験を望む観光者にとっては忘れがたい経験を提供できると思われる。

ひっきりなしに野鳥が鳴き、農村が広がっていることから文化だけでなく自然観察やグリーン・ツーリズムと組み合わせたエコツーリズムが展開できると思われる。

(2) 質疑応答型アドバイス

現状での課題を聞きながらアドバイスを行った。主な質問とそのアドバイス内容は以下の通りである。下記のうち「フェノロジー」の作成については質問が集中し、今後、フェノロジーの作成を集落で進めたいという希望が強くなった。

【質問1】 プログラムメニューの開発に課題を抱えている。徳之島は亜熱帯の照葉樹林がある、日本の中で雲霧林を持つのは湯湾岳と阿権だけである、アルカリ性土壌を持つ伊仙町の地質の面白さ等小さな魅力はあるが、「縄文杉」に匹敵するような目玉がない。

【アドバイス】 縄文杉を無理に作る必要はない。屋久島の課題は、世界遺産地域の目玉が「縄文杉」とされてしまったが故に一極集中を招き、屋久島の他の資源や魅力が相対的に低く見られていることにある。これを反面教師とし、年間を通じた資源の暦（フェノロジー）を作り、季節ごとの魅力をプログラムに置き換える活動を地域ですれば良い。

【質問2】 キャッチコピーが作れない。徳之島の魅力を一言で表せないと観光商品が作れないのではないかと。

【アドバイス】 資源の掘り起こしをしないでキャッチコピーを作ろうとすると、通り一遍の言葉しか出てこない。一つに言葉を絞らなければならないという呪縛を解いて、上記の暦づくりをしながら魅力を積み上げて、そこから出てくるものを待てば良い。

【質問3】 ガイド料金をどう設定するべきか。半日、一日それぞれ適正価格はいくらか。

【アドバイス】 ガイド料金は、提供するサービスの内容や実費、地域周辺での相対的な価格等さまざまな要因で決まるので、一概に「いくらなら」ということは言えない。他地域の事例や実費の割り出し、積み上げ等を研究することを勧める。アドバイスとしては、無料でのツアー提供はすべきではないこと、地域への還元を明文化して双方にメリットが納得できる設定をすること。料金は改訂できる。

【質問4】 ゴミ問題が深刻である。不法投棄や盗掘が絶えない。貝塚時代からの谷捨てがそのまま現在に引き継がれてしまっている。住民が原因である場合が多い。どうしたら良いか。

【アドバイス】 子どもたちへの環境教育を通して大人に波及する方法があるが、まずは投棄されたゴミを多くの人に参加してもらって片づけること。行政との連携も必須である。海岸の漂着ゴミであれば、JEAN という団体が全国の海岸でのボランティア清掃とゴミの調査を行っている。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

日程の制約もあり、短時間の滞在・視察とアドバイスとなったが、現地の方々の手際良い運営のおかげもあり、密度の濃い事業となったことを改めて感謝致します。奄美群島全域に関する印象と個別の島々、地域に関するコメントをいたします。

1. 奄美群島全域

世界遺産他地域を他山の石とするという姿勢は、皮肉な話ではありながら集落をまとめ、広い群島を同じ方向に向かうように誘うためには有効なことと思います。屋久島や知床の現場の方々との連携を密にされると良いと思います。

群島は島数も多く、広いので同じレベルや熟度で同時推進するのは困難であろうと思います。でも同じ目標やプロセスを持つことはできるはずです。エコツーリズムで奄美の個々の島々の何を守り、何をしようとしているのかを明確にし、「一つの奄美」としてのブランドイメージを確立していただければと思います。そのために、人材育成やルール作り等を奨められると思いますが、その際に「エコツーリズム」だけに適用するのではなく、奄美観光を包含するような大きな指針（ガイドライン）づくりを行い、奄美の観光＝エコツーリズムを目指すことが望ましいと思います。

複数自治体・諸島域全体をまとめて一つの推進協議会を構築し、推進法の認定をとるという例は未だありません。意思決定プロセスが多段階となり会議も増えることと思いますが、エコツーリズムは持続可能な地域社会をつくるための運営システムづくりとイコールですので、議論を重ねただけ地域づくりも進むと思います。世界遺産、国立公園とエコツーリズムの連携例としてモデルとなるはずですので、ぜひ頑張ってください。



神道

2. 奄美大島住用村見里集落

集落のたたずまいや聖地として大切にされてきた場所と、神道を大切に守ってきたというお話が見事に融合して、とても神高い場所を訪れたのだ、という実感と誇りが生まれました。区長さんの熱い語り口も大きな魅力で、「どこへ行くのだろうか？」と思いながらぐいぐいと引き込まれていきました。最後に太平洋に抜けるハイライトは圧巻でした。ぜひこの誇り高い皆さんの集落を守り、伝えていただければと思います。

そのためには、現状はとても脆弱だと思います。内なるルール、外へのルールを「掟」として作り、アピールすることをお勧めします。幾つかの事例があります。沖縄県竹富島では、島外業者による土地買占め等の苦い経験をもとに「島民憲章*」（売らない、汚さない、乱さない、壊さない、活かす）を作り、集落内に掲げて島外者へのルールを暗黙に伝えています。滋賀県高島市針江地区は、山からの水を集落内にめぐらす「生水の郷」として知られ、NHK 放送をきっかけに日本の里山として人気があります。ふらりと訪れて集落内を歩く観光者を地域でコントロールするために、集落で「委員会」を結成し、連絡先を掲示して受け入れを始めました。一方で、竹富島は最後の船が出て行ったあとに集落総出で道を掃除して美化に努めています。

見里地区には神道や聖地が多数ありますので、現代の神道や聖地として、観光者も事業者にも守ることに「協力」してもらおうよう、訴えていくことができると思います。

*沖縄県竹富島の島民憲章：<http://www.mlit.go.jp/common/000138911.pdf>

3. 徳之島

①阿権集落

阿権集落の魅力は100年変わらぬ農村集落の社会と景観が残っていることだと思います。それが当時の建築や集落の構造等を動態のまま残し、伝えています。ケムムの力かもしれませんが、歴史あるものを大切にしてきた人々の生きざまであり、生活文化景観の動態保存の好例であると思います。道も庭もとてもきれいに管理されているので、一人で散策してもとても気持ちの良い場所でした。ただ、居住エリアであり、無尽蔵に観光者を受け入れる場所ではないと思いますので、収容量やルール（マナー）を決める等の工夫が必要だと思います。



平家（たいら・け）の屋敷。石積みが見事

阿権集落では、地区ごとの村づくり委員会と島全体をカバーしてガイドを行うNPOが連携してツアーを実施していました。今後同様のツアーを島内各地で作っているとのことですので、地域とNPOが連携して観光者受入体制を作っていくことになると思われますが、その際に意思決定と利益配分等を合意するための「場」と「ルール」が個別に必要になると思います。阿権でモデルが作れることが期待されます。また、「虹の会」と類似するNGOが誕生することも予測されます。その際には排除せず、地域づくりの仲間が増えたと受けとめて新たな「場」を設ける、という展開ができればと思います。その時に力を発揮するのが持ち前の「結」でしょうか。

ご提案したフェノロジーづくりと地元学はぜひ始めて、そして続けてください。一回やれば終わるというものではなく、継続していくことで新しい人や若い世代、子どもたちが参加したり、新たな宝が生まれたりするものです。例えばガイドウォークは面白かったのですが、もっと歴史的検証等を進めていただくと、僅かな時間のガイドでも味わいが違ってきます。ちなみに、後日調べたところ、平さん宅の陶器のトイレは明治から昭和初期にかけてのもので、恐らく近郊の瀬戸物屋さんが作ったものではないかとのこと。流通が盛んだったことから、遠方から船で運ばれたものかも知れません。

②メランジ

徳之島の地質の面白さを如実に伝え、かつ海岸の土地と人のつながりがリアルに分かるとも良いジオサイトだと思います。「ジュツ」と音を立てて沈む夕日も味方につけて、ぜひ大人向けの素敵なツアーを作っていただければと思います。



メランジのある海岸

3-17. 南大東村（沖縄県島尻郡南大東村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

南大東島は、沖縄本島より約 370 km 離れ、特異な自然、文化を活かし「島まるごとミュージアム構想」をコンセプトとして「宝探し」を行いながらエコツーリズムを推進し観光業務を行ってきた。近年は、村のモニターツアーの実施、沖縄県の離島振興等により観光が推進され、県内外において大変注目される地域となった。島では大手旅行社と地元の観光業者やホテルが提携して、定期的なツアーも生まれ、個人的にも島を訪れる観光客が増加している。そのために、今後も観光を島の新たな産業として強化しようと、ホテル、観光業者、飲食等の有識者が自主的に集まり観光推進協議会を立ち上げた。

しかし、村の行政や観光協議会等が観光を推進していく中で、これまでの、見せるだけの「どこにでも」ある観光ツアーだけで、これからの島の観光は発展しないのではないかと懸念が生まれた。そこで、昨年度から作成し、今年度完成する「食のフェノロジーカレンダー」を活用して新たな観光ツアーを実践していくことができないか検討した。その結果、次年度には、食を中心としたエコツーリズム推進をテーマに、実際にモニターツアーを企画し、実践する計画である。

そこで、計画を立て実践していくためには、どのような観点から考え、実践すれば良いのか分からない状況にあり、今後の展開発展のためアドバイザー事業を利用させていただいた。



島の食材を利用した給食を味わう（学校給食）



ワークショップ



島の食材を利用した特産品開発

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 29 日（火）～平成 25 年 1 月 30 日（水）
場 所	南大東村役場（ヒヤリング場所及び意見交換）、南大東小中学校・村内宿泊ホテル（2カ所）・村漁業組合、離島振興総合センター
アドバイザー	京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏
参加者	ヒアリング：生活改善グループ 漁業組合 ホテル関係者 意見交換：村役場関係者 南大東小中学校・教育委員会 ワークショップ：南大東村地産地消協議会 南大東村観光推進協議会 商工会 計 38 名
スケジュール・方法	<p>【1 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新ホテルの状況視察（ホテル 気楽） ・南大東小中学校（地域素材を使った給食メニューを児童生徒一緒に給食） ・漁業組合にて食のカレンダーの確認と利用方法についてヒアリング ・「食のフェノロジーカレンダーを活かしたエコツアーの構築」をテーマにワークショップ開催 <p>【2 日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南大東村役場にて教育委員会及び観光担当課長等との意見交換 ・生活改善グループの活動を見学（場所 離島振興総合センターにて） ・生活改善グループへのヒアリング

(3) アドバイスの内容

●ワークショップより

（観光協議会より以下のテーマを提案）

- 1 この島の財産を利用して、どのようなツアーができるのか。
- 2 地域資源を活用した旅行ツアーとはどんなものなのか。
- 3 実際にツアーを企画し、受け入れて行くためにはどうしたら良いか
- 4 食のフェノロジーカレンダーを利用した具体的なツアーはできないか。

以上のようなことを具体的にお互いで話し合うと同時に、アドバイザーの真板先生からアドバイスを頂けたらと考えた。

（食のフェノロジーカレンダーを実際に確認する）

- ・島の活性化に大変役に立つ、島の観光にぜひ活かしたい。また、島の地産地消発展に大いに役立つと思う。
- ・カレンダーに示されている料理を作って出すことができれば良いのだが、実際にできるかが問題。誰が作るか、誰が手配するか等問題もある。
- ・島の食を中心とした観光プログラムが構築できると思う。
- ・観光だけでなく、島の給食等に活かせるではないか。

（アドバイザーより）

- ・南大東島には、何回か来島してきたが、自慢するものは、このフェノロジーカレンダーに示されているようにたくさんある。
- ・これまで、行政や商工会、観光推進協議会等で行ってきたモニター等の実施で、現在はある程度は構築され

た形で、定着してきている。

- ・ しかし、今ある体験ツアー等は、極端にいうと、どこにでもあってどの島でも行っているようなもので、今後観光客を伸ばしていくためには、転換期にきていると思う。
- ・ そこで、これからのツアーを考えるためには、次の点に注意してプログラムを自分たちで作り、発信する着地型観光を目指した方が良いのではないかと。

- 1 ストーリー物語を作る：体験プログラムに、南大東島独自のストーリーを持たせる
- 2 素材を大切に：食ならば、南大東島の食材を利用した料理を提供する等。
- 3 他にはまねをできないもの本物を見せる場所：証明する場所、実際に食材がある場所等本物を見せて、本物を食べさせる場所

- ・ 人の五感に訴えるような体験プログラムを構築できれば理想である。
- ・ また、プログラムに大切な要素である。環境、文化、教育（学び）、交流、経済（料金）を考える必要もある。
- ・ 例えば、1年間を通じて体験プログラムを作るのではなく、季節に合わせて（春夏秋冬）年間4回程度まず体験プログラムを作ってみる。
- ・ 更に、「食」は全ての体験のフィナーレとして利用することが大切で、実際に地元の人で作った体験プログラムを疑似体験することも必要だと思う。
- ・ そして、ストーリーの検証、プログラムの不備、準備、等あらゆる想定を確認しながらプログラムを完成させる。
- ・ 一番大切なのは、まずやってみることが大切。実際に、プログラムを実施することで見えるもの、必要なことがわかってくると思う。
- ・ 行動をおこさなければなにも始まらない。

他に幾つかの事例を交えてアドバイスをいただいた。



●行政との意見交換会（観光担当課）

（アドバイザーより）

- ・ フェノロジーカレンダーの内容を確認してもらいたいのですが、実際に活用していく予定を聞かせてほしい。また、地産地消協議会を立ち上げているとのことだが、

（役場）

- ・ 現在、村では地産地消を推進するために協議会を立ち上げるとともに、野菜等を栽培できる大型のハウスを建築中である。今後は、野菜の安定供給を図り、学校、食堂等で活用する仕組みを作りたいと考えている。

（真板氏）

- ・ 期待している。島の食材を安定供給できるのであれば、いつでも地元産の食材が手に入ることができて、観光推進協議会が目指す、ツアーの際役立つと思う。
- ・ 観光推進協議会等では、次年度観光ツアーを実施予定しているが行政としての支援はどうか。

（役場）

- ・ 観光推進協議会はまだ組織として、基盤が弱いので商工会と連携しながら、食を中心とした新たなツアー作り支援のため、モニターツアー等を実施する事業を計画している。

（真板氏）

- ・ 行政からの支援がおこなうことは良いことで、行政側が、粘り強く、継続的に営業を続けて行くことが大切だと思うので、新たな産業としての観光の推進、地域活性化に向け頑張ってください。最後に、ツアー

を企画し、実施するときには日本エコツーリズム協会も協力できるものがあれば協力できると思う。また、個人的にも協力していくので、できることがあれば相談してもらえればと思う。

(その他 ヒアリング漁業組合等)

(真板氏)

- ・ フェノロジーカレンダーを利用して、漁業体験を企画してもおもしろい。
- ・ 食をメインにした、宿泊プランを作ってみては。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 参加者や関係者は、今回のアドバイス前には、どのような観光ツアー、仕組みを作るか等、特別なプログラムを企画しなければならないと考えていた。特に、今年度「食のフェノロジーカレンダー」が完成するので、それを活用しなければと体制も整わないうちに、プログラムを実施する予定でいた。しかし、今回のアドバイスとお話を聞いているうちに、地域の魅力というもの、何気ない日常にある場合が多いということに気付かされた。また、現地でしか味わえない食、貴重な体験は、地域の観光資源であり、隠れた資源を発信することは、農業や漁業といった地場産業を盛り上げていくことだと感じた。
- ・ 食のフェノロジーカレンダーの活用は、新たな島の魅力の発信ツールであり、島の地産地消を推進いくための「柱」になるということも確認できた。
- ・ 一番の効果は、地域の魅力は、自分たち自身が発見、発信することだと改めて、関係者同士の相互理解ができたことである。

●今後の期待される効果

- ・ エコツーリズムを推進することは、地元の歴史や文化等を住んでいる人たちが見直し、魅力的なものを作り出す努力を引き出すことである。その努力は、島の活性化につながっていくものだと思います。島に住んでいる人が、地域に対する誇りを持ち、問題意識や島を「何とかしよう」とする意欲が生まれることができれば、島の活性化は成功すると思う。
- ・ エコツーリズムの推進により、住民主体の観光を生み出すことに成功すれば、地域活性化に大きな役割を果たすと思う。
- ・ 特に、今回の「食のフェノロジーカレンダー」の完成は、新たな観光戦略の「柱」として活用されることは間違いない。
- ・ 次年度以降は、商工会、観光推進協議会、行政が協力連携して、体験プログラムを企画、開発して実践していく予定であるので、島の新たな魅力を発信するために、島の体制を整え、第2段階を迎えようとしている、島の観光発展につなげていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

（西表島での事例）

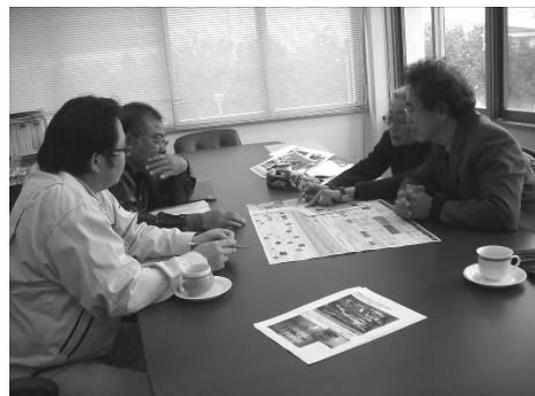
- ・ 西表島では、2月の時期に観光客を呼び寄せるために、今まで島で当たり前のように見ていた蛸に注目した。その蛸は、全国でも最も早い時期に見られるものであった。体験ツアーを企画したところ反響を呼んで、これまで観光客が来る時期でなかった季節に観光客がくるようになった。
- ・ 南大東島も、島では当たり前のことが何かの魅力として、観光資源になるものはないか。常に意識することが大切であると気付かされた。

（アドバイザーの先生の見解として）

- ・ たとえば、南大東島では当たり前存在する池を利用したツアーを考えたらどうか。
- ・ 南大東島を開拓する際に、池の水は大変重要な役割を果たしたはずであり、その歴史の話を盛り込んだツアーを企画してもおもしろいのではないかとアドバイスされた。
- ・ 地域の魅力は、自分たちで探ることが大切であることが改めて確認できた。

●その他感想

- ・ 「エコツーリズム推進アドバイザー派遣」の実施によって、改めて地域が魅力を発見し発信することが大切で、「着地型観光」を目指す必要性を感じた。
- ・ しかし、簡単に「着地型観光」といってもそれを実施するには幾つかの課題もある。
 - 宿泊事業者、地域住民、行政、旅行会社等の連携が必要不可欠である。
 - 地域としていかに観光が重要であるかという意識を持たせるために、お互いに協力するメリットをはっきりとさせる必要がある。
 - 島からの情報発信をどうするか、良い企画を作ってもそれを打ち出すため方法等を考える必要があり、関係者をコーディネートし、企画、営業する等の人材確保も必要である。
- ・ 以上のような課題もある「着地型観光」エコツーリズムの推進だが、地域活性化で島全体が元気で、誰もが羨むような「島づくり」を目指して、これからもエコツーリズムの推進を行っていきたい。
- ・ 最後に、アドバイザーの先生からも「やってみるここと」が大切で、実践することで、今考えられる問題点の他にもいろいろな問題がでると思うが、島として前向きに観光を推進し、地域活性化に結びつけるように努力してきたい。



(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学 芸術学部 観光デザイン学科 教授 真板 昭夫 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 「島まるごとミュージアム」をコンセプトにエコツーリズムによる地域づくりに一貫して取り組んでいる。
- ・ 今年度、取組体制については、これまでの観光推進協議会が一般社団法人観光協会として発展、発足した。宿泊業者、旅行代理店の他、商業者、漁業者、農業者等も参加し、もはや『『絶海の孤島』だけでは飽きられる』との危機意識をもち、エコツアープログラムや地域ブランドとしての新商品開発に取り組もうとしている。特に平成 22 年以来、エコツアープログラム開発のベースとして「食の宝フェノロジーカレンダー」の作成に取り組んできた。今年度は、これまでヒアリング収集したデータをもとに印刷物の作成を進めている（3月完成予定 表紙ドラフト添付）。
- ・ 村全体として、地産地消の促進に取り組んでおり、食のフェノロジーカレンダーは、このような島全体の動きと連携しながら作成されており、エコツーリズムを軸に島内諸産業、島内事業者との連携、また島全体への経済波及効果も展望し進めて行く段階に入ったといえる。

●アドバイス（講義等）の概要

- ・ アドバイスは以下の3点について討議、助言を行った。

（食のフェノロジーカレンダーの作成指導）

- ・ 作成にあたって漁協、農業者、生活研究会メンバーをはじめ関係者に掲載予定の情報の確認、確定、及び追加的なヒアリング、また写真撮影等を行った。

（食のフェノロジーカレンダーの活用）

- ・ 生活研究会の女性たちが提案した「大東御膳」（コース料理 和風と洋風）を掲載する。この提案の活用の方法について、これを再現した料理を常時、どの店でも提供するのはむずかしいとの意見が出された。これについては各季節に提案のなかの主な品を 2 品ほどは、どこの店でも提供できる「共通メニュー」とし、それ以外は店ごとに特色を出すのが、むしろ良いのではないかと。
- ・ 食のフェノロジーカレンダー問い合わせ先は観光協会があたることになった。

（上記をふまえ、これをいかにエコツアープログラムと結びつけていくか）

- ・ ストーリーづくり。食に関わっていえば、島における食が、どのように成立しているかを示すようなプログラムと結びつける。それぞれの宝の意味をつなげてストーリーをつくる。
- ・ 他の島にはない、ここだけというものを核にプログラムを開発する。
- ・ 作成したプログラムは島人の間で、まずテストツアーを行い、意見をもらう。それによって宝についての情報が更に厚みを増し、プログラムを洗練させていくことができる。また島の人自身が島について一層知るとともに、島全体が同じ方向を向いて事業に取り組むためにも有効である。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 食のエコツアープログラムというエコツーリズムを進める新たなツールができることから、これを前に皆で意見を出し合い、上記の「共通メニュー」の検討等を皮切りに、まずは食と結びつけたエコツアープログラムの開発を進めてはどうか。
- ・ 島の観光関係者は、期待をもって訪れた来訪者をはっきりさせては申し訳ないという気持ちが強い。それは島の人たちの優しさだが、かえって島の良さを伝えることを自制する結果になってしまうのではないか。自然は意のままにならないものであり、そうしたことを、むしろ島の特性として伝えていく方法を考えることもプログラムを深めることにつながると思う。
- ・ エコツーリズムあるいは着地型の観光の振興に対して、基本的に島全体が同じ方向に向きつつあると感じた。と同時に、エコツーリズムの概念についての理解を広める必要性も感じた。



3-18. NPO 法人国頭ツーリズム協会（沖縄県国頭郡国頭村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

国頭村は、世界自然遺産候補地になっている琉球諸島の中でも、やんばるの森の核心地域を有しており、現在は、森林地域を活用したガイドツアーや森林セラピーを推進している。環境省や県は、国立公園及び世界遺産地域指定に向けての施策を進めているが、米軍基地問題等により指定にはなお時間を要することが予測される。

以上をふまえ、現在森林地域のツアーを実施している団体として、関連団体の連携を強化するとともに、地元ガイドの育成や環境教育的要素を深めたツアープログラムの開発を進めていくことで、今後の世界遺産指定に備えていきたい。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成 25 年 1 月 21 日（水）～平成 25 年 1 月 23 日（木）
場 所	国頭村環境教育センター やんばる学びの森
ア ド バ イ ザ ー	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー 川嶋 直 氏
参 加 者	国頭村環境教育センターやんばる学びの森スタッフ他 10 名 環境省やんばる野生生物保護センター職員 自然保護官他 4 名 県内エコツアーガイド（東村・大宜味村・名護市等） 6 名 琉球大学学生 2 名 その他国頭村民 2 名 合計 24 名
スケジュール・方法	【1 日目】 やんばる学びの森ツアー体験・指導、新規ツアー視察・指導、講演会・ワークショップ 【2 日目】 やんばる学びの森ツアープログラムインタープリテーション指導（施設内散策路を使ったガイドウォークツアーのインタープリテーション指導）



(3) アドバイスの内容

(やんばる学びの森ツアー体験・指導)

- ・ お客様に合わせてガイド内容を多様化する。(植物好きのお客様に合った内容、学習しに来た学生、そんなに植物に興味のないお客様、それぞれに対して)
- ・ 本をもって歩くのも良いが、A4 か B4 に写真を印刷してクリアファイルに入れて見せる。生物や森の絵や写真、生態系の絵も合わせて見せると良い。(人数が多いと本の説明文が見えない)
- ・ 各コースを歩く時、ガイドはそのコースの地図を持ってお客様へ今はこの辺りです、と所々に伝える。(お客様は初めて来る場所で、今どの辺りなのか分からない)
- ・ 図鑑を見せながらのブリーフィングは短めにして、森を歩きながら説明するのも良い。最初にあまり期待を持たせ過ぎない方がよい。
- ・ 見れた聞けたが体験できない場合の手段も考える。
- ・ お客様を受け身にさせるのではなく、クイズを出したりして考えてもらう。
- ・ たくさんのトピックを持つよりも、少ないトピックでネタを磨く！説明が多すぎても記憶には残らない。
- ・ ツアー終了後、お客様に対してどうなってほしいかというイメージを最初に作って案内する(テーマを持つ)。

(講演会・ワークショップ、フィールド実習)

- ・ 年齢層にあわせた伝え方のポイントは？：
最終的に参加者が何を感じたかを言語化することが重要と考えており、大人には漢字 1 文字、小さい子には色をきっかけとして表現してもらっている。
- ・ 同じようなゲームはやっているが、やり方によってその楽しみは大きく異なる。楽しむための工夫を盛り込み、1つのゲームを洗練させることが大切。
- ・ つかみの部分(コミュニケーションの取り方)が勉強になった。
- ・ 全体的に笑ってばかりいられた内容だった。とても楽しめながら学べた。知識を伝えるだけのガイドではなく、五感を交えながらのツアー内容はガイドもお客様も楽しめると感じた。ただ、お客様がずっと受け身にならないように、参加するばかりにならないように、知識を伝える事と、ネイチャーゲームを半々に交えてツアーを行えるように考えていこうと思った。伝えるネタを多く作りすぎず、少ないネタでも伝わりやすいようにネタを磨く、そして、何でもシンプルに伝える。また、一番印象に残ったのは、植物の名前ばかりを伝えても相手の頭には残らない。これ何ですかと聞かれて、これは〇〇です。と答えるよりも、何ですか？と聞かれない様に話術やゲーム等で相手を楽しませる事が大切。これ何ですか？と聞いてくる人は、ガイド内容をつまらなく感じているサインを出しているのかも。という事を聞いて、植物の名前を覚えるのも大切だが、そういう考え方もあるんだと少し楽になった。でも、植物の名前を知りたいだけのお客様もいるので、その時その時のお客様に合う内容でツアーを行えるように頑張らなければならない。改めて物事は違う視点から見られて考え方もさまざまだと感じた。
- ・ KP 法による講演と、2日目の体験まで参加できた事で、記憶と体に残る研修に参加できたと実感を持ってました。伝えたい事を、ただ多く語るだけでは伝わらない、楽しみながら体験してまず興味を持ってもらう手法、コツのような物を教えてもらいました。コミュニケーションは簡単なようで、難しい。初対面の人と限られた時間でどんな風に体験してもらうのか、自分なりの形を探してみたいと思います。
- ・ 川嶋氏の伝え方は強制的でなく、内容にメリハリがあり笑いもあり話だけで自分自身驚きながら、どんどん引き込まれていくのを感じました。また流れがスムーズかつ楽しさがあるのにテーマからずれずに伝えている方法はとても勉強になりました。第1部の話だけでもとても勉強になったのですが、第2部のフィールドでのプログラムに参加することでインタープリテーションの点からだけでなく、川嶋氏のプログラムは初

体験ばかりで「視点を変えてよく見てみよう」のテーマにおいても新しい発見が多くとても新鮮でした。

- KP法は、大がかりな道具が必要なく気軽にプレゼンができて便利。掲示する場所と方法は事前に準備していないといけませんね。
- 視点を変えると別の世界が見えてくるのが、とても新鮮で楽しかった。小さな鏡ひとつで、上を見たり、裏を見たり、万華鏡にして創作を楽しんだり、(鏡は)使える道具だと思った。
- 目玉が入るだけで、途端に命が宿る！！凄い！！表情豊かな森の妖精探しは大人も子どももはまります！そういう視点で、樹木の隅々まで見てしまいます。きっと思いがけない発見がいっぱい出てくると思う。
- 毎回毎回の参加者との「良い関係づくり」が、ツアー内容の充実、満足度につながる。それはやはり、数多くの場数を踏み、経験を重ねることか。
- 体験を楽しんで、発見し、考え、想像し、伝える...を、まず自分から実践したい。
- 今回の講習に参加して感じた事は、いかに参加者に体験してもらう事が大切かということだった。現在行っているツアーは、いかにこのやんばるの自然を参加者に伝えるかに重点をおき、自然に興味を持ってもらえるように自然の解説を行ってきた。しかし、今回の体験では自然の解説よりも、体験に重点が置かれていた。また、そうすることで参加者一人一人が体験し感じる事ができ、自分なりの感想やまとめを持ちやすくすることができていた。説明の多いツアーだとあまり自然に詳しくない人や、子どもたちには、ただ漠然と「楽しかった」という感想のみで終わることが多い、体験する事で参加者の自然に対する興味・関心を引き付ける事ができると感じた。今回の体験を基にして今後のツアーを作りかえるのではなく、現在行っているツアーの中で、参加者に合わせ説明・体験のどちらを中心にするかを臨機応変に対応できるように参加者にあったツアーを展開させていきたい。その為に、プログラム用のアイテムの充実や、勉強会等でスキルアップを目指し、詳しい解説を求める参加者・自然と触れ合う楽しみを求める参加者等さまざまな参加者に、更に質の良いツアーを提供していきたい。



(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 多様性豊かな動植物の解説やマリンスポーツ等のアクティビティを主とする沖縄のエコツアーガイドに対して、通年楽しめる参加型のガイドツアーを、フィールド実習を通して参加者が体験することができた。
- ・ 今回の研修によって、特にガイド業を行っている参加者は、現在行っているガイドツアーについて、その目的やテーマ等の本質を見つめ直すきっかけとなり、沖縄におけるエコツアーガイドの質の向上につながるものと考えている。



●今後の期待される効果

- ・ 環境教育分野において第一線で長年活動されてきた講師の活動拠点である（公財）キープ協会について、その規模や活動内容を紹介いただいた。
- ・ 宿泊、環境教育プログラム、物販等で複合的に経営を発展させている具体的な事例を知ることで、エコツーリズム事業の今後の発展の可能性を感じることができた。
- ・ また、今回の研修参加者は、近隣市町村の同業者の若手ガイドが中心であったため、研修・懇親会がさまざまな情報交換の場となった。今後、やんばる 3 村を中心としたエコツーリズム関係者のやわらかな連携につながることを期待される。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 沖縄県内のエコツーリズム推進という点、環境への負荷を低減するための利用者数制限等の規制の問題が第一に挙がる。今回の研修場所であるやんばる学びの森は、自然散策路の整備も十分であるため、環境への負荷は軽微である一方、ツアー参加者が期待するワイルドな経験としては不満が残っているのが現状であり、施設外のフィールドの活用も検討しているが、環境負荷の問題は常にある。
- ・ 豊かな自然の中で、①カヌーやマリンスポーツのような体験そのものに価値を有するツアー、②珍しい生き物を紹介するガイドウォークツアーは、活用するフィールドへの影響を十分に考えながら活用することが重要である。今後世界遺産登録等で知名度があがり、急激な利用客の増加が起こった場合、フィールドへの負荷が少なく、かつ参加者に自然の中で過ごす楽しさを提供するためには、今回のようなお客様が中心となるようなツアープログラムの発展が必要と考える。
- ・ エコツーリズム推進のためのツアーガイドの育成講座等は、比較的によく実施される地域ではあるが、ツアーを通してお客様に何を伝えたいか、その方法は何かという本質的な問題について真剣に考える良い機会となった。

●その他感想

- ・ 当地域は、生物多様性の豊かな地域として、特定の動植物にどうしても注目が集まり、ガイドの内容も、生き物の解説に留まる場合が多い。派遣時期は、沖縄でも中々動植物の観察が難しい冬であったこともあり、見ることでできない貴重な生き物の解説を中心とするのではなく、もっと自然や森の中を自分の目や耳で感じるための工夫を盛り込むことの大切さを改めて感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人キープ協会 環境教育事業部 シニアアドバイザー 川嶋 直 氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状

- ・ 国頭村は、世界自然遺産候補地になっている琉球諸島の中でも、やんばるの森の核心地域を有しており、現在は、森林地域を活用したガイドツアーや森林セラピーを推進しています。
- ・ 環境省や県は、国立公園及び世界遺産地域指定に向けての施策を進めていますが、米軍基地問題等により指定にはなお時間を要するということです。
- ・ 以上をふまえて、現在森林地域のツアーを実施している団体として、関連団体の連携を強化するとともに、地元ガイドの育成や環境教育的要素を深めたツアープログラムの開発を進めていくことで、今後の世界遺産指定に備えていただければと思います。

●アドバイス（講義等）の概要

【やんばる学びの森ツアー体験・指導】

- ・ 2つの森のコースの案内と新設されたカヌーコースの体験をしました。
- ・ ツアー時間中はアドバイザーが体験することに重きを置き、ツアー終了後に具体的な改善に向けたアドバイスを行いました。
- ・ 以下には、当日午後川嶋がガイドさんたちに向けて直接お伝えしたアドバイスに加え、体験後1週間を経て考えたアドバイスも書いてみました。
- ・ 通常プログラム（ガイド内容と方法）は、ガイド（あるいはインタープリター）が作るものですが、実は参加されるお客様が作ってゆく要素も多いものです。つまりツアーに参加されるお客様に受けの良い話題やトピックが段々生き残って行き、そうして生き残った「ガイドの持ちネタ」がそのプログラムを構成してゆくということです。この現象自体が善い悪いということではなく、お客様のリアクションにその位影響されながら、段々プログラムが研ぎ澄まされてゆくというような感じでプログラムが成長して行ければ良いなあというアドバイスです。
- ・ 小道具を使うことも重要なポイントです。今回は出発前のオリエンテーション時に、やんばるの生き物を紹介した写真集（という小道具）を使っていたのですが、できるだけオリジナルなイラストや写真そして大事なキーワード等を書いたフリップ（A4~A3 大の硬い紙）をツアーに持参して、必要な場所で必要なフリップを取り出して使うと良いと思いました。また、このフリップは「個人持ち」ではなく、できるだけ複数のガイドが共通のフリップを持つようにすることでプログラムの質的維持が図れるようになると思います。
- ・ ガイドが「話す・見せる・連れてゆく」、それに対して参加者は「聞く・見る・付いてゆく」、この関係性が持続するのが通常のガイドツアーですが、時代は「参加体験型」です。ただただ、ガイドの後を歩き、ガイドの話聞き、ガイドの示すものを見ることの繰り返しでは中々高い評価が得られません。高い評価が得られないということは、世間への評判が広がらない＝新たな集客につながらないということです。随所に参加者が「参加」できる場面を用意してください。（小道具を使うことで参加できるヒントは、滞在3日目の朝の川嶋の体験プログラムにあると思います）

【第1部：講演会・ワークショップ】

- ・ 地域のガイドの方たちを中心に、環境省のスタッフ等多彩な20数名にお話をさせていただきました。
- ・ 講演はパワーポイントによるプレゼンテーションではなく、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）によって行いました。このアナログなプレゼンテーション法は、野外でのガイド中にも（クリアファイルやスケッチブックを使い、あるいは人間ホワイトボードを使ったりして）活用できるので、この講演ではKP法を使用しました。
- ・ またKP法は、伝える内容を、シンプルにコンパクトにしなければならないプレゼンテーション法なので、必然的に伝える内容を絞込み、要点だけを鋭く短く伝えるための思考整理を行うことができます。
- ・ 主に、コミュニケーションの手法について、丁寧にシンプルに伝えることに傾注しました。
- ・ 講演のあとに、小グループで講演を聞いた感想を話し合う「ペチャクチャタイム」を実施し、その結果出てきた質問に答えました。

【第2部：フィールド実習】

- ・ 前日ガイドに案内していただいたコースを使って、その同じコースを「参加体験型」のプログラムで実施したらどうなるかの例を体験していただきました。
- ・ コースは約650メートルありましたが、そのうち入口から150メートル程を使って約2時間さまざまな体験アクティビティを実施しました。
- ・ 使用したコースは、全て両脇に手すりがついて、そこから先（つまり森の中）には出られない状態で、幅約1.5メートルの細長いルートで16名の参加者を参加させるという、少し難易度の高いフィールドでのプログラム実施でした。
- ・ 視点を変える小さな鏡や、目玉を書き入れる白い丸いシール等の小道具を使いながら、見る、触る、作る、考える、表現する等の行為を参加者にしていただき、一緒に楽しんでいただけたと受け止められました。
- ・ 2時間のプログラム体験の後、研修室に戻り、どういう構造としてプログラムが組み立てられていたのかの意図開きをした後、昨日同様に「ペチャクチャタイム」を実施し、その後の質問に答えました。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 自然素材が豊かであれば、豊かであるほどその素材自体の魅力に引っ張られてしまって、素材を伝えることだけに終始して、その素材を通して本来伝えるべき、その素材の後ろ側にある意味や価値を伝えられなくなるということがあると思います。沖縄でしか、やんばるでしか見られない出会えない珍しい生き物の魅力に寄り掛かり過ぎると、ツアー参加者の評価が「見れた、見れなかった」という点だけに集中し、ガイド（あるいはインタープリター）は、ただその珍しい生き物を見せるだけの案内人になってしまいます。
- ・ インタープリターはもっと別のことができる可能性を持つ存在です。ガイドツアーに参加された方たちとともに、さまざまな体験を通して地域の環境や文化・歴史全体の豊かさや魅力を伝えることができるはずです。ガイドの「知ってる・知らない」という知識量と「見れた、見れなかった」という偶然性に頼らない、その地域の魅力を伝えることができるインタープリテーションのプログラム開発が期待されます。
- ・ 今回研修を行った「やんばる学びの森」のような拠点施設が、やんばる全体の地域振興のための「戦略会議室」になってゆくことを強く期待します。

3-19. NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県八重山郡竹富町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

1990年代にエコツーリズムの理念をいち早く取り入れ、日本のエコツーリズムの先進地区として注目を浴びた西表島は、西表島エコツーリズム協会（以下協会）の設立から18年たった今、エコツーリズムの改革期を迎えている。この間、エコツーリズムの概念や協会の活動の地域住民への普及・啓発は容易には進まなかった。さまざまな分野の地道な活動により協会の知名度自体は上がってきているが、「エコツーリズム」という言葉に対して未だに「分かり難い」「難しい」という苦手意識を持ってしまう住民は多いようである。

昨年より、もう一度西表島のエコツーリズムの原点に戻り、地域住民の目線に立ったエコツーリズム推進体制を取っていかうという動きが出始め、その動きの第一歩として平成24年3月にアドバイザーの江崎貴久氏にお越しいただき、講演とワークショップという形でアドバイスをいただいた。参加者の多くが、エコツーリズムに関する理解を深め、地域の資源（宝）や各々の役割を再認識することができ、また、みなで将来の地域のビジョンを共有することができた。

その効果は、少しずつではあるが目に見える形で表れてきている。江崎氏の講演に感銘を受けた「西表女将の会」のメンバーは、6月に協会と協働して沖縄本島から離島体験交流に訪れた130名ほどの小学生を受け入れ、おもてなしの心を存分に発揮し、好評を得た。協会でも、これまで以上に発信の機会を増やし、活動の拠点となるセンターの有効利用と地域活性のための新たな取組として「エコ市」を始める等、住民が参加しやすい形でのエコツーリズム普及・啓発に取り組んでいる。

文化資源を活用した新たな滞在型観光プランも、すぐに商品化という段階までには至っていないが、人材育成に重点的に取り組んでおり、少しずつその仕組づくりに向けて前進している。

(2) アドバイザー派遣の概要

日 時	平成24年12月3日（月）～平成24年12月6日（木）
場 所	沖縄県八重山郡竹富町（西表島）、沖縄県石垣市 ・視察場所：竹富町役場（石垣市）、西表島カヌー組合事務局（風車）、女将の会事務局（西表アイランドホテル）、西表島エコツーリズムセンター、他島内数ヶ所 ・講演実施会場：浦内公民館
ア ド バ イ ザ ー	有限会社オズ 代表取締役／旅館 海月 女将 江崎 貴久 氏
参 加 者	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富町役場訪問／意見交換会参加者（11人） ・西表島内視察／意見交換参加者（8人） ・講演／ワークショップ参加者（講演27名／ワークショップ12名）
スケジュール・方法	【1日目】 竹富町役場視察、聞き取り調査・意見交換 【2日目】 聞き取り調査、意見交換 【3日目】 講演、ワークショップ、懇親会



(3) アドバイスの内容

●竹富町役場視察・意見交換会

(竹富町商工観光課職員との意見交換会)

- ・ 今回の視察・訪問の趣旨の説明と、鳥羽での取組事例の簡単な紹介。
- ・ 竹富町の入域観光客数等のデータを基に、宿泊客数を増やすことによる経済波及効果等の説明。

(竹富町町長、副町長を交えての意見交換会)

◇江崎氏のコメント

- ・ 今回の視察・訪問の趣旨の説明と、鳥羽での取組事例の簡単な紹介。
- ・ 竹富町の観光立町宣言を見る限りでは、エコツーリズムを推進しているが、町長の考えは我々と同じだと感じる。今後は、それらから具体的ビジョンが描かれ、観光基本計画等にも反映され、住民に周知されていくことを期待したい。
- ・ 行政として民間ではできない部分、まずは多様な主体が一堂に会し話し会える場、テーブルをつくっていただきたい。
- ・ エコツーリズム推進法の利用も地域資源を守るひとつの手段であることを知っていただきたい。

◇町長のコメント

- ・ 丁度観光基本計画の見直しが行われている。これまでは行動計画の部分が弱く、また評価システムが確立されていなかったのが反省点であり、次年度からの計画にはこれらを活かしたい。
- ・ 幸いにして今年度から沖縄県には一括交付金による助成があり、これを観光振興に最大限活かしたいと考えている。エコツーリズムの推進に関しても、まずは具体的な提案を住民の方からどんどん挙げてほしい。

●住民からの聞き取り調査・意見交換

- ・ それぞれが行っている活動や抱えている問題等についての聞き取りを行い、江崎氏よりアドバイスをいただいた。

◇西表島出身（移住者でない）の青年たち

- ・ まずは、個々が考えていることを他の人に聞いてもらい、広げていく、仲間を増やしていくことが大切だと思う。そしてできることから少しずつ行動に移して行ってほしい。

◇西表島カヌー組合組足長

- ・ 厳しい自主ルールを取り決めていることは評価できるが、今後その方法で本当に資源を守っていけるのか疑問を感じる。法の利用も選択肢の一つとして検討して行ってはどうだろうか？
- ・ 現在日帰りが主流のカヌーツアーは、他主体との接点があまりにも少ない（他への経済波及効果が少ない）ように見えるが、その部分に関して組合としての動きは難しいとしても、「どうにかしたい」と思っている事業者は少なからずいるのではないか？まずは小さな輪で良いので声をかけて同じ思いを持つ人を集めて行動に移して行ってほしい。

◇西表女将の会会長

- ・ 発足したばかりで、まだ動きは僅かかもしれないが、「おもてなしの心」を軸に継続してがんばってほしい。

◇西表島エコツーリズム協会会長

- ・ 協会にいろいろな動きが出てきていることは見てとれる。行政との連携が課題のようにあるが、さまざまな方面からの積極的なアプローチを続けてほしい。

●講演

- ・ 「観光から感幸へ 幸せになれる地域づくり ～島の宝を見つめなおし、分かち合い、活かし、守る～」と題して、昨年度と同様に江崎氏の三重県鳥羽市での活動や取組についてお話いただき、加えて今回は、地域におけるガイドの役割や、地域の価値を感じるマーケティングのステップ、西表島の観光客数等、具体的な数値を基にした経済波及効果の仕組等を、分かりやすくお話しいただいた。

◇住民や多様な主体の観光への参加の形

- ・ 鳥羽の離島の住民が徐々に心を開いていく様子や、子どもたちのボランティアガイドの取組を映像で紹介いただいた。

◇本来の「おもてなし」の意味

- ・ おもてなしの源は、自然、文化、地域の人々等、全てに対してのおもいやりの心であり、地域の光に地域を大切に思う心、地域や業への誇りがプラスされることによっておもてなしの心となる。

◇循環型社会の仕組づくり

- ・ 事業者が利益の追求のみに走ることなく、地域全体が潤うように、地域や資源に還元することを当然のこととして行えば、観光客、資源、住民、事業者のどれもがバランスよく幸せになれる（＝エコツーリズム）。

◇地域とお客様をつなげるコツ

- ・ 地域の人にとっても、お客様にとっても、お互いを大切にしてくれる人を、大切に思える。そのお互いの気配り、心配りをシステムとしてつなぐのがガイドの役割である。

◇地域の価値を高めるマーケティングのステップ

- ①企画（目的、メッセージ、テーマ・コンセプト、ターゲット）
- ②プロダクト（商品への落とし込み）
- ③販売に向けて（受付、広報、販売）

◇地域ぐるみで循環させ、価値を高めることの重要性

- ・ (西表島の観光客数と人口の推移データを基に) 地域の資源を守りながら住民の消費と観光収入の減少を補うためには、地域ぐるみで価値を高め、地域ぐるみで循環させていくことが重要である。そのためには観光による単価や地域への経済波及効果を上げることを考えなければいけない(日帰り客よりも宿泊客)。

●ワークショップ

- ・ 昨年度のワークショップと同様の手法で、まずは西表島の宝物さがしをし、未来の島のビジョンをグループワークの形式で考えた。続いて参加者個々の業における長所・短所の認識、そしてその長所を他の主体のためにどのように活かせるかをペアになって検証し、そこから地域協働や連携体制を取っていく上でのヒントを導き出した。

◇講演内容のふりかえり

- ・ 講演の内容をふりかえりながら、観光のビジョンや伝えたいメッセージを共有することの重要性を確認した。

◇自己紹介

- ・ それぞれの職業や活動、エコツーリズムとの関わり等の紹介をした。

◇グループワークと発表

- ・ 2グループに分かれて模造紙に記入していく形式で行った。最初に西表島の宝物を列挙し、その中から最も重要だと思うものを3つ選び1~3位まで順位付けを行った。そしてそれらが重要である理由を検証し、グループ代表者が発表した。両グループとも上位に「自然」「人」が入っており、これは前回のワークショップの際の結果とも共通していた。その後その宝物のどんな価値を伝えたいかという考察を経て、最終的に100年後の理想の島のビジョンを思い描き発表した。

◇個人ワーク

- ・ 用意されたワークシートに個々が記入する形式で行った。参加者個々の業における強み・弱み(長所・短所)を検証した。

◇ペアワーク

- ・ ランダムにペアをつくり、個人ワークで強み・弱みを記入したワークシートを交換し、今度は100年後の理想の島のビジョンのために「相手の長所が自分のどういった部分に活かされるか」また、「自分が相手の短所を補うために何ができるか」を検証し、相手のワークシートに記入した。

◇アドバイスとまとめ

- ・ 西表の観光は何を目指すのか? まずは、ビジョンや伝えたいメッセージを共有することが大切。
- ・ 地域の一人ひとりが少しずつコーディネーターの役割を担うこと、そういったバランス感覚を養うことが必要。
- ・ 連携を図っていく上で、一度に大きなつながりは難しいと思うので、まずはこのワークショップで行ったような個々の小さなつながりからつくっていき、それを積み上げていってほしい。
- ・ 観光基本計画の見直しがされていると聞いたが、この計画の中に地域の皆さんが描くビジョンとつながるものが組み込まれていないと、これまでのように形だけの計画になってしまう。計画をつくる段階から皆さんの意見が反映されるように何らかの動きをとってほしい。

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

- ・ 参加者の業種等に関わらず、エコツーリズムの意味、定義を理解(前回から続いて参加された方には再確認)する機会となった。
- ・ 個々のお客様に対してしか向いていなかった意識が、地域全体のお客様へ向いていくようになった。
- ・ 他地域での、観光への住民や多様な主体の参加の手法が、西表島で連携体制を築いていく上でのヒントとなった。
- ・ 「小さなつながりからつくっていけば良い」というアドバイスは、参加者の心理的ハードルを低くし、「それなら自分にもできる」という自信につながった。
- ・ 意見を交わす機会が少なかった異業種間で、とても良い意見交換の場となった。またそういった場を設けることの重要性を知った。
- ・ ワークショップの手法が、今後、目的やビジョンを明確にしたり、課題・問題を解決していく際のアプローチ方法として参考になった。
- ・ 実際の西表島の統計データを基にしたの経済波及効果等の話は、ビジョンだけではなく問題意識を共有することにつながった。
- ・ 個人差はあるが、民間と行政それぞれの役割を認識できた。

●今後の期待される効果

- ・ 先ずは地域の未来のビジョンを共有するために、若者や有志が中心となって、あらゆる主体が意見交換できる場が定期的に設けられることが期待される。
- ・ 多くの地域住民によるビジョンや問題意識の共有が、観光基本計画へそれらを反映させるアクションへとつながり、行政と民間が同じ方向を向いてエコツーリズムを推進する体制が整えられることが期待される。
- ・ 地域住民や地域の多様な主体が連携して、地域の価値を高め、日帰り客を宿泊客へシフトさせるための新たな魅力づくり、そしてその受入の体制が整えられることが期待される。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- ・ 前回の派遣時に、地域の多様な主体がさまざまな形で観光やエコツーリズムに参加し、連携が図られている鳥羽の事例を、大変参考にさせていただいた。しかし、その後それらを具体的なアクションに移していく過程に難しさを感じていた。今回の派遣では、「小さなところからのつながりづくり」の手法を、講演やワークショップを通じて学ぶことができ、誰もが簡単にアクションを起こしていけるよう心理的ハードルを下げさせていただいたことは、参加者にとって大きな収穫であったと思う。
- ・ また、行政との連携に関しても、アプローチの難しさを感じていたが、アドバイザーを交えて意見交換をしたことで、町長をはじめとする役場職員のエコツーリズムに対する関心を向上させることができ、前向きに推進体制を築いていく土台をつくれたのではないかとと思う。

●その他感想

- ・ 前回の派遣が地域住民に非常に好評であったため、今回も参加を楽しみにしていた住民が多く、また新たな参加者を得たことで共有の輪が広がっているように思う。
- ・ 今回はより具体的なアクションにつながるアドバイスをいただけたことで、「気付き」から「行動」へと次のステップに進む準備が整ったように思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

有限会社オズ 代表取締役／旅館 海月 女将 江崎 貴久 氏

●アドバイス（講義等）の概要

1) 機会と事前計画の効果

- ・ 平成 24 年 3 月に引き続き、今回訪れたことで島民の記憶とモチベーションが高い間に次の手をうつことできたのは効果的であったと思われます。
- ・ そして今回の同アドバイザー派遣を効果的にするため、事前に前回の提言やアドバイスをふまえ、具体的な打ち合わせを行ってきたことが、少ない日数を最大限生かすことにつながられたと思います。
- ・ 事務局をはじめとする皆さんの目的に向かう意識とそのプロセスの理解が功を奏し、戦略的なスケジュールを組んでいただきました。
- ・ 短期間の準備期間ではありましたが、私の訪問希望先への調整を見事に行われた事務局やそれをサポートする会長はじめ、会員の皆さんに大変感謝しております。

2) 現地調査・ヒアリングの効果と更なる課題

- ・ 前回のフィールド視察と懇親会等でエコツーリズム推進の担当者や関係者から得た情報を元に、地域課題に 1 歩踏み込んだ対象者へのヒアリングを行いました。方法としては西表島の観光を取り巻く人々を訪問し、当事者と 1 対 1 でお話する機会を得ました。
- ・ それぞれの方がエコツーリズムを推進するために抱えている個々の課題を明らかにし、可能性を探ることができました。個々の課題の分析を当事者とすることで、全体の課題解決のために、個々の果たせる役割を見出すことにつながり今後の進め方の具体的なヒントが得られました。
- ・ 前回の調査では、カヌー事業者のマネジメントについて、住民やカヌー以外の事業者との隔たりが課題であることが分かりました。そこで今回、西表島カヌー組合長の事業所を事務局と訪問し、内情を聞くことができました。
- ・ 西表島でのネイチャーツアー始動期は事業者数が少なかったため、地域の関係も密接でしたが、近年の沖縄ブームとそのライフスタイルへの人気から、移住希望者が増え生業として比較的投資額も低く独立しやすいカヌー事業者も多数に増え、結果としてカヌー組合はピナイサーラの滝の利用調整が主な組合の存在意義となっていることが当事者の話として聞くことができました。
- ・ こうした社会的な環境変化の影響や組合の体制とその成り立ち等を伺い、それらが生み出した閉鎖的な体勢のため、現状ではすぐに組合全体の意思として体勢を変えることは難しいことも分かりました。しかし、外部との連携が組合の運営方針に社会性を持たせ、個々の事業者の質を上げていくことが確信できました。
- ・ そこで、いきなり地域資源活用の課題に直面する多様な主体との意見交換の場は今後のポジショニングの中で非常にリスクな接点となってしまうと考えます。まずは、お互い助け合い思いやれる経験事業としてエコツーリズム協会等地元と一緒に地域資源を活用したイベントを提案しました。組合では共催等の明確な連携事業は無理だが、一部有志が連携し、情報発信をするといった間接的協力からなら可能であるという結論ができました。
- ・ その他、観光産業に関わる 20 代～30 代の次世代の若手にも話を聞けました。まず交通機関の第三者からの意見として、観光と農業の産業間連携の必要性とその連携は人間関係が左右していると感じていることが伺えました。その次に当事者にあたる若者リーダーにもヒアリングを行ってみたところ、これからの観光活性化の意欲は感じられるが戦略的にビジョンを持った計画にはなっていないまま始動している現状が分かりました。
- ・ 一方、先駆者として西表島農業の 6 次産業化を実践している若者は生活環境、特に教育環境の現状から子

どもが大きくなってくると共に深刻さを増し、数年後には島を離れる決意をしています。今後、持続的な発展のためには若手の体制を模索する必要があることが分かりました。同時にIターンの若者の活躍が目立っている本島では、子どもの教育環境はこれから島に若者を留まらせるための大きなハードルであり続けると思います。

3) 行政へのアプローチ効果

- ・ 前回、提言していた行政との関係づくりについても進展しました。
- ・ 環境省のアドバイザーとして事務局と会長とともに役場にも訪問し、町長、副町長、商工観光課長、画財政課長、自然環境課主事をはじめ関係担当者出席の下、意見交換と協力依頼を行いました。協議会設置と予算要求の機会について町長自らご快諾いただき、今後の運営の安定化にもつながるのではないかと考えられます。
- ・ 町長は意欲的ですが、その反面担当課長の中には明らかに消極さが見受けられる方もおられ、依然として潤沢な補助金運営における体質と竹富町役場が行政区域内にないという全国でも珍しい地理条件が行政改革の妨げになっています。こうした行政の体勢の改善も民との関わりによって変化する可能性が考えられ、事務局の外部へのアプローチも今後の運営に入れていくことをアドバイスしました。

4) 講義による効果

- ・ 前回は、皆さんにエコツーリズムについての考え方や地域のみんなで連携し協力することの具体的なイメージを付けていただきました。今回は更に新たな人々も加わっての講演とワークショップだったので、2度目の参加者は、これから自分たちがこの手法を学び広げていく意識が付いたようです。
- ・ 今後は指導者を育て、西表島の各地で少しずつ「自分たちの宝もの」について考える出張ワーキングをできるようにサポートできればと思っています。

5) 今後期待される効果

- ・ その他、地元地域の婦人会は重要な位置付けにあり、その牽引役である会長の理解が今後の西表島のエコツーリズム推進に大きな力となっていくと思われれます。
- ・ 仕組づくりに関しても、行政の参画が期待できると思われれます。事業に対する意欲や積極性の高まりは、今の西表島エコツーリズムに関わる民間に比べると緩やかなものになると予想されます。民間先行のスタイルになるのは間違いないので、そういう意味では鳥羽のスタイルを参考にしながらも、西表オリジナルの事業展開が求められると思います。

●地域に対する印象、コメント（メッセージ）

- ・ 行政との公式での関係ができた今回をふまえ、今後このきっかけをどう生かしていくのかを考える必要性があります。
- ・ まずは、行政へのアプローチを日常の運営業務に盛り込んでいただきたいと思います。行政区域内に無い役場は親近感が湧きづらいものですが、これは住民だけが感じているものではありません。当然、行政職員も同じように感じているはずで。
- ・ 物理的に現場から遠いことが、心のバリアになっていることは間違いありません。これを補うには定期的に役場を訪問し、現場のやりがいにつながる空気を少しでも役場に届け続けることです。役場から西表島に足を運びやすくする条件を整えていくと行き来が活発になると思われれます。行政との信頼関係が、島内での信頼関係も成長させていくきっかけとなります。行政に協力依頼するが、実際の活動では行政に協力・サポートする位の姿勢で向き合っていただきたいと思います。

- ・ 事務局ひとりではなく、事務局をサポートする数人で今後の展開方法を計画し共有していけば、みんなで描いたビジョンの実現が必ず可能なものとなると思います。
- ・ エコツーリズムは、観光地の心を中心になければならないものです。そのためには、エコツーリズムの考え方を理解した皆さんが地域観光のリーダーとなっただかなければ実現しません。
- ・ 理解し合い、理解し続ける場づくりの工夫のために、協議会設置、連携事業の企画、理解の仕方（目的の共有）・接点の作り方（可能性の創出）・メリットの作り方（win-win アイディア）の工夫…研修を通じて必要性を感じたことを、実現していきましょう。

4. アドバイザー派遣報告会

4-1. 開催概要

アドバイザー派遣事業を通じて行われた取組を多くの方々に共有するため、事業報告会を開催した。本報告会では、アドバイザー派遣を活用して取組を行った2地域、現地を訪れていた3名のアドバイザーから、地域の取組や課題、アドバイザー派遣を通じて目指したこと等を報告していただいた。

日 時	2012年3月11日（月）13：30～17：30
会 場	大手町サンスカイルーム D会議室 〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-6-1 朝日生命大手町ビル 27階
参加費	無料
申し込み	ホームページまたはFAXより申込を受付 ・ホームページ http://www.jtb.or.jp/eco-tourism12.html ・FAX 03-5255-6077



会場の様子（大手町サンスカイルームD会議室）



講師並びに環境省関連の資料配布（会場後部）

【プログラム】

13:30	開会
13:30-13:35	<挨拶（報告会開催にあたって）> 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室
13:35-14:35	<地域からの報告> (1) 岩手県久慈市での取組 久慈市産業振興部交流促進課 総括主査 二ッ神 一洋 氏 (2) 東京都西多摩郡檜原村での取組 NPO 法人フジの森 理事・事務局長 相澤 美沙子氏
14:35-14:45	休憩
14:46-14:47	黙祷*
14:50-16:20	<アドバイザーからの報告> (1) 高橋 充 氏 /株式会社南信州観光公社 代表取締役社長 派遣地域：熊本県八代市、茨城県行方市、岩手県宮古市 (2) 城戸 基秀 氏 /公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 派遣地域：群馬県下仁田町 (3) 松田 光輝 氏 /株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 派遣地域：北海道上川町、山梨県富士山及び富士北麓地域
16:20-16:30	休憩
16:30-17:30	ディスカッション
17:30	閉会

(司会進行 公益財団法人 日本交通公社)

* 開催日である3月11日が、東日本大震災発生2周年であったため、黙祷を行った。

4-2. 議事概要

(1) 挨拶

環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室長 堀上 勝 氏

- ・ 地域の自然や文化を活用しながら、ガイドの方々によってその自然や文化をきちんと解説し、観光に活用し、地域の活動を高めていくエコツーリズムの取組が各地域で行われている。
- ・ 環境省では「エコツーリズム推進法」に基づきさまざまな事業を実施しており、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」もその一つ。
- ・ 24年度は派遣を希望する団体が最も多く20団体に派遣をした。アドバイザーも過去最多の25人のアドバイザーをお願いし20地域に行っていただいた。
- ・ 本日の報告をさまざまな形で私どもも活用していきたい。また、各地で活用していただけるように、施策を組んでいきたい。



(2) 地域からの報告：岩手県久慈市での取組

二ッ神 一洋 氏 /久慈市産業振興部交流促進課 総括主査

●東日本大震災にかかる被災状況について

- ・ 久慈市では約 310 億円という甚大な被害を受け、浸水した一般の住宅等約 1700 棟、久慈市の死者は 4 人。
- ・ 大きな被害を受けた県南地域と比較をすれば被害が少なく、早く復旧・復興に向かっている。全国の多くの皆様からいただいた支援にお礼を申し上げたい。



●ふるさと体験学習協会について

- ・ 教育旅行の受入にあたって行政とふるさと体験学習協会が協働して受入をしている。
- ・ 主な事業は、地域資源活用に係る情報収集・調査研究、体験型観光プログラムの開発・実証、インストラクター及び民泊体験受入先の養成、体験型学習の実際の受入、教育旅行及びグリーン・ツーリズムの推進等。
- ・ 体験プログラムは約 40 件。山里海の主なプログラムとして、シャワー・クライミング、琥珀採掘体験、サップクルーズがある。
- ・ 平成 17 年度から教育旅行を受入。当時の実質人数が 520 名、述人数 1,670 名。23 年度は、震災の影響で全てキャンセルとなった。

●エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ 今までエコツーリズムへの取組はほとんどなし。教育旅行と絡めた更なる地域活性化が目的。
- ・ 鹿児島大学名誉教授であります大木公彦先生に来ていただき、市内の体験フィールド、受入施設、宿泊施設、教育旅行で活用している部分を見ていただいて、エコツーリズムに活用できないかという視点でアドバイスいただいた。
- ・ 大木先生からは、市内の生徒が自分の住んでいる場所の素晴らしさを知ることが必要で、市内生徒を対象とした体験学習も必要で、岩手大学、県立博物館等と連携し、地元住民、教職員、生徒を巻き込んで勉強をする必要があるとの指摘を受けた。それにより、子どもたちに郷土愛が生まれ地に定着し、地域活性化につながるということだった。
- ・ 体験学習の内容を深めることの必要性も指摘された。山、里、海のつながりを意識したメニューづくり、総合学習の場であることや「生きる」力を育むことを強調することの重要性を指摘された。
- ・ 県北の人は宮沢賢治をあまり意識していないが、エコツーリズムの原点が賢治の童話や生き方にあるという助言もいただいた。

(3) 地域からの報告：東京都西多摩郡檜原村での取組

相澤 美沙子氏 /NPO 法人フジの森 理事・事務局長

●檜原村の概況について

- ・ 檜原村は東京から 2 時間半位に位置。武蔵五日市以降はバスか車での移動が必要。
- ・ 9 割が森林。8 割が秩父多摩甲斐国立公園に属する。人口 2,524 人。
- ・ 観光客は年間 37 万人で「都民の森」に 21 万人。日帰り観光地として知られている。
- ・ 歴史文化の資源も豊富で、伝統工芸、式三番、神代神楽、おとう神事等、口留番所、国指定文化財の小林家住宅等。昔から林業や炭焼きが盛ん。



●NPO 法人フジの森の活動について

- ・ 体験交流事業、環境教育事業、環境保全事業、普及啓発事業等を実施。教育の森、ふるさとの森、四季の里という地産地消のレストランの 3 つを運営。
- ・ 教育の森は体験施設も兼ねており、土日のプログラムを年に 90 回程度実施。
- ・ 間伐体験、枝打ち体験、薪割り体験、川での水中生物観察、川遊び、山村の生活体験（蕎麦の種まき・刈取・石臼引き・そば打ち、草木染、手作りピザ等）、自然観察道の修繕体験、木工クラフト、サンマの炭焼き、ダッチオーブン、キャンプファイア、ハンモック等。また、野外音楽堂でのオカリナコンサート、間伐材によるログハウスづくり、ツリークライミング等、多様なプログラム実施。日帰りプログラムで毎年 1000 人以上が訪れている。

●エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- ・ アドバイザーの真板昭夫氏には、四季の里とふるさとの森、弘沢の滝を含めたエコツーリズムの可能性についての助言をいただいた。弘沢の滝は日本の滝百選に入る名瀑で毎年 65,000 人の方が来訪している。
- ・ 弘沢の滝では、ガイドをつけて滝の近くまでの自然や植物の案内等や歴史等が説明できることが重要であること、東京とは思えない滝の壮かさや自然のよさは観光資源として魅力があること、起伏が無いので高齢者にも訪れやすいこと、一部では安全管理や修景のための整備が必要であること等の指摘をいただいた。
- ・ ふるさとの森では、照葉樹林や落葉広葉樹林と人工林の両方を体験できる豊かな森で、野生動物も多く生息しており、ガイドを付けた方が楽しめること、安全のための整備やトイレの整備が必要なこと、適度の伐採が必要等の助言をいただいた。
- ・ その他、真板氏からは、エコツーリズムの講演と地域の宝探しの方法、二戸や南大東村等の事例を教えていただいた。

(4) アドバイザーからの報告：熊本県八代市、茨城県行方市、岩手県宮古市

高橋 充 氏 / 株式会社南信州観光公社 代表取締役社長

1) 熊本県八代市への派遣について

●熊本県八代市について

- ・ 熊本駅からだと新幹線で 20 分弱、在来線でも 30 分位。新大阪から 3 時間半位に位置。沿岸部～平地～山間部～山まで非常に多岐にわたる。
- ・ 八代よかとこ宣伝隊という八代市の観光協会の中の組織からの依頼。一所懸命、地域振興のために努力をされている。



●アドバイスの内容について

- ・ 交通アクセスが悪いことを心配している方もいたが、むしろ移動したからこそその価値があり、普段接することのできない自然の凄さ、生きている人間のたくましさを味わえるのではないかと感じた。地理的、時間的距離感は、むしろそれをよしとできる部分がある。
- ・ また、地域にコーディネート組織があり行政と協働で進めており、実際にお金を払って来訪する観光客が 1 年度に来る予定があるということで、これから十分可能性はあるのではないかと印象を持ち、そのように伝えてきた。

2) 茨城県行方市への派遣について

●茨城県行方市について

- ・ 比較的首都圏から近く車で 2 時間位。霞ヶ浦のほとりにある。
- ・ ここでは、有限会社くらぶコアという民間事業者が一所懸命頑張っていて、オーガニック農法で日本一の生産量・生産額を上げているが、更に 6 次産業の部分で何かできないかということで、アドバイザー派遣に至ったとのことである。

●アドバイスの内容について

- ・ 霞ヶ浦でのアウトドアスポーツ体験や、近隣の博物館等、活用の仕方によっては高い学習効果が期待できる施設もある。それらを行政とくらぶコアが当面核になって推進すれば色々な需要があるのではと感じた。
- ・ 教育旅行だけでなく一般の団体でもこだわりの旅を求める部分がある。地域の方と行政とくらぶコアをつないでいけば非常に面白いと感じた。6 次産業担当の方は自信が出てきたと言っていた。今後期待している。

3) 岩手県宮古市への派遣について

●岩手県宮古市について

- ・ 宮古市は東日本大震災で甚大な被害を受けた（田老地区他）。
- ・ 新幹線盛岡駅からバスで 2 時間。意外と近いと感じた。

●アドバイスの内容について

- ・ 2時間で行けるならば東京から4時間半。つまり半日で移動できると考えると、地理的なハンディは全く考えなくて良いと感じた。誘客する場合にとってはなんらハンディではないという話をした。
- ・ 宮古市は市町村合併をして、海の地区、森の地区、川の地区の子どもたちが互いの場所をよく知ろうということで、森、川、海の体験事業を2年ほど前に始めたとのこと。森のフィールド、あるいは川のフィールド、そして海のフィールド、それぞれ視察した。
- ・ 地域の中で交流事業を進めている点だけでも、既に一步前に進んでいると感じた。
- ・ 将来教育旅行を誘致したいということだったので、このまま地域の中でこれを継続し、役場もその核となってやっていく覚悟を持っていると感じたので、今後は外に向けて情報発信していければ段々形になってくるだろうと感じた。

4) まとめ

- ・ 人の暮らしや歴史や自然を十分に深く理解しながら、地域に貢献していくというエコツーリズムの精神を考えると、3地区とも十分取り組んでいけると感じた。
- ・ エコツーリズムを推進していくには、以下の5つを連携していくものと常々考えて南信州地域で取り組んでいる。

1) 目指す姿に合致した基本理念の構築が事業推進の基盤

2) 適確な流通手段の選定とプロモーションにより、人を連れてくることも大事

3) 地域として譲れない一線は守る

4) 関わる人こそが最高の財産である

5) 地域の内側と外側双方の窓口を一本化し、理念の浸透やプロモーション、危機管理対応等に専心する

- ・ エコツーリズムがこれからますます浸透し、エコツーリズムというものの考え方自体が色々な形でこれから頼られてくると思う。
- ・ あるべきひとつの姿として、近年、職場内うつや予備軍の方が多いが、エコツーリズムを通じて地域で色々な方の話を聞いたり自分のことを語ることで、自分はこんな考え方ができるのか、こんなことを普段思っていたのかと、発見や刺激になる機会にもなりうると思う。
- ・ 例えば企業等が多少お金を出して職員のメンタルヘルス等に活かしたり、国が助成したりと、全体で社会の問題を解消し、都市も地域も豊かになるというものに将来結びついていくのではないか。

(5) アドバイザーからの報告：群馬県下仁田町

城戸 基秀 氏 / 公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長

●下仁田町について

- ・ 下仁田は群馬の丁度長野県と埼玉県の間位のところ。面積 188 平方キロ、人口は 8,900 人で、過疎化が進んでいる
- ・ 有名なのは、下仁田ネギ、下仁田コンニャク、荒船山や妙義山等の険しい山々。
- ・ 下仁田では二つの大きな取組があり、一つはジオパーク、もう一つは世界遺産登録に向けた取組。下仁田のキャッチフレーズは「ネギとコンニャク・ジオパーク」。非常に一点突破的なところがあるが、幅広い資源がある。
- ・ ジオパークは、地質が全ての基盤になっているという考え方を持っており、エコツーリズムと非常に似ている。ジオツーリズムの定義を見ると、地形・地質を中心として生態系、更には地域の歴史・伝統・文化を対象とする観光と書いてあり、エコツーリズムそのもの。資源を保全しつつ活用することにより地域経済を活性化する、という点もよく似ている。ジオツーリズムとエコツーリズムは基本的に同じ。
- ・ 食や土産も、ジオ定食とかジオ田楽とかジオかつ井等が非常に多い。町や町の皆さんが協力してやっている点に感心した。
- ・ ジオツアーをやっており、学校から要望を受けてから対応するやり方で、年間 4,000 人位に案内をしている。基本的に無料。ガイドは学校の先生等の専門的知識を持った方。
- ・ 下仁田ジオ・歴史遺産応援団というガイド養成組織的なものがあり、30 人位で月一回勉強会をして、歴史や地理・地学的なものの講演をされているとのこと。この中にはガイドをやりたいという方、勉強をちょっとしてみたいという方も含まれている。



●アドバイスの内容について

- ・ 地域からは、ガイドの養成組織を 1 年間動かしているが、その育成方法と、地域全体が協働する推進の体制づくりをどう進めていけば良いか、現在無料でやっているエコツアーの事業化についてどう考えていくのか、といった要望があった。
- ・ 地質の話というのは面白いが、やや専門的で、多くの人に対してどうか、と感じた。実は、他にも非常に優れた資源があり、地質以外にも、自然も良い魅力があると感じた。地質、ジオを優先しているため活かす視点が弱いと感じた。もう少し対象を広げて取り組んだ方が発展性があると考え、対象に広がりを持たせたらどうかという話をした。対象が広がれば、地質に興味があなくても、食や文化等に興味がある人も入ってこれるので、地域住民も参加者も入りやすくなるのではとお話しした。行政内についても、ジオの推進室だけでなく幅広く関わっていただくと良いのではと思う。
- ・ エコツアーの位置付けについては、これからどう全体を発展させていこうか、というビジョンや目標を考える必要があると感じた。無料で小学校相手に専門的な内容にするのか、少し幅を広げて有料でやるのか、地域の人にどういうふうに入っていただくのか等、地域のツアーの目

標を考えたらどうかと話をした。有料にするのか無料にするのかというのは非常に大きな問題で、一概にどちらが良いとはいえないが、継続的にやっていくためには有料にすることも視野に入れて考えた方が良く考える。

- ガイドの育成についても二つの方向性があり、今は、地質や世界遺産といったどちらかという専門的なやり方。これも重要だが、できることからやっていくというやり方もあるのではと思う。飯能ではガイド養成講座を3日間受講した後、すぐにガイドの手伝いをさせていただき、実践の中で育てていくことをやっている。こうした考え方も場合によっては必要ではないかと話した。専門知識の習得となると、できる人が限られるので、町全体で、今後エコツーリズム、ジオツーリズムというのはどういうふうにしていくかを考えながら決めていくことが必要ではないかと考える。
- 取組を広げていくためにはNPOとか地域の団体にできるだけ関わっていただくということが重要。地質だけではなく、自然や歴史や文化を知っている方、団体にも、ツアーに部分的に協力してもらう等が大事ではないか。
- 地域住民については、地質に興味が無いと自分たちのものとして捉えられないので、もう少しツアーの幅を広げ、ツアーの途中で立ち寄らせてもらうとか、自分の体験を話してもらうというような形で参加をしていただくことが大事ではないかという話をした。
- まとめて、町でエコツアーやジオツアーの取組をどのようにしていきたいのか、再度皆さんで話をしながらやっていくことが重要ではないか、ということ。

(6) アドバイザーからの報告：北海道上川町、山梨県富士山及び富士北麓地域

松田 光輝 氏 / 株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役

1) 北海道上川町への派遣について

●北海道上川町について

- ・ 層雲峡は北海道の中央部、旭山動物園の近くにある。旭岳、黒岳といった高い山があり、秋は溪谷の紅葉がきれい。観光客も多い。



●アドバイスの内容について

- ・ 地域からの依頼は、観光客・宿泊客の減少に対し、エコツーリズムに取り組むことで宿泊客の減少に歯止めをかけられないかということ。
- ・ 紅葉谷は、層雲峡の温泉街から気軽に散策でき、北海道らしい森林を満喫できるコース。しかし一目で分かる資源がなく、どんどん人を呼べる資源ではない。現地で話したのは、ガイドのネタ（クマゲラの食痕、太いトドマツ等）が多くあり、ガイドが付くことで付加価値が付けられて、観光客に親しまれる場所にできるのではということ。ガイド養成が必要になると思う。
- ・ 大函は、柱状節理という岩と溪谷があるところで、溪谷の迫力ある景色を望める。課題は、柱状節理で崩れやすく近くで見られないことと、車から降りて簡単に眺望できるので滞在時間が短いこと。宿泊者を増やすには滞在して楽しめる資源がなければならない。流星・銀河の滝という迫力ある滝もあるが、ここも車を降りてすぐ見られる。層雲峡にはそうしたも資源が多い。
- ・ 旭ヶ丘に上川町がオーベルジュと花のガーデンを作っているとのこと。ガーデン系は北海道で今人気があるが維持管理に相当なお金がかかる。魅力あるものを作っていこうとするとそれなりに維持管理がかかる。維持コストの捻出がキーポイントになると思った。
- ・ 層雲峡の資源は簡単に見られるものが多いが、自然資源の魅力を高めるためにはストーリーをガイドとして大事にしている。簡単に見られるものは、感動はそんなに大きくない。
- ・ 感動を生む上ではルート作りも大事。知床五湖には原生林の中に五つの湖があるが、このコースでは観光客は非常に感動する。理由の一つは森を歩いて湖に着くと急に目の前が開けて湖越しに山が見えるから。駐車場を降りてぱっと湖と山が見えても、そんなに感動は大きくないと思う。上川町も見せ方を考えていくべきと思った。
- ・ 限られた観光資源を活用するためには自然ガイドが有効。ガイドが魅力をストーリーで伝える、それが今まで使っていた資源の付加価値を高められる。層雲峡でも何名かガイドがいるが食べられなくて続かないとのこと。他地域も同様ではないか。しかし、エコツーリズムは経済と両輪。ガイドが生業として食べていける仕組を育てないと継続的に取り組めない。
- ・ ただし、北海道は、遠くからお客様が来るので有利。距離が離れるほどお金を使うから。うまく地域として取り組んでいけば、ガイドが食べられる仕組はできるのではないか。
- ・ 宿泊者を増やすには、宿泊しなければ体験できないメニューをラインアップする必要がある。夜や早朝のプログラムは泊まらないと参加できない。知床では、夜のプログラムが売れるようになれば宿泊者は増えるという話をして宿にも協力いただいている。実際にスター・ウォッチングの需要はどんどん増えている。

2) 山梨県富士山及び富士北麓地域への派遣について

●山梨県富士山及び富士北麓地域

- ・ 富士風穴に行ったが、平坦な地形で、高齢者から子どもまで気軽に奥深い森を体感できる良いコースと感じた。

●アドバイスの内容について

- ・ ここで起きている代表的問題として、コースの踏み外しと、それにも付随してコケ等植生保護が課題に出ているとのこと。
- ・ 駐車場問題と利用制限の話があったが、まず駐車場自体も問題があり、ルート入口の駐車スペースが限られていて、車が数台停めれるが、そこが埋まっていると、だいぶ離れたところに車を停めて歩かなければならない。しかも道路幅が狭く非常に危険だと思った。駐車場も安全に利用していただくためには対策が必要だと思った。利用人数については、駐車場のつくり方でもコントロール可能。キャパシティは駐車場でだいたい決まる。知床五湖では駐車場に入れなかったらそれ以上利用人数は増えない。利用人数をコントロールしたい場合は駐車場のキャパも考えていけば良い。そういう工夫も必要。
- ・ 富士風穴の穴へ上り下りするところはルート整備をもう少ししないと今後崩落等が起きる可能性があるため、持続的に使っていくためには、最低限の整備が必要だと思った。
- ・ 野生動物に餌付けして見せているガイドがいることは問題と感じた。知床では4月からヒグマ餌やり禁止キャンペーンを展開する。ヒグマが餌付けされ、観光客の方が襲われれば観光にもダメージがあるし、観光地と隣接して人が住んでいるので、地域住民に何かあれば、これも問題になるからだ。観光も一次産業も自然とともに生きており、地域の自然を受け入れていく覚悟を持って生活していかなければならない。そのためには地域に住んでいる人間が自分たちの言葉で声を出し行動を起こすことが大事。これによって、住民も含めて自然とともに生きていく地域だというブランドになっていくと思う。観光としての売りにもなる。そういう視点からも、自然との接し方や姿勢も地域で大事。富士風穴は非常に良い環境のある場所であり、自然価値の向上のための利用方法、利用のあり方をまずみんなで話し合っていくべき。
- ・ 資源価値を損なわないためのルール作りの必要性も感じた。作るだけでなく、一般利用者やガイドへのルールの周知も必要。方法はさまざまだが、一つは自然ガイドを登録制にして講習を受けてもらい、ルールの周知をして利用してもらう仕組みを作っていくのも有効。特にこの地区は、他の町からもガイドが来ているようなので、そういった枠組みが必要ではないかと感じた。
- ・ 安全にかつ適正に利用するための施設整備や、こういった利用が良いのかということは、モニタリングが非常に大事になってくると思う。専門家と日常的に使うガイドが協力し合うようなモニタリング体制を作っていくことで、資源価値を損なわない利用を進めていけると思う。
- ・ 利害関係者を集めて県の方が協議会を作っているが、行政と民間がタッグを組むことが重要。ぜひ引き続き、県の方には頑張ってください。
- ・ 価値を上げるという部分で言うと、知床では利用調整地区制度といって、人数を制限しつつ、季節によってガイド同行、レクチャー受講等を義務付け、閑散期は自由利用期にする等、季節によって利用形態を変えている。それで価値を維持したり、一般の方が自由に入るよりは安全に利用できるという仕組みを作っている。

(7) ディスカッション

●パネリスト

- ・ 久慈市産業振興部交流促進課 総括主査 ニッ神 一洋 氏
- ・ NPO 法人フジの森 理事・事務局長 相澤 美沙子氏
- ・ 株式会社南信州観光公社 代表取締役社 高橋 充 氏
- ・ 公益財団法人日本生態系協会 地域計画室長 城戸 基秀 氏
- ・ 株式会社知床ネイチャーオフィス 代表取締役 松田 光輝 氏
- ・ 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室 堀上 勝 氏

●司会

- ・ 公益財団法人日本交通公社 主任研究員 大隅 一志



●ディスカッション

◇観光協会です仕事をしており、修学旅行受入準備に向けて旅行業法資格を取るべきか悩んでいる。どのように将来的に取り組んでいった方が良いか助言いただきたい。(参加者)

高橋氏

- ・民泊やプログラムのインストラクター等の調整をする分には不要。教育旅行の受入に加えて、着地型ツアーを作り事業を展開しようと考えていく場合は、旅行業法資格を取得しても良いと思う。

松田氏

- ・資格を持つにもそれなりにお金と覚悟が必要。オペレーションも大変。地域で将来どういった観光を目指すかによって変わる。まずは地域でそのあり方を描いてから、考えた方が良いと思う。



◇修学旅行で農業体験等を受け入れる中で、修学旅行が集中する時期に本業の農業が忙しくて手が付けられないという話を聞いた。久慈市や南信州観光公社ではどのように対応しているのか。(参加者)

ニッ神氏

- ・兼業農家は対応が難しいので、規模の大きいハウレンソウの専業農家に受入をお願いしている。現在 2 軒。今後生徒数が増えた場合も考えて、更に受入先を確保したい。

高橋氏

- ・南信州地域の場合は果樹栽培をしている方が多いが、4月末～5月の農家の繁忙期は修学旅行や教育旅行とは重ならない。それが過ぎてからお願いしている。
- ・田植え体験等は個人ではなく、地域の遊休耕農地や、地域活動の一環として取り組んでいるグループの方々と調整している。
- ・体験料も反収の2、3倍位になるレベルで受入できるような料金設定もしているので、お互い補完し合っ



◇地域に多くのエコツアー団体があり、受付、金額、内容、レベルがバラバラ。地域で一つの受付窓口を作って、レベルや、金額の統一を進めたいと考えているが、必ず利益分配の公平性が問題になると思う。うまく利益分配をしたり、公平性をうまく保っている事例等があれば教えていただきたい。(参加者)

松田氏

- ガイドの質を統一できるかどうか。完全に内容や質を統一できれば料金もある程度統一することはできるかもしれないが難しいと思う。
- 別の例で、観光協会の窓口で宿を紹介しているが、お客様に最終的に選んでいただくことにしている。それでも一部の宿からは、この宿ばかり紹介している、といったクレームが来る。私は、宿ごとに何が売りなのか出してもらい、選んでもらうのが良いと思っている。
- 平等を重視すると、お客様ではなく観光協会員に目が行ってしまう。観光協会は組合ではなく、お客様のための存在であるべき。そのためには、平等な利益分配等を考えてしまうと、お客様のためのメリットにならない可能性がある。そのことも踏まえて慎重に検討された方が良くと思う。



◇南信州観光公社では、多くの農家が協力していると思うが、公平性に気を使うことはあるのか。飯能市ではどうか。(司会)

高橋氏

- 基本的に、一軒一軒の農家の皆さんと話をしながらやっている。元々ガイド等がなかったところから始めているので山梨県とは事情が違うが、できるだけ一人一人の協力者と話をしながらお願いをしていることで、結果的に公平に接していると思う。

城戸氏

- 飯能市では、行政が窓口になってツアーのとりまとめをしているが、行政は広報だけをして、受付はそれぞれのツアーの事業者がやっている。
- 行政の場合、ツアーの質が問われるので、広報するツアーについては全て事前協議をしてエコツーリズムの考え方から外れないようにしている。
- ウェブサイトでもエコツアーの紹介のサイトを立ち上げて、受付はそちらにする、料金設定も事業者がやるというような形を取る、というのも行政が関わる一つのやり方かと思う。

堀上氏 (環境省)

- 城戸氏がお話されたことは、エコツーリズム関係者が集まる組織の中での合意があってできていることではないかと思う。全くそういうことがなくて、それぞれ業としてやっている人たちを単に窓口として束ねるとするのは中々難しいと思う。
- これまでは観光協会がそういった役割を果たしてきたが、エコツーリズムは幅広く色々な方が関わるため、行政がある程度出ていく必要がある。そのときに協議会のような組織を作り、その中である程度合意を取っていかないと不公平感が出ることもある。

◇エコツアーの視点から地域資源を見たときに、当たり前だった資源が見方が変わってくる、ということがあと思うが、アドバイザーに入っていて地域資源の見方が変わった点等があればお聞かせいただきたい。(司会)

相澤氏

- ・ NPO 法人フジの森の事務局はほとんど、村外の間が事務局をやっている。
- ・ 真板氏が、我々は風の人で、風を吹かせることはできるが、土の人たちの地域の人たちが誇らしいものを自分から発信していくことが大切だと言っていた。
- ・ 丁度風の間から土になりつつある若い人材がいるので、その若い人たちに少し風を吹かせつつ、本物をこの場所で根付かせたいと思っている。



ニッ神氏

- ・ 大木先生からアドバイスをいただいた「宮沢賢治」については関係者の頭の中にはなかった。外部の方を呼んで意見を伺うというのは改めて重要だと思った。
- ・ 今日紹介したシャワー・クライミングも外部の方から意見をいただいてできたプログラム。旅行会社の方々に助言をいただいて、今一番人気のプログラムになった。首都圏の子どもは川に入ったこともない人が多く、厳しい自然を体感して味わった達成感が人気につながっていると思う。

◇アドバイザーの方々は、どんなふうに資源に対してアプローチしているか。(司会)

松田氏

- ・ 自分の地域を知るだけでなく、他の地域のことをよく知るのも大切。他の地域も知ることで比較ができる。
- ・ もうひとつは、スタッフ同士のミーティング。仕事上の連絡事項だけではなく、自然に関する情報をお互いに発表している。その蓄積がプログラムのアイデアにつながっている。

城戸氏

- ・ エコツアーをやるときに資源を発掘しようと言って、町の全体を見てリスト化したりするが、正直言うとあまり使えない。ツアーを作ることを考えながら、何がツアーに使えるかを見て歩く中で、地域の人たちも初めて見るような、今までそれほど気に留めてなかったものが分かるとか、そういうことが大事ではと思う。
- ・ エコツアーを推進する上では、エコツアーをやらないといけないと思う。ツアーをやるということとセットにして探すというのが大事だと思う。

高橋氏

- ・ 南信州でのプログラムは今 180 種類位あるが、大きく分けると郷土の料理や伝統工芸、農林業の体験、アウトドアの体験等があり、共通しているのは元々この南信州地域でそれを生業にしていたり、地域の中で長年培ってずっと連綿と続けられてきた習慣といったものであること。それをずっとやってきた地域の人たちと一緒に初めてする人たちが体験をともにして、色々な触れ合い、交流が生まれるというの

が本物の体験だろうということから始めている。地域にある色々なものが体験プログラムになるという考え方。

- 地域の特徴というか、南信州、飯田あたりでは一本桜の桜がたくさんあって、それを一本一本、旬の見頃の桜を案内するという案内人を養成すれば、良いプログラムになるし、和菓子屋が市内に十数店舗あり、それぞれ独自カラーを持っていれば一軒一軒案内して食べてみるといったことで、プログラムができて上がる。
- そういったガイド案内向けにやりやすい地域資源と、いわゆる体験というものと2通りあるが、基本的には必ず地域の人が間に入って、インストラクターやガイド案内人をやり、五感を使ってしっかり楽しんで理解してもらおうものになっている。

◇南信州観光公社のプログラムはグリーン・ツーリズム型の体験がベースにあると思うが、ここにエコツーリズムの視点をうまく加えていくやり方とか、実際にこんなものを普通の体験から一步違う形でやっているというような事例があれば紹介していただきたい。(司会)

高橋氏

- お客様にじっくりと味わっていただくという視点では、例えば干し柿を作るところを、農家の人も大変なときだが、一緒にそれを手伝って、普通の里山を歩いてもらったり、そういったことを一日しっかり時間を使って、料金設定もバス会社等の価格帯の倍以上するような金額設定で年に10回程度開催しているというのがある。

◇会場にいらしていただいたアドバイザーの渡辺氏（アイ・エス・ケー合同会社 代表）からもお願いしたい。(司会)

渡辺氏（アドバイザー）

- 地域資源の発掘について、皆さんがおっしゃったように、地域の方に探していただくという作業をきちっとした上で、それが今度は商品になるんだろうかという目線で商品を作っていくということが大切だと思う。
- 観光事業者だけでなく、いろいろな住民の方に広く参加していただき、これが我が地域の売りだというものを出していただき、みんなでワークショップをしながら商品になるかどうか見極めていくのだと思う。
- 現在、茨城県のひたち太田市や、京都府の京丹後市でジオツーリズムというような形で取り組んでいるが、素晴らしい商品が出て来ていて、丹後ではジオツーリズムで、漁師さんが出していた小船に乗って海から柱状節理の切り立った岩を見るツアーを開発したり、ジオトレッキングですとか、地元の方が地元でジオをエコを学ぶ中で、これが売りになるのではないかと、というものを商品化し、右肩上がりですツアー参加者が増えてきている。
- 今日参加して思ったのは、資源が発掘されてメニューがプログラムの企画までいって、それが推進された後、流通をどうしていくのかについて、具体事例に焦点を当てて紹介していただければ、取り組んでいる地域の皆さんも、どこに向かってやっているのかが具体的になるように思う。それが課題であり目標なのではないかと感じた。



◇実際にそれぞれの地域の中でエコツアーが売れるかどうかという話がある。誰に対して商品を作るか、事業に乗るかどうかの見極めも重要。地域資源とマーケットとのマッチングの考え方についてアドバイザークラスからコメントをいただきたい。(司会)

高橋氏

- ・ 南信州は教育旅行中心だが、一般のバスツアーにも対応できるように取り組んだ中で、スノーシューを履いて里山を歩くツアーを十数年前に手掛けたときに、予想外に集まってくれたことがある。
- ・ スキーは楽しいが、それ以外は、雪は生活のやっかいもので、わざわざスノーシューを履いて里山にお金を払ってまで歩きに来るだろうか、というのが企画側の正直な感想だったが、お客様と話をしたところ、「冬山に憧れていたものの不安で尻込みしていたが、そういうバスツアーでスノーシューも用意してあり現地のガイドも付いて楽しめると聞いたから」と。諦めていたものが、そういうツアー商品を見て、自分もできると思えたのかなと、そのときに感じた。
- ・ そういったものをこれから企画できれば良いのではと。話には聞いていてやってみたいけど、どうやったら良いかわからない、というところをうまく用意できると良いのだろうと思っている。
- ・ 趣味の世界を取り入れることができると良いと思う。歩くのが好きだが色々なところに行き飽きたと。でも穴場でこういうところがある、ということをちゃんと提供できればやっぱり来るし、プロの写真家の方が良い場所を案内しますと言ったら多少高くても来てくれる。

城戸氏

- ・ 飯能は里地里山で都市に近く、ツアーをやる方がそれで生計を立てようという感じではない。ツアーをやって、来た方が喜んでくれて、それなりの対価が入るという位で良しとしている。
- ・ 都市から近いからか、金額が非常に大きく響く。食事を付けて 5,000 円にするんだったら、減らして 3,500 円にした方が人が来る、ということがある。
- ・ 特に人気があるのは、地元の方と触れ合える、ただハイキングに來ただけだとできないことができる、普段入れないところでも、人の家の裏庭とか、そういったところに入れる、そういったものは人気がある。普段できない体験ができるということが売れるものの一つかと思う。

松田氏

- ・ 今、スター・ウォッチングは売りに考えている。今までは知床は、動物ウォッチングで売っていたが、シカが増えすぎたということで駆除を始めたため多分シカはあまり見られなくなる。そうなると動物ウォッチングのツアーが成り立たない可能性がある。そこで、夜のプログラムで星を考えているが、星も満月が出ているとほとんど見えない。そのため、スター・ウォッチングとムーンウォッチングの日を設定している。
- ・ 商品をどういう売り方をするかという、まずターゲットを決めて、ターゲットに合わせたチャンネル戦略を考える。どういう商品がお客様が興味を持つかは、私どもの会社ではお客様アンケートから情報を得ている。もう 1 つの情報源はリピーターのお客様。他の地域も行っている方々もいるので、コミュニケーションから情報を得たりもしている。

◇最後に、地域でエコツーリズムに取り組むときに、どうやって人を育てたら良いのか、発掘していけば良いのか。一言ずつコメントでもいただきたい。(司会)

松田氏

- ・ どうやって人を育てるかは、毎日悩んでいる。スタッフにも色々なことにできるだけチャレンジをさせている。チャレンジをさせるという部分では、人との交流も大事だと思う。
- ・ 来ていただいた方とコミュニケーションを取ることで、可能性とか未来とかがイメージできる機会を作っておくことが人を育てるきっかけにはなるのではないかと考えている。

城戸氏

- ・ やはり人が重要でこれは間違いのないこと。飯能市のツアーは、全部地域住民の方、地域の NPO の方、自然保護団体の方等にやっていただいている。
- ・ 年間 120 件のツアーをやっているが、何故それだけのものが動くかということ、最初はツアーをやってくださいというお願いをしに行き、「お手伝いしますからやってください」と。何回かやりだすと、地域の方から今度は「こういうのをやりたい」というのが上がってくる。自然保護団体の方でも、ムササビのツアーから始めたら、次は星のツアーをやって、次は足跡のツアーをやるみたいなことを向こうから言ってきてくれる。まさに地域の方々が動かしている。
- ・ 私どもはそういったことを最初にお手伝いをしてあげる。エコツアーはやっている人も楽しいのが原則なので、どんどん回り出すということがある。ツアーをやっていただいて、それに対して行政なり、専門家なりがお手伝いをしてあげて、ということが大事ではないかと思う。

高橋氏

- ・ たくさんの方に協力をしていただいているが、一番は現場が人を鍛えるというか、現場が人を育てる。そういう現場を作らないと話にならないと思う。それを作るためにはきちんとした考え方をきちんと持って、なおかつ、それが地域の中で受け入れられて、訪れる方にとっても魅力的であるということを通して進めていくことが大事かと思う。
- ・ その中で段々とコーディネイト役をやってくれる人も出てくるし、担い手としてやってくれる方も出てくる。窓口もきちんと覚悟を持ってやらなければならないが、そういうものを含めて、現場が人を鍛えるのかなと考えている。

相澤氏

- ・ 檜原村で 25 年間活動をしてきて、最初にあった冬雷塾という組織がもう 70 代になっている。やはりその思いは、次の世代に引き継ぐ村おこしだった。私たちが風になり、少しずつだが 30 代の次世代に引き継ぐ若者たちが徐々に増えてきたので、その方たちにバトンタッチする役割ができればと考えている。

ニツ神氏

- ・ 良い意味で「馬鹿」になれる人が必要。大木先生からもエコツーリズムに取り組むに当たり「馬鹿を 3 人準備してください」という話もあった。やっぱり熱心、良い意味で馬鹿になれる人が必要。
- ・ 私も交流事業が大好きであり、行政なのでいつかは異動するがこの事業を一生やっていきたいつもりでいる。そういう人間に付いてきてくれる人々を育てることも必要。その方法は勉強会、講習会、視察、研修等。地方はお金が無い時勢なので引き続き支援をいただきたい。

今日の報告会のまとめとして、最後に環境省の堀上室長にコメントいただきたい。

堀上氏（環境省）

- 東北の東海岸では、復興の一貫として「復興エコツーリズム推進モデル事業」を 5 地域でやっている。その一つが久慈市、今日会場に来ている洋野町だが、今年度から 3 カ年は必ずやるということで予算を入れているところ。
- 最近そういう事業を見て気付くのは、非常にやる気がある方が多いが、やる気のある人たちが見えづらいところもある。説明会をするときに、学校形式でやるときには発言なさない人が多いが、ワークショップでグループに分かれたり、座談会形式で車座になると、みんな意見を出す。
- 人材はいないのではなく発掘していないのだろうと思った。やり方の問題も一つ。そういう場を行政なのか、コーディネーターなのか、作らなきゃいけないということを痛感している。
- アドバイザー派遣事業は地域にとっても非常に有用だと思うが、まだまだ行き届いていないというところと、結果がちゃんとフィードバックできているかというところが気になっている。せっかくこういう会をやるのであれば、地域で参加する人を増やしたり、地域ごとにまとめてやっても良いのではないかと思う。
- どこまでできるか分からないが、来年度はブロックに分けて各地で事例発表なり、意見交換なりをもうちょっとできるように、アドバイザーやコーディネーターの方々には、アレンジしていただきたいと思っている。

参考 エコツアーリズムについて

(1) エコツーリズムの基本知識

①エコツーリズムとは

「エコツーリズム」とは、

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた

のことをいう（環境省「エコツーリズム推進会議」（平成15～16年度）における概念）。

言い換えれば、エコツーリズムとは、地域ぐるみで自然環境や歴史文化等、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指した仕組である。

観光客に地域の資源を伝えることによって、地域の住民も自分たちの資源の価値を再認識し、地域の観光のオリジナリティが高まり、活性化させるだけでなく、地域のこのような一連の取組によって地域社会そのものが活性化されていくことを目指すものである。（環境省「エコツーリズムのススメ」より）



参考：
地球のためにできること。エコツーリズム推進ガイド
2007年3月発行

②エコツーリズムの歴史

エコツーリズムは、途上国において、観光客に森林等を見せて経済振興を図ることによって、森林伐採等の自然開発から自然を保護しようとする産業転換を促す考え方として注目された。その後、先進国では持続的な観光振興を目指す概念として論じられるようになった。

わが国では 1990 年頃からエコツアーを実施する民間事業者が、屋久島等の自然豊かな観光地で見られるようになった。環境庁（当時）は、平成 3 年（1991 年）に「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」を実施して、エコツーリズムに関する調査を開始した。1990 年代後半には日本エコツーリズム推進協議会（現日本エコツーリズム協会）等の民間推進団体の設立が相次ぎ、エコツーリズムの普及に向けた動きが加速した。

このような背景を受けて、平成 15 年から平成 16 年にかけて、エコツーリズム推進会議が設置され、国をあげたエコツーリズムの推進がスタートした。環境省は、同会議で策定された 5 つの推進方策を中心に、エコツーリズムの普及と定着に向けた具体的な取組を進めている。

また、平成 19 年 6 月には地域で取り組むエコツーリズムに関する総合的な枠組みを定めた「エコツーリズム推進法」が議員立法により成立し、平成 20 年 4 月より施行された。

③エコツーリズムが目指すもの

エコツーリズムの考え方にに基づき、自然環境の保全に配慮しながら、地域の創意工夫を生かしたエコツーリズムを実現させるため、エコツーリズム推進法では、エコツーリズムを通じた「自然環境の保全」、「観光振興」、「地域振興」、「環境教育の場としての活用」を図り、これらをうまく両立させていくことを基本理念に掲げている。

●エコツーリズム推進の基本理念

自然環境への配慮



観光振興への寄与



地域振興への寄与



環境教育への活用



④エコツーリズムの特徴

自然環境や歴史文化を対象としたエコツーリズムは、以下のような特徴を持っている。

●特徴1 豊かな自然地域をはじめ、多様なフィールドや資源が対象

エコツーリズムは、国立公園や世界自然遺産地域等の豊かな自然地域に限らず、里地里山やまちなか等多様なフィールドや資源が対象になる。

豊かな自然地域

【例】

- ・ 原生林と野生動物に出会う
- ・ 流水ウォーク
- ・ ホエールウォッチング
- ・ フォレストウォーク 等



身近な里地里山

【例】

- ・ マガンの飛び立ち・ねぐら入り観察
- ・ 湧き水の郷と水のある暮らし体験
- ・ 冬野菜の収穫とまんじゅうづくり体験
- ・ 桜の案内人と桜をめぐる 等



人の暮らすまちなか

【例】

- ・ 自然を葉池に積み重ねられてきた地域の歴史巡り
- ・ まちなかでみられる生き物観察
- ・ 運河から見る都市の自然観察 等



●特徴2 「見る」だけでなく、「体験する」「学ぶ」

エコツーリズムは、「見る」だけでなく、五感を通してさまざまなかたちで体験することによって、地域の自然や歴史を深く理解し学ぶことにある。



流氷の上を歩く（知床）



漁船（サツパ船）で海の魅力を体感する
（岩手県田野畑村）

●特徴3 解説を通じた観光対象や地域への深い理解と付加価値づけ

見ごたえのある傑出した観光資源であっても、旅行者だけでその魅力を深く理解することはできない。特別優れた資源でない場合は尚更である。

エコツーリズムは、自然や歴史に精通した地域のガイドが案内役となり、観光対象と旅行者との間にとって解説（通訳）することによって、対象の面白さや魅力を伝える、気付かせるものであり、ゆえに、ガイドの解説によって、さりげない資源であっても付加価値をつけることができる。



●エコツアーリズムにおけるガイドの役割



地域の自然を熟知したガイド
(白神山地)



伝えるのは知識ではなく専門的な情報
(屋久島)



動物の痕跡から自然への興味、気づきを誘導する
(軽井沢)



小道具を使って分かりやすく解説する
(軽井沢)

●特徴4 環境に負荷をかけない旅行スタイル

エコツーリズムは、訪れた地域の自然や歴史文化の大切さを理解する（学ぶ）とともに、それらを保全していくものである。

そのため、エコツーリズムの考え方に基づいたツアー（エコツアー）では、地域の環境に負荷をかけないように、利用ルールに基づいた行動をするとともに、極力少人数を単位としたフィールドの利用が基本となる。



自然環境を守るための利用者のコントロール
(知床五湖利用調整地区)



入口でガイドのレクチャーを受ける（知床五湖）



ガイドを伴った知床五湖一周ツアー

【参考】エコツーリズム憲章

ひとびとが、自然や環境、文化を発見する旅に加わり、
自然のために、小さくても何かを実践し、
そうした旅人を受け入れる地域を、みんなでつくっていけば、
この国土のすみずみにまで、個性に満ちた自然や文化があふれ、
もっとゆたかないのちを楽しむことができる。
一人ひとりが自然を守り、考え、慈しむ。
自然の中にあたらしい光を見る、
「エコツーリズム」はそのための提案です。

ゆっくりと見回してみよう。
見えなかった色がみえてくる。
気がつかなかった香りに気づく。
聞こえなかった歌がきこえてくる。
季節が移っていく。
あざやかに、大地がここにある。

森がどこまでもひろがっている。
どこまでも空が、海がひろがっている。
風がそっと通りすぎる。
水が落ちて、土を潤す。
生きものたちが息づく。
人間のふるさとは、ここにある。

自然はやさしい。温かい。
大きくて、物知りだ。
時に荒々しい。
時にはひどく荒々しい。
人のくらし、歴史や文化は、
そうした自然とともに育ってきた。

大自然から里山や都市の小さな自然まで、
自然のいのちと人のいのちを共振させる。
そういう旅をしよう。
ゆったりと呼吸し、
ゆっくりと見回し、
おおらかな一歩をしるしたい。

「エコツーリズム」は次の3つを実現し、それがずっと続いていくことをめざします。
地域の自然と文化を知り、慈しむ。
元気な地域が自然を守る。
自然と文化を受け継いでいく

(2) エコツーリズムに取り組む地域への支援

環境省では、エコツーリズムに取り組む地域等への支援策として「エコツーリズムガイド養成事業」、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」、「エコツーリズム地域活性化支援事業」を実施する。

①エコツーリズムガイド養成事業

＜エコツアーの質を決定する大きな要素であるガイドの育成を実施＞

- ・ 既存の自然学校等を活用し OJT 等による質の高いガイドの育成
- ・ エコツーリズムに関する求人情報の提供による就労支援

②エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業

＜エコツーリズムの推進に伴う地域の課題解決への支援＞

- ・ エコツーリズム等を活用した地域活性化に取り組む地域に対して、有識者をアドバイザーとして派遣
- ・ エコツーリズムの推進にあたっての課題の解決を支援

③エコツーリズム地域活性化支援事業（交付金）

＜地域が取り組む魅力あるエコツアープログラムづくり等への支援＞

- ・ エコツーリズムやジオツーリズム等に取り組む地域協議会等へ支援
- ・ 地域協議会は多様な主体で構成（市長村の参加は必須）
- ・ 国が地域協議会に対しプログラムづくり等に要する経費の2分の1を交付
- ・ 1 協議会あたりの交付額の上限は 1000 万円



(3) エコツーリズム推進法について

平成 19 年 6 月 20 日の参議院本会議において、エコツーリズム推進法が成立した。

①成立の背景

最近の身近な環境についての保護意識の高まりや、自然と直接ふれあう体験への欲求の高まりが見られるようになってきている。このような背景から、これまでのパッケージ・通過型の観光とは異なり、地域の自然環境の保全に配慮しながら、時間をかけて自然とふれあう「エコツーリズム」が推進される事例が見られるようになってきた。しかし、現在は地域の環境への配慮を欠いた単なる自然体験ツアーがエコツアーと呼ばれたり、観光活動の過剰な利用により自然環境が劣化する事例も見られる。このような状況を踏まえ、適切なエコツーリズムを推進するための総合的な枠組みを定める法律が制定された。

②法律の趣旨

この法律は、地域の自然環境の保全に配慮しつつ、地域の創意工夫を生かした「エコツーリズム」を推進するに当たり、以下の 4 つの具体的な推進方策を定め、エコツーリズムを通じた自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の推進を図るものである。

- (1) 政府による基本方針の策定
- (2) 地域の関係者による推進協議会の設置
- (3) 地域のエコツーリズム推進方策の策定
- (4) 地域の自然観光資源の保全

③今後の取組

エコツーリズム推進法は、平成 20 年 4 月 1 日の施行です（同日、エコツーリズム推進法施行規則公布・施行）。政府は、エコツーリズム推進のための基本方針を作成する（平成 20 年 6 月 6 日閣議決定）。市町村が作成した地域ごとの全体構想は、主務大臣の認定を申請することができ、この基本方針に適合するものが認定される。国は、全体構想の認定を受けた市町村に対して、広報に努める等、地域のエコツーリズム実現に関する施策を推進する。（※主務大臣：環境大臣、国土交通大臣、農林水産大臣、文部科学大臣）

④エコツーリズム推進法に基づく全体構想認定団体

平成 25 年 3 月現在で、下記の 3 つの協議会がエコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定を受けている。

- 飯能市エコツーリズム推進協議会（埼玉県飯能市）／2009 年 9 月 08 日認定
- 渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会（沖縄県渡嘉敷村）及び座間味村エコツーリズム推進協議会（沖縄県座間味村）／2012 年 6 月 27 日認定
- 谷川岳エコツーリズム推進協議会（群馬県みなかみ町）／2012 年 6 月 29 日認定

エコツアーリズム推進法の概要

Ecotourism

目的

【地】 域で取り組むエコツアーリズムに関する総合的な枠組みを定めた法律です。エコツアーリズムを通じて、我が国の自然環境を保全し、後世に伝えていくことをはじめとして、国民の健やかで文化的な生活を実現していくことを目的としています。

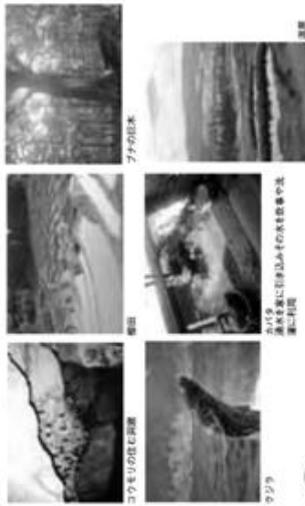


自然観光資源の定義

【私】 たちの暮らしは、自然と密接に関わり、自然と共生してきました。自然環境の保全を考えていく上で、自然と密接に関連する人々の生活文化についても自を向ける必要があります。

「自然観光資源」には動植物の生息地や生育地などの自然環境のほか、自然と密接に関わる風俗慣習や伝統的な生活文化に関わるものも含まれます。

自然観光資源の例



基本理念

【自】 然環境の保全に配慮しながら、地域の創意工夫を生かしたエコツアーリズムを実現させるためには、エコリズムを通じた自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の場としての活用を図り、これらをつまやく両立させなくてはなりません。法律にはこの四つの項目を基本理念として位置づけています。



自然環境に配慮しましょう

登山客で車内を汚れるし、自然のかけやすさだけ気をつけてくれるようね。

ちんちんはまきものけつれがわりあって、黒いのがフランスの手で取りなすていらぬです。

そつだね、まはだけごう!

地域の観光の活性化に結びつけましょう

この風は、色んな木がまよいて、あがらぬ。

なるほど!

楽しそうだな、私もやってみようかな。

うちの村は、こんなにいいところだったのが...

地域への誇りや生きがいの創出の場に結びつけましょう

自然の大切さを学びましょう

石ころの裏には、きれいな川にしみかいた、かわアゲられるよ。

土がぬかるらうて、草も多いよ。

事例紹介



歴久島地区
自治体主催で行った、そのほか多岐の民間団体の協力を得て、エコツアーガイドの養成講座を開催。



佐世郡地区
地元の自治体の主催で開催して、エコツアーリズムの推進に貢献している。エコツアーガイドの養成講座を開催。



鹿野地区
事務局主催による自然環境の保全や地域活性化に貢献している。エコツアーガイドの養成講座を開催。



エコツーリズム推進法の概要

Ecotourism

国の役割

① は、基本理念をもとにエコツーリズムの推進に関する基本的な方針を定めます。
 また、協議会の活動状況の公表、協議会への技術的助言、情報収集及び広報活動により、エコツーリズムを推進していく地域に対して支援を行います。
 さらに、市町村から申請された「エコツーリズム推進全体構想」の認定を行います。



エコツーリズム推進協議会

地域の貴重な資源を次の世代に残していく。



市町村長は、協議会が作成した全体構想を主務大臣に報告します。認定を求める場合は、認定を申請します。



市町村の役割

② コツアアに係わる事業者、地域住民、NPO法人、専門家、土地の所有者、その他エコツーリズムに関連する活動に参加する人、国や県などの関係行政機関による話し合いの場（エコツーリズム推進協議会）を組織して、自分たちの地域で自然観光資源をどのように守りながら利用していくのかなどをまとめた構想（エコツーリズム推進全体構想）を作成し、運営します。
 また、この全体構想に基づき、特定自然観光資源を指定して保護措置などを図ります。



認定申請があった場合は、主務大臣により審査が行われます。主務大臣は基本方針に適合すると認められる全体構想に対して認定をします。

全体構想が認定されることのできるようになること

- 1 地域資源の保護
これまで法的に保護措置が担保されてこなかった自然観光資源についても「特定自然観光資源」に指定することで、別冊や冊子、除去、観光旅行客等に著しく迷惑をかける行為を禁止するなどの保護措置を講じることができま。
- 2 立入りの制限
必要に応じて、特定自然観光資源が所在する区域への立入り人数の制限を行うことができます。
- 3 広報
国が、認定地域の取組を全国にPRします。



全体構想認定団体



埼玉県飯沼市のエコツーリズム推進全体構想が平成21年9月8日に認定（認定第1号）
 里地蔵山の身近な自然、地域の産業や生活文化を生かした取組

【参考】エコツーリズム推進法のあらまし

1. 目的（第1条関係）

エコツーリズムが①自然環境の保全、②地域における創意工夫を生かした観光の振興、③環境の保全に関する意識の啓発等の環境教育の推進において重要な意義を有することにかんがみ、その基本理念や基本方針の策定その他エコツーリズムを推進するために必要な事項を定めることにより、関係する施策を総合的かつ効果的に推進し、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的としています。

2. 定義（第2条関係）

(1)自然観光資源

- ・動植物の生息地または生育地その他の自然環境に係る観光資源
- ・自然環境と密接な関連を有する風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源

(2)エコツーリズム

観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内または助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動

3. エコツーリズムの基本理念（第3条関係）

- ・自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されるとともに、実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え、これを反映させつつ実施すること
- ・関係事業者が自主的かつ積極的に取り組むとともに、観光の振興に寄与することを旨として実施すること
- ・地域の多様な主体が連携し、地域社会及び地域経済の健全な発展に寄与することを旨として実施すること
- ・環境の保全についての国民の理解を深めることの重要性にかんがみ、環境教育の場としての活用が図られるよう配慮すること

4. 基本方針（第4条関係）

政府は、基本理念にのっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針（内容は(1)から(5)までのとおり）を定めます。

(1)エコツーリズムの推進に関する基本的方向

(2)エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

(3)エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

(4)エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項

(5)生物の多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項、その他重要事項

5. エコツーリズム推進協議会（第5条関係）

市町村は、エコツーリズムを推進しようとする地域ごとに、事業者や地域住民、NPO法人、自然環境や観光の専門家、土地所有者、関係行政機関などで構成するエコツーリズム推進協議会（以下、協議会）を組織することができます。

協議会は、エコツーリズムを推進する地域や実施の方法、対象となる自然観光資源を明らかにする全体構想（エコツーリズム推進全体構想）の作成や関係者の連絡調整を行います。

6. 全体構想の認定（第6条、第7条関係）

市町村は、組織した協議会が作成した全体構想について主務大臣（環境、国土交通、文部科学、農林水産の各大臣）の認定を受けることができます。

主務大臣は、認定をした全体構想についてインターネットの利用などにより周知します。

7. 特定自然観光資源の指定（第8～10条関係）

市町村長は、主務大臣の認定を受けた全体構想に従い、保護措置を講ずる必要がある自然観光資源を特定自然観光資源として指定し、汚損、除去等を禁止することができます。

また、指定した特定自然観光資源が著しく損なわれるおそれがあると認められる場合は、立入りについてあらかじめ市町村長の承認を受けるよう制限をすることができます。

8. 活動状況の公表等（第11～16条関係）

主務大臣は、毎年、協議会の活動状況を取りまとめ、公表します。また、協議会の構成員に対する技術的な助言などを行います。

9. エコツーリズム推進連絡会議（第17条関係）

政府は、環境省、国土交通省、文部科学省、農林水産省その他の関係行政機関の職員で構成するエコツーリズム推進連絡会議を設け、エコツーリズムの総合的かつ効果的な推進を図るための連絡調整を行います。

10. 罰則（第19条関係）

特定自然観光資源が所在する区域内で禁止されている行為（汚損・損傷、ゴミの投棄、騒音、占拠など）を市町村職員の指示に従わないでみだりに行った場合、30万円以下の罰金に処されます。

11. 施行期日

この法律は、平成20年4月1日から施行されます

【参考】エコツーリズム推進基本方針の概要

【法律上の位置付け】

エコツーリズム推進法（平成 19 年法律第 105 号）第 4 条に基づき、政府は、基本理念のっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針を定めることとされており、手続については次のとおり定められている。

・環境大臣及び国土交通大臣は、あらかじめ文部科学大臣及び農林水産大臣と協議して基本方針の案を作成し、閣議の決定を求める。（第 3 項）

・環境大臣及び国土交通大臣は、基本方針の案を作成しようとするときは、あらかじめ、広く一般の意見を聴く。（第 4 項）

・環境大臣及び国土交通大臣は、閣議の決定があったときは、遅滞なく、基本方針を公表する。（第 5 項）

・基本方針は、エコツーリズムの実施状況を踏まえ、おおむね 5 年ごとに見直しを行う。（第 6 項）

【概要（主な記述内容）】

はじめに

・地球環境問題が深刻化する中、人々の主体的な行動やライフスタイルの変革に結びつかないのは、地球とつながっている（自然の恵みで人も生きている）実感が決定的に不足しているため。

・エコツーリズムは、人と自然のつながり、人と人とのつながりを取り戻し生物多様性を保全しながら元気な地域社会をつくるものであり、観光旅行者や関係する人々が地球環境とつながる糸口にもなるもの。

・エコツーリズムに取り組む地域への国による認証制度が始まった。

第 1 章エコツーリズムの推進に関する基本的方向

・推進する意義は、①ルールの設定による自然環境の保全、旅行者や住民などの環境意識が高まり地域の環境から地球環境まで含めた保全に関する行動につながる効果、②地域固有の自然環境や生活文化等の魅力を見直す効果、③観光地としての競争力の向上・新たな観光振興の可能性などに加え持続的な地域づくりに対する意識の高まりや住民の誇りにつながる効果。

・進め方を次のように整理。①関係者が話し合い、②地域の宝を再認識・発見し、③宝を大切に磨き、④観光旅行者にうまく伝え、⑤その感動をさらに磨く原動力とし、⑥地域の活性化につなげる、という相互に関連する一連の行為。

・「大切にしながら」、「楽しみながら」、「地域が主体」という視点が基本。

・エコツーリズムの推進によって我が国で長期的に目指す姿を明示。

・重点的に取り組むべき当面の課題として、①人材育成、②取り組む地域への支援、③戦略的広報、④科学的評価方法等に関する調査研究、⑤他施策との連携を提示。

第 2 章エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

・「エコツーリズム推進協議会」の組織化にあたっては、①協議会の効率的な運営に配慮しつつ、②特定事業者、地域住民、NPO 等、有識者、土地の所有者等、関係行政機関、関係地方公共団体など地域の多様な主体の参加・連携が必要。

・協議会は、①原則公開とし、透明性を確保するとともに、②相互に情報を共有し、関係者間の合意形成を図ることが必要。

第 3 章エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

・エコツーリズムの実施にあたっては、対象となる自然観光資源などが損なわれないよう、事前に「ルール」などを決めて「ガイドランス・プログラム」を実施し、自然観光資源の状態を継続的に「モニタリング」するとともに、その結果を科学的に「評価」し、これをルールや活動に反映させるという「順応的な管理」による進め方が重要。

・「ルール」には、自然観光資源が損なわれることを防ぐため、①罰則のような一定の強制力を必要に応じ持たせるものと、②自主ルールのように関係者間の内発的な取り組みとして実施するものがあり、安全確保や住民の生活への配慮などの目的も必要に応じ検討することが望まれる。

・「モニタリング」の実施にあたっては、①原生的な自然の区域では、専門家や研究者など積極的な関わりを得てよりきめ細かく実施し、②里地里山などでは、ガイドや地域住民などが主体となってモニタリングを行い、その結果を専門家や研究者が評価するなど、地域の自然的社会的特性に応じた実施することが重要。

・エコツーリズムの推進にあたっては、①地産地消の取り組みなど農林水産業をはじめとする関連産業との連携・調和、②他の法令や関係法令に基づく各種計画などとの整合、③地域の生活や習わしへの配慮などが必要。

第 4 章エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項

・全体構想が認定されると、①これまで保護措置が講じられていなかった自然観光資源を「特定自然観光資源」として指定し、法的に保護することで、持続的かつ質の高い利用が可能となったり、②地域のブランド力が高まり、また国が積極的にその周知に努めることから、集客力の向上につながるなどの効果が期待される。

・認定の基準として、①協議会の参加者や運営方法、その他各種手続きなど全体構想が基本方針に適合すること、②プログラムの実施主体やモニタリングの役割分担など全体構想の内容が確実かつ効果的に実施される見込みがあることといった基準を明示。

第 5 章生物多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項その他エコツーリズムの推進に関する重要事項

・他地域からのメダカやホテルの導入などによる遺伝子レベルでの攪乱にも配慮することが必要。

・里地里山などでは、維持管理活動をプログラムに取り入れることによる生物多様性の回復も期待。

・潜在的なニーズがある「子ども」の視点が重要。宝探しやプログラムづくりへの地域の子どもの積極的な関与が地域への誇りや愛着にもつながる。長期宿泊体験など学校教育との連携も重要。

・有識者からの助言を受けつつ、関係省等での連携を強化。

環境省請負業務

平成 24 年度エコツアーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集

平成 25 年 3 月発行

公益財団法人**日本交通公社**

東京都千代田区大手町 2-6-1 朝日生命大手町ビル 17 階

リサイクル適正への表示：紙へリサイクル可
この印刷物はグリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」にかかる判断の基準に従い
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料「A ランク」のみを用いて作成しています